
Things as they should be are

黒天使

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Things as they should be are

【Nコード】

N0777P

【作者名】

黒天使

【あらすじ】

とある人物が『ゼロの使い魔』とよく似た世界のとある人物に憑依した。

彼はとある目的を持って原作(?)に介入(?)する。

一人の人物の無邪気な行動、それが3人の運命をもてあそび、全てが始まった。

*注：この話は18巻までの内容と呼んで更に独自設定を加え書いています

なのでそれ以降に判明した事実とは違った形で話が進む可能性があります
なりあります

というか、その独自設定のせいで確実に原作から乖離します

最初に断言しておきます。

ハッピーエンドな話を読みたいのなら、この話はお勧めしません。
確実に鬱エンドに近い形になりますから。

書き始めてそうそうなのですがスランプです

なので下書きレベルでも投稿することにしました

御迷惑をおかけします

初めに（お知らせ）

まだかなりの部分が構想段階ですので更新はとんでもなく不定期になります

*この作品の主人公はご都合主義にまみれています。

*これは主人公最強ものです。

*この話にはこれでもかと言うぐらい独自設定・独自解釈がなされています

恐らく終盤辺りはこれが洪水状態で押し寄せるとされます

*この話には原作アンチがなされており、進めば進むほどひどくなるとされます。

*この小説に原作『ゼロの使い魔』18巻までの設定は引き継いでいますが、それ以降に明かされた新事実が反映されるかどうかは分かりません。

*友人にプロットを見てもらった所、「何でオリジナルを書かない」「一次で無いことは確かだが、二次と言っているかどうか微妙」と言うお言葉をもらいました。つまりそれ位改変しています。

*この小説、プロット及び設定の関係でハッピーエンドとは言い難い状態に帰結する可能性大です。

これらに対し拒絶反応がある人は先に進まないことをお勧めします。

修正情報

2010/11/28・題名決定『Things as the
y should be is』

直訳すると『あるべき姿は』です

設定 ネタばれ注意

・ヘクターⅡジャックⅡレイモンド

クリーム色の髪、黄土色の目

ガリア出身

『シャンバラ』統括理事会

『ヘリユック商会』の代表

『^{チーム}仲間の一人』

属性は『風』

しかし、彼は魔法を使おうとはせず、使ったとしてもコモンマジックを多用する。

なので戦闘の場合は殆んどが銃や剣などで終わらせる。

おっとりした性格、何故かユアンのことをすぐに認めた

魔法が下手なわけでは無く、むしろかなりの才能を見せている。

魔法を使いたがらないのには理由があるらしいが、その原因は彼の両親すら知らない

実は領地経営の基盤は彼が作っていて、それが買われ『ヘリユック商会』の代表に若くして選ばれた

使い魔は森フクロウ

・アルバートⅡアラナス

ロマリア出身

野性味のある、赤髪・金目の青年

二つ名は『炎帝』

『チーム仲間の一人』

元ガリア宮廷魔導師、現在ゲルマニアで色々と動いている

シャンバラの戦闘部隊『獄炎』の隊長

『火』のメイジで『炎』に特化している

オリジナル概念魔法『燃』と『強化』を使いこなす

使い魔は『フェニックス鳳凰』

・エミリーⅡアラナス

ロマリア出身

水色の髪、碧色の目の女性

『チーム仲間の一人』

『シャンバラ』の誇る最高位の医療集団『アイスクラピウス』所属

『水』のメイジだが、『医療』を専門としているため自然と魔法もそちらに特化、結果『光』『闇』をユアン達とは違ったやり方で習得した

概念魔法は下手

現在はアルビオンで診療所を開いている
現在ヘクターと付き合っている。

使い魔は『水韻竜』《長》』

双子の兄であるアルバートが野性味なことに対し彼女は思量派、
と言うより達観した性格をしている。

とはいっても、アルバートはなんだかんだで色々考えていてしかも勘が鋭いし、彼女も意外と激情家なので双子らし言っちゃ双子らしい

・『ユアン』ノッド』セレス』アル』リッター』

本作の主人公

憑依者で元日本人

理系分野の若き権威だった

『仲間^{チーム}の一人』

『土』、更に言えば『鍊金』に特化した魔法使い
更に言えば概念魔法である『鍊金』をさらに突き詰めた凶悪な概念魔法を使用する

二つの目的を達成するため、ハルゲニアに来た。
一つは『エルフ達と同じ目的』、そしてもうひとつは『彼自身の目的』

使い魔は二匹『白龍・黒龍』

・ディオ＝エチユス＝ノア

『風』のメイジ

(仲間)メンバーの中でおそらく一番強いらしい

ユアンと同等かそれ以上に凶悪な概念魔法を使用することができる

過去のある事件のせいで極度の人間不信になっており、信用はしても決して信頼はしないようだ

事実この人物は、最も気を許しているであろうユアン達のことですえ、もし袂を分かつなら一瞬の迷いなくすぐに切り捨てるといい、実際にそれを実行するだろう。

彼自身、ユアン達を『最上位に利用する価値のある者として』信用していると言っている。

そうでない人に対しては、もはや『情報の一部』としか見なししていない。

見下しているのではなく、『扱わない』のである。

彼をある程度以上知っている人は全員、彼を『絶対に敵対したく

ない奴No.1』に上げている

ユアン曰く、恐ろしく扱い方が明確で容易であり、同時に決して油断できない人物

使い魔『???』

魔法の実力は

普通メイジ	<<	高位メイジ	<<	ブリミル信仰の壁	<<
一般エルフ	<	ヘクター	<	エミリー	<<
人として越えるのはどうかと思われる壁	<<	大精霊			
アルバート	ユアン	デイオ			

但しこれは強さで考えた場合

同時に魔導師としての格もこんなものだが、魔法の知識レベルとかの話になるとエミリーとヘクターはアルバートを超え、

メイジ	<<	ブリミル信仰の壁	<<<<	アルバート	<<
エミリー	<<	ヘクター	<<	ユアン	

となる

デイオの知識レベルは秘密

因みに内包する精神力は

一般メイジ << デイオ < エミリー < アルバート <
ユアン < ヘクター

しかし、この五人は新理論の魔法を使うため、魔力量をあまり気にせずに済んでいる

『チーム
仲間』

ユアンがある目的を持って作った組織

大きく分けると『実行組』『傍観組』の二つに分かれる

ジョゼフ・ユアン・アルバート・エイミー・エルフ達は実行組
デイオ・ゲルマニア・アルビオン組達は傍観組

だが、実行組だからと言って全員が動き回っている訳では無く、
又傍観組だからと言って全員が我関せずで居るわけでもないらしい
『チーム
仲間』の掲げる目的はエルフ達の『本来あるべき摂理への回帰&
再発対策』だが、ユアン達はさらにそれぞれ独自の目的を持っている。
彼等は己の目的を達成するのと矛盾しない行動を行えるため、又

は己の目的を達成するのに役立つため参加しているようだ

『魔法』

- ・『コンスぺル』

口頭で発動する無属性の魔法

- ・『系統魔法』

『火』『水』『土』『風』からなるプリミルが作ったとされる魔法
形態

精霊を無理やり従わせて行う魔法、相当効率が悪い
なぜ彼がこんな形にしたのかは殆んどのが知らない

また、この中には『虚無』と言うものが存在するが、厳密に言う
とこれは系統魔法とは別種のものであるらしい。

『^{スぺル}魔法言語の詠唱』

数千年前に現れた人物『ブリミル』が作り上げ、広めた系統魔法を使つたために必須の言語だと言われているが？

『虚無の担い手』

虚無が使える者達のこと。

彼らに共通することは普通の者とは違い『虚無』が使える、一方で他の系統魔法が一切使えない

ユアンは、『果たしてあれが神の祝福と言つていいのか……それとも呪いと言つべきか』
と言つていたが？

・『精霊魔法』

世界と重なる理の存在である精霊と契約を行ふなり友好を結ぶなりして、精霊に『お願い』することによつて発動する魔法

魔法の発動は精霊が殆んど行つてくれるので、魔力消費はほぼゼロと言つていい。

また、この魔法に明確な『属性』は存在しない。

大精霊が行うのもこの魔法、精霊に頼むのではなく、自分で行ふという違いは存在するが。

『精霊』

世界そのものの一部と言っているいい存在。

彼等を制御すると言うことは世界を思いのままに、それこそ理のレベルで操ることが可能だと言っていることを表す。

しかし理を変えようとしてもその他の精霊達が元に戻そうとするので、普通は自分の周辺を一時的に変えるのが限界で、世界そのものの理を半永久的に変えるのは不可能に近い

大抵の精霊は自己意識が小さく無意識の行動を取っているが、まれに様々な要因により確固たる自己意識を持った強力な精霊が現れることがあり、ユアン達は便宜上彼等のことを『大精霊』と呼んでいる。

彼等はその特性上、己の意思を周囲の精霊に同調いさせることでかなりの広範囲まで魔法を使うことが可能

大精霊達は自然エネルギー『火などの属性』が強く集まり数多の精霊と混じり合うことで偶発的に生まれるので、彼等は自分の生まれる要因になった属性を得意とする

『魔術』

ハルゲニア地方以外では一般的な魔法形態

簡単に言えば精霊と契約をしない精霊魔法

魔力と共に精霊へ意思を伝えることによって魔法を発動する
ブリミル式と同じく触媒を要するが、必須では無い。

無詠唱でも出来るが、言葉を使った方が確実

『?????』

ユアン・アルバート・ディオ・エミリー、他ごく数名だけが使う
魔法。

ブリミル式の魔法と酷似しているが、別物である。

一見して分かるおおきな違いは

スペルは必要だが、無詠唱・短縮詠唱が可能
必要魔力が大きく下回る
の二点がある。

「地名など」

『ハルゲニア』

この世界の名前……………と四大国の者達は思っているが、其処以

外ではそう呼ばれてはいない

それ以外では『レディアント』と呼ばれている

よってその他の場所は四大国周辺を『ハルゲニア地方』と呼んでいる

『シャンバラ』

ガリアにある広大な荒野を開発して作られた『学術機関』

巨大な壁に囲まれた町及びその周辺地帯をしめす

壁の外側には巨大な農業地帯や簡単な工場があり、壁の内側へ行くには四方向にある門のどれかを通るか、空路を使うしかない

この町に入るには、身分の提示が要求されるため、かなりの情報流出が避けられている。

顔から指紋から出生から厳しい調査が行われた上で身分証が発行され、しかもその情報は保存されるため、二重登録などはめったに起こらない

つまり逆に言えば、一度登録されれば二度とその人物は自分を偽ることが出来ない

その旨が最初に説明されるため、諜報部員は正式に入るのをしり込みする

だからと言って侵入しようにも

壁の外側には水の張られた巨大な堀があり、確かにそこから壁の中をくぐるようにして内部に通じてはいるが、そこに水精霊が住みついているため潜って侵入など狂気の沙汰

壁を登ろうにも、その壁は数十メートルの高さを誇りある一定の高さを超えると風精霊の起こしている暴風に見舞われる。

壁に穴をあけようにも、壁自体鉄板などで何階層にもなっている上とても厚くしかも一層一層丁寧に固定化をかけられいるためくりぬくのは不可能に近い。

穴をあける前に見つかるのがおち

なら空路と言えば、シャンバラ内の空港には門以上の厳しいチェックがなされているので論外

しかも、ある一定のレベル以上になると、貴族以上の徹底的な身分確立（具体的に言うと、自国の王直々の身分保証書とか許可証発行とかが必要）がなされるため、重要機密に触れることは不可能と言ってよい。

又、王に身分証明書と許可証を書いてもらうなど正式な手続きを踏んで入ろうにも、この町は治外法権が認められており、この町では全ての人が貴族平民関係なく平等に裁かれるので、貴族達はこの地を馬鹿にし来ようとするしない

これも情報が出ない理由の一つだったりする

『アヴァロン』

ディオの所属する組織の総本山。

天空に浮かぶ複数の島から出来た学術機関。

学術機関とはいっても、此処は同時に『アヴァロン』と言う一つの国であり、
数々の島で栽培されたり、飼育されている動植物により自給自足が可能。

因みに、勿論ハルゲニア地方の国々が此処が一つの国とは認めていない――と言うか現状知らない――が、此処を手に入れようと動こうものなら、ハルゲニア地方以外の国を敵に回すことになる。
……まあ、それ以前に此処の武力だけで一方的に焦土に変えられるだろうが

シャンバラが科学技術を基盤にした研究を行っているのに対し、
此方は魔法技術を基盤にした研究を行っている。

【三大商会】

セレナイトの最も大きな3つの商会
それを知らぬはハルゲニア地方だけ。

『ヘリユック商会』

シャンバラ、更に厳密に言つと『ヘクター』が組織している商会。

『オクタヴィア商会』

地球で言う北アメリカおよび南アメリカを中心に勢力を伸ばしている商会。

単純な規模は三つつのうちで最も大きい。

『ヘルメス商会』

アヴァロンの商会で資金源。

三大商会の中では最も規模が小さい。

そんな商会が三大商会に数えられているのは、アヴァロンの生産した超高品質の魔道具を斡旋しているのが理由に挙げられるだろう。

この三つはの認知度は、当然誰もが知っているほど高い商会なのだが、彼等は一切ハルゲニア地方に（ヘリユック商会を除き）進出していないし、そもそもそんな情報は入って来ていないため、そこでの認知度はゼロに等しい。

無知とはかくも恐ろしい。

『魔石』

魔法の力が凝縮した石であり、各属性ごとに存在する
又、そのためその属性の魔法を強化する触媒にはもってこい
『アヴァロン』が人口魔石の精製方を独占している。

『風石』

風の属性が込められた魔石、常に周囲に風が渦巻いている
又石自体がかなり軽く、それに接する物体の重さも軽くなる
見た目はエメラルドに似ている

『火石』

火の属性が込められた魔石、常に周りに熱を放出している
魔石の中でもかなり扱いやすく、改良もたやすい。
同時に石炭の様な燃料としても使用可能であり、又火石の許容量
限界までエネルギーを充填させ一気に発散させればちょっとした爆
弾になる。

見た目はルビーに酷似している

『水石』

水の属性が込められた魔石、石はひんやりしていて周囲の空気が
潤っている。

冷蔵庫代わりにこれを使用している場所もある。

見た目はアクアオーラに酷似している

『土石』

土の属性が込められた魔石
魔石の中でも圧倒的に硬い。

周囲の土が普通の何倍ものスピードで元気になるので、『アヴァ

ロン』の農業を行っている土の島の中央には大きな土の精霊石が鎮座している

見た目はタイガーアイ

『光石』『闇石』

光石はクォーツがダイオードのように白く輝いており、闇石はブラックダイヤモンドとよく似ている

通常はめったに生成されないが、『アヴァロン』によって他の魔石と共に人工的に生成・量産が行えるようになった

現在その技術を『アヴァロン』がその他のマジックアイテムの生産技術と共に独占しているので、『アヴァロン』の特産品になっている

1 始まりと完成のプロローグ

「うあゝ うあゝ――――――――」
(なんじゃこりゃ――――――――――)

あ．．．．．ありのままに今起こった事を話すぜ！

『ふと目を覚ますと幼児になっていて、血まみれの女の人に抱かれて森の中をはしっていた！！』

な．．．．．何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何が起きているのか全く理解できてねえ．．．．．

頭がどうにかなりそうだ．．．．．召喚だとか迷い込みだとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わってるぜ．．．．

そう………現在進行形で！！

いや、落ちつけ俺、よく考えるんだ

どっかの誰かが言ってたじゃないか『物事には必ず理由がある』と
！！

何でこの状況になっているかよく思いだすんだ 俺！！！！

よし………まず俺の名前は『二洞 徹』^{にろう てつ} 24歳だ………少なくとも少し前までは

俺は学会で発表する論文を仕上げるために研究室に閉じこもっていた

そしてひと段落つこうとして………？

気が付いたら

『俺の手を引いて逃げる母らしき人がいて
どうやら猛獣に追われているらしく、母親は息子（俺）をつれ、重傷を負いながらも獣をはねのけ逃げる
だが俺も母親ほどではないが結構重傷で動けなくなり、母親は俺を抱えて走り出した』

という状態だった

うん・・・なんか違和感あるけどこんなところか

さて・・・此処から導き出されるものは

[illegible]

きねえ

ってか心なししか体から力が抜けてってるし思考に霧がかかって来て
る・・・

気が付いたら死にかけの幼児になってるって何なんだろうほんと

あゝもうすぐそこまで獣が追いついて来てるよ

ああ・・・・・・ほんとはよく分からないけど、とりあえず短い人生だったな

俺は絶望の表情をしつつも懸命に走る母（らしき人）に何もしてやれないもどかしさを何処か感じつつ、そんな他人行儀なことをボーツとする頭で考えていた

だがそんな時、

ゴウ・・・

俺達を守るように炎が立ち起こり、周りの獣たちがそれに巻き込まれ燃え尽きて行き

カサ・・・カサ・・・

「ホウ・・・人間か・・・こんなところまで来るとは珍しい・・・」

俺達の目の前に老人が現れた！
しかも……………

「えうは〜？」

（エルフ？）

そう、エルフだった！！
間違い無い！！

……………いや、判断材料尖った耳だけなんだけどね

悪魔とかの可能性もあるんだけど……………まあ、なんて言うかノリで

それにしても力が入らないせいかやっぱうまく発音できないな……………

「ム……………怪我をしておるな」

ぼんやりと考えていたら件の老人がこちらに駆け足でやって来た

「く……………これは……………ひどい……………」

そして老人が顔をしかめつつ母親の方に手をかざ……………

「この子を……ユアンを……」

そつとすると母が老人に震える手で俺を渡した

「お願いします……この子を……名前は『ユアン
ⅡノッドⅡセレスⅡアルⅡリッター』……どうか……」

「……分かった」

しばしの躊躇いの後、俺を抱きかかえ直した老人が頷く

それを見て母は安心したような表情を取り……

その場に崩れ落ちた……

「かあ・・・さん・・・・・・・・」

グッタリとした状態の俺から何故か自然とその言葉が漏れた

なぜか胸が苦しい

「手遅れじゃった・・・・・・・・限界を超えてまで・・・・・・・・彼女は親の鏡じゃ・・・」

老人は呟き、ゆっくりと手を前にかざし、それを流れるようにふるう

27

すると母親の周囲の地面がゆっくりと降下していき

その上に土が覆いかぶさり

そして最後に何処からともなく石が現れそこに鎮座した

石に表面に勝手に字が刻まれる

『何よりも子を愛す偉大なる母親 此処に眠る』

「そなたの願い、全身全霊を持って叶えさせてもらおうぞ。」

そして意識を失いつつある俺の耳に

その言葉が響き渡った

2 小さき鼓動

「・・・・・・・・知らない天じ・・・・・・・・いや星空だな。 月もだけど・・・・・・・・」

ぼそぼそ呟きながら俺は体を起こす。

「ほ、ようやく目を覚ましたか・・・・・・・・」

ふと声がかかって来た

ぼんやりと声のした方向を無理と俺を看病してくれていたらしいエルフ(?)の爺

「ここは・・・・・・・・」

「お主を拾った所からいくばくか西の場所だ・・・・・・・・」
さて、ユアン。

今のお主の状況は分かるか？」

ユアン・・・・・・・・ね・・・・・・・・

俺は目を閉じ・・・・・・・・思考を巡らし・・・・・・・・気付き・・・・・・・・
そして苦笑いを浮かべた・・・・・・・・

ああ………そういつとか……と。

▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼
▼

とりあえずその後のこととか話す

まずあの時点で俺が感じたあの違和感の理由が分かった

それは目覚めた時点以前の状況がなぜか分かったということだったのだ。

考察した結果どうやら俺『ニ洞徹』^{ニツウツツ}という存在がこの体の主『ユアン』ノッド『セレス』アル『リッター』と融合したらしいという結論に達した。

水に映った姿を見てみると幼少期の自分の姿と酷似していたた

おそらく此処は俺の元いた世界とは異なった、いわゆる異世界であり、この少年はこの世界の自分と近似した『精神』を持つ存在だったのかもしれない。

此処が地球とは全く異なっていると云う結論に達した原因は星空である。

赤と青の二つの月があるというのもそうなのだが、星の配置俺の居た世界とは全く異なっていたのだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・なめないでほしい。

これでも前世のある時俺は『サバイバル』なるものに興味を持ち『もうお前ならナイフさえあればジャングルからだって静観できると太鼓判をもらったほどだ

夜、星座によつて大まかな方位、さらには今の月を確認するのは太古からの知恵なのである

《閑話休題》

また、どうやら俺が融合した時、この少年の『意識』はズタズタだったらしく、それをどうにか存続させるため俺が取り込まれ、『意識』のほとんどが俺となる形で同化した可能性が高い。

これが真だとすれば、何らかの理由でこの世界に來た俺の意識がこの少年と融合した説明がつく。

今の俺の意識は『付け加わった方の俺』に酷似していて、この体の『本来の俺』と両方の記憶を持っているという点も以下同文。

だが、ふとこの体の両親のことを思い出すと不思議と締め付けられる気分になるのは『俺』の意識中に確かに『ユアン』が含まれている証拠なのだろう

俺が『ユアン』と同化している証拠はもう一つある

引っかけりはあったのだが、意識せずにこれを行っていたのでこれに気がつくまでに数日かかり、気がついた時はまさに青天の霹靂だった

まあ、それはおいといてだ。

ともかく結論から言うところの世界の『言語体系』は『二洞の居た世界』とは違ったのだ。

なんて言うか英語とドイツ語を合わせてさらに少々手を加えた？みたいな形式なのである

そしてこれに気がついた時俺は先に記述した考察を確信に変えた

確かに俺は前世で研究三昧だったため同時に複数の言語を習得するに至っており、英語とドイツ語も現地人レベル……つまり所謂『英語脳』のようなもので使用できるようにはなっていた。

だが、いくら似ているとはいえ、少なからず違いの存在する言語を

此処まで流暢に操れるのはおかし過ぎる。

これを持って『記憶』だけでなく『本来の二洞の意識』と『本来のユアンの意識』は融合しているという確信に至ったのだった

次に『本来のユアン』についてだが……………

俺が住んでいた場所は『ロバ・アル・カリイエ』と言う、『二洞としての俺』が居た地球で言う『第一次産業革命』後期……………つまり蒸気機関が主流の文明を持ち、王権性の超巨大王国だったようだ。

そしてなんと俺はその国の皇帝の第十八子……………十八番目の皇子と言う位置にいたらしい……………果てしなくため息の出る数値だと思っただが……………普通は、少なくとも俺の居た世界では

だがそれでも、この国では王位継承を十分狙える位置だったらしく外部からの政敵や他の皇子・皇女らの脅威にさらされ、そしてついには双子の兄（第十七皇子）の謀略に落としいられ、なんだかんだで自分を兄の脅威から庇護していた母親とともに国を追い出され……………森に迷い込み

あの状況になったようだった

……………ちなみにジツチャン（あのエルフの爺さんのこ

と・本名はジーニアス（聞いて確かめた）には『本来のユアン』の経緯を語った

その際、復讐をするつもりかと聞かれたが、権力闘争は疲れたと苦笑いをしながら答えた。

実際その質問をされた時、俺の中で確かに怒りはくすぶっていたが、同時に疲労感を味わっていたのだ。

んで、行く当ての無い俺はジツチャンと行く当てのない旅をするこ
とになった

ちなみにジツチャン、普段は耳を覆い隠す大きさの帽子をかぶり、さらに人通りの多い場所では魔法を使って自分の耳を人間と同じようにしていた

理由聞いてみると西方の国々ほどではないが人間とエルフの中は悪いため、ばれないための対策なのだと。うん、確かに『とにかくエルフは恐ろしんだ』的なことは言われてた。

じゃあなんで最初会った時、帽子をかぶらず、変身魔法（？）も使わず来たんだよジツチャン？

おっちょこちよいか？

まあともかく、そんな旅の道中で俺はジツチャンからまだ知らなか

った言葉や文字を教えてもらったり、『ユアン』が知っていたのは違う体系の魔法・・・精霊と契約を行うことによって発動する『精霊魔法』なるものを教えてもらった。

ジツチャン曰く驚くほど筋が良い・・・エルフ顔なしだと呟いていた。

でもさ、この魔法ざっくりと言えば精霊に頼んだら終わりじゃん？

身を自然と合わせるようにして、精霊と意思疎通できるようになるまでは大変だったけど

一度うまく行ったらむしろ向こうから語りかけて来てくれるんだけど？

そう聞いたらじいちゃんが目を見開いてた。　なんでだ？

・・・ああ、そうだ。　魔法について言ってなかったな。

エルフが存在して居た時点でそれっぽかったがどうやらここは俺の世界で言うファンタジーにあふれた世界らしい・・・ほんの少しだけ科学の発達した。

どうやら俺達人間が使う魔法、そしてエルフなど亜人が使う『精霊魔法』の二種類がこの世界にあるようだ

前者と後者の最も大きな違いは詠唱スベルの必要性だろう。

後者も使うことは使うのだが絶対ではない。

ちなみにこれが人間がエルフを恐れる原因

後精霊魔法を習得して初めて分かったが、前者に比べ後者は魔法を発動するのに必要な魔力が圧倒的に少ない。それはもう比べるのがおこがましいぐらいに……だ。

それとジツチャン曰く、人間の使う魔法は「理を捻じ曲げて行使する力」だが精霊魔法は「理に沿って行使する力」とのこと。

あと人間の使う魔法は、属性が無いとされる『コモン魔法』と四代元素（火・風・水・土）と虚無と言う属性を操る『系統魔法』に分類することが出来、この二つの違いは先ほど述べたものの以外に前者は口語で発動、後者は魔法語ルンで発動するという点がある。

………ちなみに魔法語ルンの単語の意味および文法……一切不明！！

今の魔法使い、意味も分からず詠唱しているだけです。
考えながら詠唱すればその通りに（それがベースの物と関係の無いものでない限り）発動するし、すでにバリエーションも豊富だから

特に新しい魔法を開発する必要もない、まあもつ少し簡単な詠唱だったらよかったんだけどねとのこと

・・・・・・・・・・文明人なめとんのかこら

よし・・・・・・・・絶対に見読してやる！！

そんなふう在意気込んで早速実行に移したんだけど、かなりすんなり終わってしまった

でも釈然としなかった

いや、それ自体は良かったんだ。おかげで魔法の開発が容易になったんだから

でもさ、何でもこれ、身に覚えがあるんだ

頭の中で何か引掛かっているんだけど結局思い出せなかった

まあとにかくそんな感じ（？）でジツチャンと旅していた初めめあたり、俺はただただ魔法の凄さに感嘆し、

『道理で科学の発達が遅れている訳なんだ

記憶によると蒸気機関が発明されてから少なくとも3・4000年は軽く経っているはずなのに第二次産業革命が起こる気配もない

と言いか、化石燃料をほとんど使っていない

『火石』なる物・・・つまり熱エネルギーを内包した魔力石がこの世界にはあり、それを代わりに利用してた。後は普通に薪とか。

ちなみに他にも魔石は存在するのだが、どうやらこれらは化石燃料と同じように埋まっていることがほとんどらしく、その際に石油・石炭も一応産出はされているのだが・・・

それぞれ『臭い水』とか『世にも不思議な燃える石』扱いされてるよ

特に石油・・・匂いはひどいし、ただ燃やすと黒煙昇るし、照明を最も頻繁に要する貴族には雰囲気的に蝋燭、それ以前に事実上無料の『ライト』に『鍊金』の魔法があるからまるつきり使い道が無かったからこそなんだろうけどさ

まあ、環境に大変優しいことではあるんだが

とにかくこんな状態では内燃機関や電力なんて夢のまた夢だな』

とか思っていたのだが・・・

しかし俺はこの国を旅しているうちに違う考えを持つようになり

（何だ……何だかこの発展の仕方……変だ……
・
何処か歪な感覚が……違和感がある……
何処だ……俺は何処に引つかかっている？）

と言う疑問にさいなまれるようになった

そして旅を始めてから二年ほどたった後、ついにそれが分かる日が来た

この日、いよいよその違和感を強く感じるようになり、ジツチャンに聞いたら、

「良く分らんが……わしの故郷、エルフの集落をまたいだ所にある国々も魔法至上主義だが科学技術は此処とは比べ物にならないほど低く、貴族が絶対的な位置を占める文明を築いておるな。おお、ちなみにエルフの集落では科学の技術レベルこそ西方ほど低いものの、魔法技術ならばどこにも負けないと自負しておる。」

と答えてくれた。

その言葉を聞いて、俺は『ユアン』の記憶をふと思い出し、気がついた。

俺の感じていた違和感、その正体はこの国の科学技術の完成度合いが『中途半端』だということだ。

そして確信した！

『俺達の使う『魔法』にはなにかある！！』 と！！！！

そもそもこの国の科学技術はある時点で一気に飛躍した。

それは今の数代前、初代女皇が行ったことだった。
彼女はそれまで犬猿の仲、と言うか敵対関係にあるエルフと不戦条約を結び、自国の民にもそれを徹底させ彼等の地で「魔法を使用しない技術」を蒐集、それを発展させることに執心した。

その後を継いだ二代目皇帝も、先代に必死に懇願されたこともありそのスタンスを続け、そして数千数百年前に魔法を一切使わずに蒸気機関を作成できるほどになった……………が

その次の皇帝からはそれが撤回され既存の技術を魔法によりさらに飛躍させるようにスタンスが変わったのだ

そして科学技術の発展は停滞した……と

「…………おかしい…………なぜ初代は魔法を排除しかねない研究をさせた？」

『気まぐれのかわった物好きな研究家』などと歴史家たちは言っているが…………変だ

教えられた歴史を見る限りこの人物は魔法使いであり、その力を持つてして国を纏め上げ、統一したのだ。

そして同時にその国を纏め上げた手腕から彼女はかなりの知識者だったとされる、事実今の政策のほとんどは彼女の時点ではほとんど完成させられていたとすら言われている。

そんな彼女が不用意に自分の畏怖される要因の一つである力『魔法』を脅かしかねない物を研究させるか？

三代目皇帝でさえ真つ先に思い至り撤回させたものだぞ？

『気まぐれのかわった物好き』と言っただけで自分の後世にまでそれを強要させるか？

歴史によれば、彼女は急にそのスタンスを取り始めたらしい。

また、その時点から彼女は自身が今まで行っていた魔法の鍛錬をやめ、この研究に没頭したらしい。

だからこそ『気まぐれ』と言われているのだが

逆に考えるんだ

『気まぐれ』などでは無かったとしたら？

『そうせざるを得ない』状態だったとしたら？

『魔法を捨てなくてはならない』状態だったとしたら？

それをジツチャンに言つとジツチャンは急に眼を開き……難しい顔をし

「わしの故郷に行こう」

そう繰り返した

3 ネフテス

・・・『ユアン』七歳

「おお、良く来たの」

ジツチャンの家にある書斎の扉をノックし中に入るとジツチャンが待っておったぞと迎えてくれた

「・・・で、どうじゃった？」

「エルフの教えにある『ブリミルは「世界を滅ぼす悪魔」』説・・・
・・・どうやら概ね正しかったみたいですね。」

俺はそのことについてまとめたレポートを渡す

因みにこれに使われている紙は俺が開発したものだ

前世にあった物ほどではないが、この世界の従来之物より薄さと頑丈さをはるかに上回っている。

「なるほど・・・」

そのレポートを眺めるジツチャンの手が震える

「所で、『あれ』の許可はとれましたか？」

「うむ、今『老評議会』にかけ合っている。

これは……なるほど、だからあれほど『あれ』を調べたい
といったのじゃな」

ジツチャンは俺のレポートの今読んでいる部分をトントンと軽く小
突く

「まあ、今読んでいる部分は言い始めた後に見つけたんですけどね。
……」

ただ興味を持つと我慢できなくなる性質なだけです。」

「そうか？」

まあ、そのお陰でわしらが恩恵を受けているのは事実じゃな。

今までの働きを見て評議会もお前をないがしろにしようとする輩は
減っている。」

「どつちかと言うとあの辺りは腫れものを扱っている感的な感じや体
の良い道具がやって来たっていうのが多い気がしますけどね。」

肩をすくませて言うとジツチャンはたじろぐ

「う……すまんのう……。ともかく恐らく今

月中には許可が出ると思う。」

「そうですか……それはよかった。」

これでやっと『聖地と言われている物』を確認できる

「それにしても、よくここまでまとめられたの……長年疑問も持たず当たり前としてやってきたことの真実を目の当たりにされたわい。」

「別に、仕事柄疑問を持ち、それを様々な視点から研究し『真』に当りを付ける作業に慣れているだけですから。」

「魔法関連特化ばかりとはいえ、こちらにも研究者はそれなりにいるのだがの……」

俺はその言葉に再び肩をすくめ、その後報告書の疑問点に答え自分の住まいに帰った

さて、今俺達はエルフの一集落『ネフテス』でそれぞれの家に住んでいる。

俺は此処でジツチャンに頼まれた『空白の歴史』関連の研究をしつつ、適当に魔法や薬学、その他もろもろの研究や、前世から引き継いだ知識を利用して生活水準の底上げ（前述した紙など）などを行っていた。

集落に到着し、この生活が始まったのは約一年半前

到着した時点では俺は『人間』であるため集落に入ることを許されず、追い返されそうになっていたのだが、ジツチャンの『一括』でエルフ達は渋々それを認めた。

どうやらジツチャンは精霊魔導師としてかなり（少なくともこの集落では）著名な人物らしく、むげに扱うことは憚れる存在だったようだ。

だが『人間がエルフの近くに住むことまでは許すことは出来ない』とか評議会が下し俺は集落のはずれの方で住居を構えることになった。

ジツチャンその扱いに激怒し反対したが、俺の方からそれをなだめた

確かに人間と言うだけで伝染病の患者みたいに隔離されることは自分の良いことではなかったが、それ以上にそれさえ除けば俺にとっ

てかなり好都合であつたからだ

住居も前世の世界とは違い此処では魔法で簡単に作ることが出来るので、手間はほとんどいらぬ。

靖を凝らした物になると大変だが、そうでないなら大抵のことはぱっぱと出来るのである。

なんせこの世界では『錬金術』を魔法で行えるのだ。

しかも『四元素理論よりさらに大雑把なものでだ!!』

簡単に言つと『鉛どころかそこの土から金』ど・こ・ろ・か『空気がから金』が可能だったのだ!!

『質量保存の法則』すらあいまいだった。

まあ、前世でも『無から有』が理論上可能なことは発表されていたが………いくらなんでも素晴らし過ぎる。

なんせ前世で研究されていた『原子核崩壊や核融合による錬金術?』と同じことがこんなにも簡単にできるのだ

しかもあれは膨大なエネルギーが必要なので到底採算が合わないとされているのに対しこちらで必要なのは自分の精神力only!そして精霊魔法ならその負担も殆んどない!!

『錬金(精霊魔法で強化ver)』乙!!

てな訳で言われたところに案内されたら、さつさと住居を作ることになりました

居間に寝室に台所に書斎に風呂場に・・・後、地下に倉庫と研究室と・・・

家の周りに結界はって精霊に管理頼んで・・・

・・・

いろんな意味で集落トップクラスの規模を持つマイホームが出来ました

・・・はしやぎすぎたか・・・

人間の精霊魔法行使及びその作業スピードと家の出来栄に、案内人と野次馬で着いて来たエルフ達が呆けていました

ジツチャンに後でわしの家も改築してくれと言われました

実行しました。

集落一の快適さを持つ家に仕上がりました

で、まあその後は御近所（？）付き合いを適当にしつつ、ジツチャ
ンに頼まれ研究（空白の歴史解明）をしつつ、自由気ままに研究開
発をと。

まあ、そのかい（？）あつて俺を邪険に扱うエルフは少なくなり、
さらに中には積極的に俺のところに遊びに来るやつも出て来た

たとえば・・・・・・・・・・

ゴンゴン

「ユアン~~~~~」

こいつとかな

「はいはい」

俺は玄関のドアを精霊を介して開ける

「遊びに来たよ~~~~~!!」

「失礼するよ」

タタタと駆けてくるスレンダー体系の女性のエルフとその後をゆるりと付いてくる青年のエルフ

ルクシャナとビダーシャルだ

「こんにちはルクシャナにビダーシャルさん」

ちなみにルクシャナはビダーシャルの姪であり、ジツチャンほどではないが若輩の学者としてはそこそ有名であり、その部分で俺とは真っ先に意気投合し、彼女経由でビダーシャルともそれなりに親交を深めている。

又、この二人はジツチャンと同じく人間にたいして害意を持っていないのも特徴だ

特にビダーシャルは評議会の中でもジツチャンに続き俺を色眼鏡なしで見ってくれる貴重な存在

「で……で?」

ルクシャナが俺に詰め寄ってくる

思わず少しのけぞった

「『で?』とは?」

分かりきっていることだが一応聞いてみる

「ネタは上がってるんだよ? 先生の家レポートらしきものを持ってあなたが入って行ったのを見たエルフがいたんだから!」

まあつまりは、私にもその内容を教えなさいと

「別に新たな発見と言うほどの物ではなかったよ?

『ブリミルは「世界を滅ぼす悪魔」』説の裏が取れたという報告と、それ関連で『世界が滅ぶ』プロセスらしきものとか……..
ああ、あとついでにビダーシャルさんの言ってた『ガンダールヴ』聖者アヌビス』説の裏付けらしき物とか」

「詳しく教えてくれ（教えなさい）」

今度は二人して詰め寄って来た

.....

「へ〜〜〜」

「なるほどな」

「まあ、今のところこんな感じだよ。ただ参考にした資料の殆んどが主観で書かれていたから、一応削ぎ落として再考して引用はしてるけど、いまいち確実性に欠けるんだけどね。」

それに、と真剣な顔をして二人に言う

「何より一応答えは出したけどこれに俺自身が納得がいつていない・
・・なんかこう、気持ち悪い部分がある。間違っではないないけど足りない部分がある気がする。」

「で、出てくるのが我々の守る『シャイターンの門（聖地）』か？」

俺はそれに真剣に頷く

「はじめは単なる興味本位だったんだけどな。
研究してるとな、なんとなくだけど『大災厄』・『世界を滅ぼす悪魔『ブリミル』』・『伝説と言われている系統虚無』さらにはエルフの恐れる『真の虚無』、全部『なにか』で繋がっている気がする

んだ。で、その答えが」

「『門』にある。そう言うわけね。」

「ま、ただの勘なんだけどね」

確証は全くないんだけど……と付け加えてはおいたが二人、特にビダーシャルの目が輝いている

「ユアンだものきつとうまく行くわ」

「どうも？ 俺だからって部分が引つ掛かるけど」

「まだ私達含めてあなたと比較的接点がある一部だけだけど、あなたの理不尽ぶりにもう『ユアンだから仕方が無い』で済ませようって合言葉が」

「なにそれ？ おれ問題見みたいじゃん？」

「安心しろ。お前の行動は問題児なんて言葉は到底似合わないほど異様だ。」

「それひどくね？」

「まず、先生をかどわしたとかであなたを力づくで追い出そうとしたエルフに、それに乗じてあなた達人間を見下したり悪意を持っているエルフが一斉に徒党を組んで襲いかかって来た時。

あなた、相手の使役する精霊の契約を一瞬であなたのに塗り替えて

無傷で返り討ちにするなんて離れ業やってのけるし。

おじさまの十八番『反射』の上位『ベクトル変換』……だったかしら？　を組みあげたりするし。

一年と少しだけで集落の技術、少なくとも数十年分は一気に発展させちゃうし。」

「きっかけがあれば誰だってできると思うけどな？　ほら、ドワーフとかうってつけたと思うし？」

「まあそうかもしれないが、それ以前に、周りに人がいないという理由もあつたのかもしれないが、我等が人を蛮人と言うのに平然と同意するのはお前ぐらいだ。」

「別に同意したつもりはないけどな。

人は自分の欲望のために同族を陥れるし、欲望で戦争を起こし大勢の人を巻き込んで殺すんだ。　純粹に個の力で対決する犬猫より性質が悪い存在だと思うけどな？　そういう意味じゃそいつたことをしないエルフ達から見れば人間は蛮人と思うのは仕方ないだろ」

「うん、君のそう言う部分が異常だと言ってるんだ。」

「そうですかと。　まあ、でも個で見たら人間でも『蛮人』呼ばわりされるいわれのないやつ結構いるし。　『己の無知を認めようとしな』の意味で見下して言ってるのならエルフの中に『蛮人』呼ばわりする資格が無いってやつもしっかりいるけどね。」

言外にお前の同僚だと酷な笑顔を向けてやる

ビダーシャルはムスツとした表情を取る

この数日後、ジツチャンとビダーシャルの付き添いの元『門』へ行く許可が下り、俺達はそこへ向かい

そして俺達はほしかった情報^{ピース}を見つけ『真実の裏』を知った

ジツチャンは唇をかみしめ、ビダーシャルは憤った

そしてその数カ月後、俺の十歳の誕生日の翌日

仲良くなつた皆に見送られ

俺は『呪われた地』西方に向かい、旅立った。

先ず行くのは此処から一番近い国『ガリア』だ。

4 それは穏やかにして………（前書き）

やっとキャラ設定が終わった。

……だからと言って更新が早くなる訳じゃないけど。

4 それは穏やかにして……

「ふう……」

周囲の力に身をさらし、そして誰にでもなくため息をつく

「どうかした？」

俺のすぐ隣の空間がぼやけ、そこから妖精のような羽をはやした、黄緑を基調とした服を着た少年が現れる

「いや・・乱れが多いなとね・・・」

「あゝ、なるほどね。」

こいつはふわふわと浮かびながらうんうんと頷くが

「予想はしていたが、偉くノリが軽いな・・・」

他の奴等もそうだが、風の大精霊ともあろうものがそんなので本当にいいのか？

これ、お前らに直に関係があるものだぞ？」

そう、こいつは風の大精霊、名はシルフ

この世界にはそこらじゅうに精霊が漂っているのだが、その存在は一定以上の感能力がないと感じ取ることさえ不可能であり、その意識はほとんどの場合かなり希薄なものだ。

希薄な意識とは言っても、ある程度の物はあり、エルフたちは彼等と契約し、繋がりを持つことで彼等をお願いし働いてもらう

だが、極めて稀にそんな精霊達が何らかのきっかけで大量に集まり圧縮されることで、感能力の無い一般人でも容易に視認できるほどの存在感と明確な意思を持ち、同時に当たり前だがトップクラスの親和力を持って周囲の精霊を従える力を持つ、強大な精霊が生まれることがある。

これが大精霊の一般的な生まれ方だ

まあ、実はこいつ等はそれに含まれない数少ない例外なのだが・・・

・

「分かってるくせに」。

精霊は個にして全、全にして一、こんな有象無象のほんのちょっとならねえ。

今僕達は何より気になっているのは君の行動だよ」。

それにしたってこの性格は無いんじゃないかと思う
到底億万単位で生きて来た奴の性格じゃない

少しは他のやつら見習え・・・いや、まあ、他の奴等も大外特徴的なんだが・・・

「べつにいいだろ、これが僕のトレードマークなんだから。」

……そろそろ街が見えてくるから引っ込んでくれ。

「あ、冷たい。」

さっさと引っ込め。

何と言うか……これぞ魔法世界の文化？
見事としか言いようがないぐらい、中世の雰囲気醸し出していいやがる

これがガリアの首都について感じた感想
うん、大国の首都だけあって活気はあるんだけどね

ユアンの故郷に比べても圧倒的に技術レベルが低い

まあ、此処よりはるかに高いレベルの技術を知っていて、なおかつそんな中で生活して来たからこそその感想なんだけだな。

ほんとと、恵まれた生活してたんだな〜と郷愁にふけてみるのと数秒

さて、現在俺はジツチャンと旅をしていた時に着ていたのと同じ巡業のような質素な服を着、眼の色をスカイブルー、髪の色を濃い目のライムグリーンに変えている。

如何やら此処では黒眼、黒髪と言うのは大変珍しいらしい。

艶のある黒とか真っ黒と言ったのが無いと言うわけではなく、本当に『黒』の髪を持つ人がいないのだそうだ。

それだけでも十分驚きなのだが、実はより驚くべきことがある。

なんとこの世界では原色の青色とか水色とか紫色とかの髪が普通に存在するのだ（ユアンの）故郷にもかなりの人数がいた）。

言っておくが地毛で、だ。決して染めている訳ではない！

瞳の色も同じくだ

いったいどんな色素が分泌されているのやら。

ユアンのおかげで大した違和感は覚えないのだが、そうでなかったらと思うと少し気がめいる

そっぴやユアンの教育係だったあの紫色の髪をした姉ちゃんはどうなったんだろ？

行き遅れ間近でたまにぶつぶつ言っていたのが印象的だったな〜

そんなことを頭の片隅で思い浮かべながら俺は一般開放された商業区に訪れ、簡単な商いをするためにその一角で荷物を広げる。

小物にアクセサリに食器に簡単なポーション

俺が此処に来たのは一通り国々を回ることと土地勘を得、同時に俺の活動の拠点探しを行い、あわよくばその過程で虚無の使い手を一人も見つけることが出来ればなという思惑があったからだ。

いざとなったら人目につかないように適当に魔法を使いつつ巡回するつもりだったから食・住どちらも特に心配はなさそうだが、地獄の沙汰も金次第と言う、ジツチャンとビダーシャルから先立つものがあつた方がいいだろうと（あと同時に此処ではめつたに使わないからと）少くない金額はもらっているのだが、あつて困るものでもない。

だが鍊金で複製を作るのは何かと罪悪感が起こる

と言うことで、旅の途中で適当に創った物品を売ることにした。

ついでに客と世間話をして少しでも価値のありそうな情報を手に入れたら御の字だな

・・・とか思ってたら

「ほう、なかなか興味深い品を扱っているではないか。」

俺の目の前で商品を品定めする一人のオッサン、いや、実際は見た目より若いかな？

いや、問題はそこでは無い

こいつの背後でそれとなくこいつを護衛している奴がいるのもどうでもいい

こいつを中心に遠巻きに眺めているおばちゃんらが『ほら、あの出廻らして言われてる』『ああ、あの人がジョゼフ殿下なのね。』とかささやいてるのが精霊を介した耳に届いて来てるがそれすらどうでもいい！！

問題は！

こいつが！

虚無の使い手だということだ！！

このかすかに感じる呪詛をくらったような不快感、あそこで感じたものに準じる感覚、間違いない。

いきなりヒットかよ！！

どうやらまだ目覚めていないらしいが、さて「俺の顔がどうかしたか？」

！？

「あ、いえ、何でもありません。」

慌ててごまかすが、ジョゼフとかいう殿下殿は構わんと軽く流す

「ふ、どうせ、俺のうわさを聞いたのだろう？『有能の兄に無能の弟』と。」

かまわん。どうせ城内でも普通にうわさわされておることだからな。

「

・・・無能、ねえ？

少し思う所があり、表情に出さないよう注意しつつどうやってカマをかけようかと思案を巡らす

「所でだ、これはここらでは見ない品々だが、他の国では普通に取引されているものなのか？」

「……よし。」

「……殿下がおっしゃっているのはロマリア、ガリア、トリステインのことですか？」

「そうだが、む？ それ以外にも国が……ああ、自治州のことを言っているのか？」

「いえ、違います。私が来たのは此処よりはるか東、ここらで言う『ロバ・アル・カリイエ』です。」

「なに、東方からと！？ はははは、これは面白い。と言うことはお前は東方からきた貿易商と言うことか？」

「いえいえ、私は国を追い出され、此処に流れ着いたただの一般人です。そんな大層なものではありませんよ。」

「ふむ、そうか。」

その後二言三言たわいのない話をし、数点の商品を買いジョゼフ殿下は帰って行った

そしてその数時間後

「まで。」

人気の少ない道を歩いていると、後ろから声がかかって来た

「……まあ、それに気がついたからこんな場所を通ることにしたんですが」

「これは殿下。昼以来ですね。どうかなされましたか？」

俺は振り返り件の人物、ジョゼフ殿下を見る

「あ、もしかあの物品、不良品でしたか？ でしたら至急新しいものに「いや、お前と話しに来た。」………私めと話しを？」

「ああ。お前の話したことでは納得がいけない部分があった。それについて聞いただそうとな？」

………

「護衛もつけないで？」

「個人的でお前と話したかったからな。なんとなくだが、とても興味深く感じるのだ。」

お前は何かをしてくれる。そんな予感がするのだよ。」

にやりと笑うジョゼフ殿下

「さて、俺が気になった部分だが「一平民が国を追い出されたという違和感、流民にしては豊富な品ぞろえ、といった所ですか？」・・・ほう？」

俺もにやりと笑い返す

「国を追い出されたのも、平民であるのも本当です。まあ、一応元貴族なんですが。」

「ほう・・・では、此処に来たのはどう言った理由だ？ 漠然と旅をして此処までたどり着いたというわけではないだろう。」

「ええ。もちろんです。」

俺やジツチャンは精霊のおかげで比較的快適な旅が出来たが、本来此処と俺の故郷の間には広大な砂漠など、過酷な環境が広がっている。気ままに旅をして越えられるような生ぬるい旅路では決してないのだ。まあ、だからこそ此処まで交流が無いのだが。

「だが、先ほどの言葉が本当だとするとその理由が思い当たらない。初めはお前がスパイで敵地の観察に来たのかと思っていたが・・・」

ジョゼフ殿下は俺の目を見つめ

「・・・違うようだな。」

「・・・・・・・・くくく・・・」

それを聞いて俺は思わず笑いをこぼす

・・・・・・・・こいつが無能？

これだけの情報で此処までの物を組み立てれるやつが？

「どうした？」

「いえ、あなたに仕えるのもおもしろそうだと思いますね。」

やや怪訝そうな顔をする殿下にそう答え

「改めまして、私は東方より追い出され、エルフの下で学び、そして、歪を正すために此処へ来たしがない研究家であり魔導師、ユアンです」

幻惑を全て解き、大精霊達全員を顕現させ

「私はこれから此処、ハルゲニアを調査するために国々を一通り回るつもりです。」

その後活動するための場所を得たいのですが、それをあなたに所望してもよろしいでしょうか？」

優雅に一礼する

「ほう……なるほど。ではその際お前はどんな役職を望む？」

最も王になれるかどうか分からん余が大したものを用意できるとは思えんが。」

「そうですね……では、その機会があれば土地を。出来るだけ広大な土地をいただ買いたい。」

「ほうそれは、なかなか大きく出たものだ。それがどう言ったものか分かるの？」

「はい。ですが私が欲しいのは別に農産業に適したとか、地下資源があるとか、街の中間に位置し商業に向いているとか、そんなものを求めているわけではありません。というより、むしろいりません。

ただ、広く、広大な土地を。

それが私の欲しいものです。……。」

「なるほど……一介の人物では難く、かといって我等にとつては易いものだな？」

詳しい理由は分からぬとも、迷いなく言ったこの要求の程度を瞬時に見抜くジョゼフ

断片ながらも情報を統合しジョゼフはとある答えにたどり着く

この幼い少年は只者ではないと。

それこそ、命を狙われ、国を逃げ出さなくてはならなくなるほどに。

一方ユアンも一つの結論にたどり着く

この人物は、無能などではない。有能だ!!

それもこの国に入って今まで見たどの貴族よりも、比べようのないほど。

自分が身を寄せることができ、それを容認できる者だと

「お前とは長い付き合いになりそうだな。」

そしてそれが彼の答え。

それに対しユアンは再び頭を垂れ、そして尋ねる

「ありがたいお言葉です殿下。ですが最後に聞かせて下さい。
なぜ私のような子供に？」

自分はただの平民ですが？」

「くくく・・・確かそうなのだろう。」

だが、俺は思うのだ、確信めいたものとしてな。」

ジョゼフの目が俺を見据える

その目に浮かぶのは・・・

「・・・なるほど、では再びまみえるときを楽しみにしています。」

「ああ、余も楽しみにしているぞ。」

背を向け、その場を去ろうとする

だがそんな背後から最後の言葉がかかった。

「ああ、これだけは分かる。俺はお前のその目が気に入ったんだ。」

それはとても楽しそうな声

最高のおもちやを見つけた、『子供』をイメージさせる声

「お前は何を見据えている？何をしようとしている？

そつだ、今後俺に敬語は使わなくて良い。お前もその方がいいだろう？

また会おう、ユアン」

自然と笑みがこみ上げてくる、

釣り上げた口から笑い声が漏れる

「アハハハハ・・・、ああ、ぜひそうさせてもらおう。
俺も、お前とまた会える日がとても楽しみになったよ。ジョゼフど
の！！」

自分がかかわって来たことだし、育ての親の頼みもあるからと思っ
て来たけれど

・・・本当に楽しみになってきた

世界が、どのような、選択をするのか

それは誰の思い描いた結果か・・・・・・・・

二人が再会するのはこの約二年後
そして物語が始まるのはそれから・・・・・・・・

4 それは穏やかにして……（後書き）

この小説の独自設定ですが。

大精霊はそれなりに数がいるとしています。

少なくとも一つの国に一体は。

そうでないと少々大精霊をないがしろにしすぎじゃあないかなと。

この小説のために作った簡易設定より抜粋

水 ウンディーネ 姐さん

風 シルフ 子供

火 イフリート 豪快

土 ノーム 天然

光 アスカ 姉

闇 シェイド 無口

木 ウッド じっちゃん

雷 ヴォルト 小僧

登場予定なし。

あっても変更の可能性大。

・・・・・・あれから約二年後

いよいよ俺はから帝政ゲルマニアからトリステイン王国という国に入った。

この国を一通り回り、ラドリアン湖経由でガリアに戻れば俺の旅も一応終わりだ。

それを思うと少し名残惜しいものがあるが。

さて、此処に至るまでの旅の結果をもう一度振り返ってしてみようか

此処は点在する小国を除けば、『帝都ゲルマニア』『ガリア王国』『トリステイン王国』『ロマニア連合皇国』の四大国と比較的大きな『浮遊大陸』（と言うほど大きくもないが）を統治する『アルビオン王国』に分かれている。

帝都ゲルマニアは『金さえ払えば平民だろうと貴族になれる』と王政に資本主義を合わせたような形態を取っており、国の中では現状

一番活気があると言っていいだろう。

流通の中心ともなっており結果、此処の首都は四大国一の領土と国民をほこるガリアよりも立派なものだった。

次にガリア王国だが、此処は先ほど述べたように此処は四大国一の領土と国民をほこる。またそのお陰で資源産出割合は四国一だとか。此処の国々はロマリア連合皇国を除き貴族制度（ロマリアは貴族の代わりにその地担当の教主が統治）なのだが、その中で蔓延する貴族絶対主義の度合いがゲルマニアに次ぎ他の2国に比べ小さい。

第一王子ジョゼフと第二王子シャルル、二人のどちらかが次の王になることになっており、世間一般ではシャルルの方が有力なようだ。その理由は至極簡単で『シャルルには魔法の才能がありジョゼフには無いから』。

ま、魔法の理不尽さは俺も身をもって実証してるから分かるけどね、でもさ、そればかりでは王は決められないだろ。

脳筋に政治任せるのって危険すぎねえ？

いや、どうやらシャルルって言う人は政治面でも有能な人物みたいだけださ…

なんていうか、勢いが無いんだよな、新しい次元に行こうっていう。

まあ、それはどこでもいっしょなんだけどな。

でもみた感じ、ジョゼフにはあるんだよね、その……『先を見据えている冒険心』って言うべきか？

ともかく当って砕けるとは良い意味で少し違ったものをジョゼフは

持つてる気がするんだよな。

ま、そう言ったものに気付いてか、水面下ではジョゼフの人気は結構大きいみたいだったけどな

俺が帰る辺りには何らかの決着がついているのだろうか？

んで、ロマリア連合皇国、此処の国々ではブリミル教と言う宗教ただ一つが台頭している——一応他のもあるのだが、異端者扱い——のだが此処はこの「総本山」で別名『光の国』なのだが………はつきり言って相当ひどい、

坊主が我をきかせすぎ

寄付強制、しかもぼったくりすぎ

衛生悪い場所多くて空気が荒んでる

人身売買してる教会のすぐ近くでしてた、ってか神官が買ってた

いや、全部じゃないんだよ、これ一応中心地から一定以上離れた場所の話なんだよ………でもさ………正直なえる。

宗教がその権威を保つためには基本的に『俗世のすべてと異なるもの』という人々の畏れと敬い、つまり『神聖さ』が不可欠だ

なのにこれは………正直なこと言って貴族による圧力と何ら変わらない、総本山が最も『型』と逸脱してるってのは笑えないよな………

『迂闊に政治に口を出せば、人々の尊敬の対象足るに必要な神聖性が俗世に塗れてしまい、最終的にはその権威が失墜することになる』
前世でそのことは歴史上ある程度有名だったんだけど、これ見事にそれなぞってるし。

他の国々に対して……現状むちゃくちゃ発言力あります

もう『さすが中世』でかたずけられるくらいあります。

まあいいんだけどね……おかげでものすごく事が運びやすそうだし
こういった『神聖が薄れた』のってね……やり方さえ分かればどんな木規模が大きくても……と言うより大きければ大きいほどかなり楽に崩せるんだよ？

さて、次はアルビオン王国だが、上空約3000メートルに浮かぶ《浮遊大陸》、此処はこの一言に尽きる。浮かんでいる理由を探った結果、この大陸の内部には巨大な風石が存在することが分かった。で、此処、始祖ブリミルの子供の1人が興した国なんだけどさ、そいつどう言うつもりだったんだろうね？

『大災害』の一端、風石の暴走による”大隆起”、ようはブリミルのせいで場が乱れ、結果異常生成してしまった風石によって大地が持ち上がってしまったって言うこんな場所に国を起こしたんだろ？

親の罪を忘れないようにするためだったのか？

何も聞かされていないだけで、空飛ぶ島に国を作りたいだけだったからか？

親の罪とかそんなこと気にせず、ただ純粹に空飛ぶ島に国を作りたいからか？

……まあ、考えたって結論が出る訳じゃないけどさ…。

……だが、空を飛ぶ、と言うのは確かに良いかもしれない。

秘かに脱出するには最悪な場所だが、守るにはそれを補えるほど、これ以上ないほどこいい立地条件だ。

侵入には飛行艇など、飛べる物を介してしか侵入できず、こちらは簡単に全方位が見渡せる。

システムさえ作りこめば近付くことさえ困難な鉄壁の根城が出来上がる

………考えてみる価値は十分あるかな？

ま、こんなところだろう。

あ、そう言えばアルビオンで精霊との契約の反応があつて一応それ辿ってみたらモードって言う一貴族の地にたどりついた。

情報集めた結果、個人的な内容で此処に来たみたいだし、下手に干渉するのめなんかと思つたのでそのまま離れたけど。

さてと、トリスティンは事前情報だと貴族至上主義が最もひどい所らしいが、どうなのだろうか？

うん、結論から言っけどさ、ロマリアとは違った意味でひどくね？
此处。

他の国より尊大な奴多すぎるんですけど

平民無下に扱ってる貴族多すぎるんですけど

トリスティンが国の中で一番発展してるって本気で思ってる奴多すぎるんですけど……

なに此処の貴族達？ 馬鹿なの？ 死ぬの？ 侵略されたいの？

この国、旨みあんなないから侵略する気が起こるかどうかはなはだ疑問だけど。

とりあえず、まじで簡単に滅ばせそう。

やる意義が見いだせないからしないけど、やったらむしろ足引つ張りそうだし。

とにかくさ、まともに世界を見据えてる貴族少なすぎるよ？

平民は貴族の言うことをどんなことであろうかが聞くのが義務、意見を出す権利などないとか……………

いや、税率七割とか……………

前横切ったから死刑とか……………

もう領地経営とかさ、領民の管理とかさ……………そう言つのもろもろ思いつきりぶつちぎっちゃってるよね？

民あってこそそのだろ？

それ分かってないの？

分かってないんだろうね…………

ほっとしてもそのうち廃れそう……………とまでは言わないけどさ、一応考えてるやついるし、此処ヴァリエール領の領主みたいに

明らかにコイツラ足引っ張ってるよね？

まあ、はっきり言って他国のことだからこっちは“杭”さえ打ちこめたらどうだっていいんだけどね。

そんなこんなで薄暗い森の中、今までの結果をノートに『英語』で書き、木の根を枕にして眠りについた。

彼女と会ったのはその次の日

6 ラドリアン湖（前書き）

文章の質がどんどん劣化して言うてる………

すみません文脈が荒れています

6 ラドリアン湖

現在ラドリアン湖に来ています

え？ 道中？

王都には行かなかったのかって？

行っただよ？

感想？

一言で言えば『へーこれが四国一の規模を誇る城下町なのか（棒読み）』

まあ、こういうこと言ってるのはトリスティンの貴族ぐらいなんだけどね

とはいってもそれはある意味仕方のないことだったりする

他国へ行く貴族というのははっきり言ってまれなのだ

なぜなら、基本的に貴族たちは自分の領から離れることはないしそ

の必要もない

離れてもその行先は同じ国の中、懇意にしている貴族の領だったり、王都への招集だったりする

他国へ意識を向けているのはヴァリエール公爵家のように他国と領地が隣接している貴族や自ら他国と貿易を行っている貴族ぐらいなのだ

しかもその数もとても少ない

商業といったものは大抵商人がやっていて、これに率先して手を出している貴族というのは数えるほどしかおらず、とんどがパトロンどまり

他国と隣接している領を持つ貴族たちも大抵不可侵を結び、それで完全には言わないがかなり安心していて、していなくても収集するのはどちらかと言えば隣接する領の動向だ

もちろん王家や高位の貴族たちは違うのだろうが、そこら以外では他国の動向にほとんど関心を持っていないようだ

最もそれは何処の国でもそうらしいが、此処は特には他国の諜報技術が低い気がする

そしてこの国はその情報が伝わっていない

寧ろ伝わっていないければおかしいぐらいの情報が伝わっていない

自分達の国が一番だという慢心のため他国をなめて、その諜報を真剣にしようとしな

よって他国の現状をあまり正確に把握しきれておらず自分達の国が一番だという気持ちが揺らいでいない

その慢心のせいで………という悪循環が無限ループしているのだ

更にその慢心の弊害なのか、この国は気位の高い貴族が最も多く、同時に貴族史上主義の色合いが最も強い

そう言う意味じゃゲルマニアの貴族は良かったな………特に成功して平民から貴族になったばかりの方々

気さくとまでは言わなかったけど、行商していた場所にふつうに足を運んで来てくれて、かなり気楽に話すことが出来た

ガリアがだめだったらやっぱゲルマニアだよな

金銭はどうにかなるからそれで領地と地位を買えばいいわけだし

数名の貴族とは顔見知りになれたからそのパイプ使えるしな………

とは言ってみても結局、『陣』と『礎』の関係でどっち道何らかの形でガリアの土地を手に入れる必要はあったんだけどね

まあとにかく、そんなこんな形でこの国の情報を集めたりしながら『杭』を打ち込みつつトリスティンを回り、此処『ラドリアン湖』まで来たというわけだ

それにしても綺麗な場所だな。 ラドリアン湖！

水の透明度が半端ない

湖の底が透けて見える

ダイビングをしたら気持ちよさそうだ。

水を汚す要因が無いってのはいいよな

これを見ると地球は本当に汚れているんだなってつくづく思い知らされる

まあ最も、此処はさらに特別なんだけどね

だってさ、水を汚そうものなら住人（？）が黙っていないだろうからね

.....

水面に近付くと、うねうねと水が持ち上がり、俺の姿を模した半透明の精霊が姿を現した。

「よく来たな、単なる者よ」

「お初にお目にかかります。私の名前はユアン。水の大精霊よ、以後お見知りおきを。」

そう、此処に住む水の大精霊だ

「久しぶりだね」

「お前とも久しぶりだな。以前会ったのは何時だったか、数えるのも愚かしいほど月が交差したな。」

「そうだね

俺の隣に現れた俺と共にいる水の大精霊、ウンディーネにラドリアン湖の大精霊もそれに頷きこちらを見る

「それでユアンといったな、お前は此処でなにを行おうとしているのだ？」

精霊は全にして一の存在でありさらに水の精霊なのだからウンディーネと記憶を共有しているのかと言えば実はそうではないらしい

確かに根本的な所は共通しているのでとても大まかなことは分かるらしいが、

それはお互いの存在を知るといったレベルでそれを除くと殆んど個と言っているのか

最も水の精霊同士結合して再び一になれたりするようだが

そのためラドリアン湖の大精霊は説明を要求したが

「それはあたしが教えるよ。

あんたと一部を同期させるよ。」

代わりに説明を買って出たウンディーネは言葉を交わす代わりに片腕をラドリアン湖の大精霊のように半透明にしつつ伸ばし、お互いに混じり合わせ

「理解した、我もお前に協力しよう。

『芯』と『礎』が完成したならば此処のラインは我が確保する」

腕を再び切り放したラドリアン湖の大精霊は頷いた

それに心の中でグツと拳を握る

「協力感謝します。 それではまたいずれ」

これで計画の第壹段階、『大精霊達への説明と協力要請、ついでに各国の現状調査』は終了だ

次の段階は『芯』と『礎』の設置だな

ジヨゼフ殿下に頼んだ通りならば、ゲルマニアとの国境近くのあの辺りの土地がもらえそうだから

.....

..... 取りあえず、一度リュティスに戻るか

..... あ、そうだ

「そう言えばあなたの名前を聞いていませんでしたね」

考えつつ湖を迂回するため少し淵から離れようとした足を止め振り返り、未だそこにいたラドリアン湖の大精霊に尋ねる

だが

「..... そうだな、いい機会だ。
ユアンよ我に『名』を付けてくれないか？」

逆に頼まれたこの言葉に少しびつくりした

もちろん全てとは言わないが、大精霊は個体ごとに何らかの名を持つてることが多いし

特に人と共にいた大精霊はその可能性が高いのだ

なぜなら名前と簡単に言ってもそれは『存在を固定する』『存在を見出す』とかなり重要な意味を成す

なので人や亜人、竜などと関わりがある大精霊は殆んど名前があるのだが

それはお互いの関係をより強固にするという意味合いがあるのだからだが

「ないんですか？　かなりの年月此処にいた」

「かつての単なる者達は皆我のことを『ラドリアン湖の大精霊』としか呼ばなかった。

我に名を付けるどころか尋ねようとした者すらいなかったよ」

いつの間にか体の形を崩し、ヒトガタのようになったラドリアン湖の大精霊が悲しそうに言う

なるほど、だからウンディーネのように決まった形を取らなかったのか

「しかし私でいいのですか？

確かあなたは契約している者がいたはずですが。」

「我を道具のように使おうとした挙句、不快極まりないことを言い放った単なる者とは契を切った。

その後に来た者も我を顎で使おうとしているのが見え見えだ。

そんな驕り高ぶった単なる者たちよりもユアン。　我々を理解し、

我々に敬意を持っているお前のどちらが良いかなど聞くまでもないだろう」

…………… 此処の交渉役のやつら何をやったんだ？

まあ、それならいいか

ふむ…………… やはりこういうのは捻るよりも単純な方がいいかな

「それならば…………… 『水』を表す言葉、^{アクア}「aqua」というのはどうでしょうか？」

「^{アクア}「aqua」…………… いいだろう、これより我の名はアクアだ」

歡喜を表すように言い放ちしばしの間震えた人型はやがてその形を変えていき…………… ってちよつとまで

「えらく…………… 様子が変わりましたね……………」

変化（？）の終わったアクアの前で引きつった唇を何とか動かす

「お前が名を付けてくれたおかげで『我』を確立することができたからな

それに、ウンディーネ達と言う形が定まった先輩方がいるのだ」

「あははは…………… そうですか」

嬉しそうにアクアは言うがこっちは内心焦っていた

人の形をまねることが無くなって、何らか特定の形を取るようになるとは思っていたが

はつきり言つて此処まで顕著に変化が現れるとは思っていなかった

今のアクアの姿は水色の肌に深青色の髪をしていたがそれを除くと何処からどう見ても女性の姿だ。
服装まで完全に再現されている

「お前には感謝しきれないな。何か望みはないか？」

「それはありがたい、では頼みたいことがあります」

「なんだ？」

「どうしてそのような姿を取るようになったか聞かれても答えずに、
適当にはぐらかしてやり過ぎて下さい！！ 俺のことは知ってほ
しくないんです！」

いくらなんでも大精霊が此処まで顕著に変化していたら誰だって理
由を知りたがるに決まっている

「む？ 別にかまわないが何か都合が悪いのか？」

そんなの決まってる！

俺のことが知ったらそいつらは必ず俺を探す！

そうならどうなったって俺にとって都合の悪い方向へ転ぶに決まっている

いちゃもんつけられた挙句トリスティンに縛られて顎で使おうとされるビジョンが普通に見える

逃げてもいいがそこに五月蠅くしつこく詰め寄ってくるのがおちだ

ロマリアが介入してくる可能性だって十二分にある！！

そんなことは、なんとしてでも避けないと！

「はい、少なくとも地が固まるまでは知られる訳にはいきません」

「ふむ、ならば任せておけ」

アクア達精霊にはこういった俗っぽいことには関係が無いため、ことの重要さが理解できないのだろうがやや首をかしげながら承諾してくれた

よかった、もうこんな機会はないだろうけど気をつけないと

「だがそれだけでは気が済まないな、他にはないか？」

でもアクアはそれでは満足しなかったらしい

いや、こっちとしてはあれだけで心底助かってるんだけどな

とはいっても………ん？

そうだ、少し前に考えたことを実現するいい機会じゃないか

「でしたら湖の水中観光の案内をして下さい」

アクアは少し呆とした後快諾してくれた

7 二人

……ガリア首都『リュティス』

……ジョゼフの私室

「兄上、失礼します」

「おおシャルルか。どうかしたのか？」

「いえ、久しぶりに兄上とチェスをやりたくなりましてね。
最近お互い忙しくて機会がありませんでしたので」

「それはいいな。早速やるとしよう」

……
……

「…………と言った所ですね。彼が有能であるのは間違いないです。そうなのですくい上げたいのですが、残念ながらそうするに値する明確な根拠は無いので下手に支援する訳のは行かないのです。取りあえず今回の税の延滞の許可は出しましたが問題を先送りにするぐらにしかありません」

「なるほどな。」

大変な目に合っているみたいだな」

二人はチェスを進めつつ最近の話をする

「そうでもありませんよ、そう珍しいことでもありませんので。兄さんの方はどうなんですか？」

「お前のような輝かしいことは何もできていないさ。先日やっと足元を固めることができただけだよ」

「そんなことないですよ。信頼する者たちを選び出すことができました。」

おめでとうございます兄さん」

「そうか、ありがとうな」

.....

.....

.....

「それにしても、最近兄上は変わりましたね。」

二年ほど前までは政務に積極的に携わろうとしなかったのに。

今ではあれが嘘のようです」

「なに、少し試したいことがあってな」

「試したいこと？」

「ああ」

「聞いてみても良いですか？」

「勿論だとも」

ジョゼフは盤面から顔を上げシャルルを見据える

「俺は王になることができるのか試してみたいのさ」

その言葉のシャルルの頬がピクつと震える

「俺はなシャルル。王にはお前がふさわしいと思っていた、次の王はお前しかいないとな。」

その変化を気の端に止めたが、ジョゼフは語り続ける

「魔法が使えないゆえに俺は「無能」であり、魔法の天才であるがゆえにシャルルこそ「王に相応しい」のだと思っていた。

実際に流れている話もそう言った物ばかりだ『愚兄賢弟』だとな。ついている貴族もそうだ。

お前の周りにはお前を慕っている者たちがいるが俺の周りにはいない。第一皇子なのだから俺を持ち上げている貴族もいるが、それ以外は自分の利しか考えていないのは明らかだった。チエスならば対等な勝負は出来るのだが、そうでなければ俺はお前に勝てたことは無かった。

お前に勝てる物と言えば生まれの速さぐらいだ」

「兄さん……………」

シャルルはジョゼフの言葉に悲痛な面持ちで声を漏らす

一見すればそれは兄を憐れんでいるような形ではあったが

「正直言つて俺は王位などは興味など無かった。

次の王にふさわしいのはシャルルしかおらず、俺にとって場違いな存在、手に入るはずが無いと諦めていて、王になれる筈もない俺がやっても仕方が無いと政務をする気も全く起きなかった……………二年ほど前まではな」

シャルルはただそれを聞き続ける

「その日俺は市場に降りて行っていた。何か面白そうなものはないかな

その時であつた少年に言われたのだよ。

俺に、『無能』なこの俺に仕えてみたいとな。」

そしてジョゼフは先程から一変して楽しそうに話し

それをシャルルはただ笑顔を浮かべて聞いていた

「その際あいつが俺に頼んだものはあの時の俺でも簡単に用意できるものだったのだが、その時一つの興味が出来たのだ。俺は何処まで行けるのかとな。」

「なにかは分からなかったが、無能なはずの俺にあいつは仕えるに値する何かを見出した。」

「ならばそれで何処まで行けるのか俺は試してみたくなった。」

「俺は初めてお前に勝てるかもしれない、これは俺の人生で初めての、そしておそらく最後の全力での挑戦だ」

「ふう……………茶がうまい……………」

作業がひと段落ついたので壁の淵に腰かけ一服する

まあ、作業と言っても錬金術で堀を掘ってその土で壁を錬成しただけではあるのだが。

……………堀の方は十メートル以上上下から掘ってあるから見た目は分からないけどね。

その上固めてあるから崩れる心配もないし。

壁だけで十分怪しまれそうなのに堀まであったら警戒の度合いが半端じゃなくなるからな

堀を人目にさらすのは此処がある程度世間に認められてからだ

それまではある程度行動を自重しないとな……………

「いえ、この壁の時点でああなたの自重の度合いが疑わしくなってますが…」

そんなことを考えていると後ろから女性の声がかかる

彼女名前はエミリー、彼女の兄アルバートと共に道中で偶然出会いそのまま一緒に来ることになり、この際ついでだから魔法も教えることにし

俺の手伝いをしてもらうことになった

「堀をさらさない分十分自重してと思うけど？」

「そこは評価しますけどね。これだけの高さの壁を張り巡らせてるだけで十分注目の的ですよ？」

「ま、そこら辺のやりくりはジョゼフに期待だね。これだけは譲れない点だからさ」

「ふう………ねえアル兄さん、やっぱり私達凄い貧乏くじを引いた気がするんだけど？」

「気にするなエミリー、命あつてのものだねだろ？
それに俺はもう慣れた」

言ってくれるじゃないかアルバート
確かに敬語は要らないっていったけど、フランクになるのが少し早すぎると思っただけど

エミリーを少し見習ってほしんだけど？

「それに作業はユアンがやってくれるからそれまで俺達はゆっくりと「なにいつてるの？」………え？」

「俺が急いでやるのはセントラルタワー作りまで。此処から先は君たちも参加してもらうよ？」

それに、一番急を要した壁作りも終わったからその分君たちにリソースを割ける。

丁度いいタイミングでレイモンド一家も来たみたいだし……………」

こちらにやってくる数十人の人影を眼の端に入れながら二人に笑顔を向けてやる

「あ、あはは……………まさか……………」

二人共歡喜で震えちゃって

うれしいな……………」

レイモンド家とその使用人たちが入ったのを見届け門を閉じ

ヘクターを呼び寄せ、付近に鍊金をかけ十数体のゴーレムを作り出す

——グルルルル

「実戦に勝る訓練は無し！！ それじゃあ、逝ってみようか？」

「「「ギヤアアアアアアアアアア」」」

さてと、じゃ、こつちも作業を再開しますか

あ、他の皆さんは少し休憩したら道路整備と仮設住宅の作成をやつてね？詳しいことはこれに書いてあるから。

ん？この紙？

いいでしょこれ、うちで取り扱う商品の一つだよ今度王宮にも献上するつもりなんだ
他にもいくつか献上品はあるんだけどね。

うん、あの馬車もそうだよ

.....

いや、小出しにしていくつもり

確かに一気に持っていったらそれだけインパクトはあるだろうけど、今回はそれは得策じゃないね
少しずつ間隔をあけて献上していくことで、持続的に一定の印象を与え続けるのさ

『取り入るべき脅威』じゃなくて『とって代わるべき脅威』になるようにね

そう、今の俺の地位自体ただの通過点……というか、目くらましだね
次になる役職を認めさせるための

だつてそうだろ？ 王宮技術開発機関の主任なんてやってられない
つて

これ、一応王宮にだけとはいえ技術開示なくちゃいけないん
だからさ

下手なことが出来やしない

それにあれ作れ、これ開発しろつて言われる場所だよ？

そんなことされてこれだけの人数………というか、実質俺だけで自
由に研究なんて出来やしないだろ？

うん、別に他の人に言ってもいいよ？

お勧めはしないけどね？

.....
.....
.....

「ジョゼフ殿下、噂の真偽について説明をいただきたい」

王城の会議室、とある貴族が俺に噛みついてくる

「噂とはなんだ？」

「とぼけないでいただきたい！！
つい先日平民、しかも聞いたこともない人物なんぞをあなたが貴族にしたというではないですか！
それは本当ですか！」

それに合わせてそこらの有象無象が騒ぎたてる

ふん、分かっていたことだが相変わらずうつとおしいな

「ああ、本当だがそれが何か？」

「なにかですと！？

大問題ではないですか！なぜそんなことをしたのです」

「簡単な話だ。 あいつには他の国に行って欲しくない。
ならばやつに恩を売るのは当然だろ？」

その言葉に辺りが騒ぎたてる

「それと補強すると、王宮技術開発機関を試験的に作り、あいつにはその主任というポストを与えた。

まあ、機関といっても所属しているのは今のところ4人だけだがな」

騒ぎがますます大きくなった……俺とシャルルのどちらの取り巻きからも

だがこれで正解だ、一度に情報を出しておいた方が小出しにしているよりも早く場をまとめれることができ、それに次々と情報を出していくことで下手な考えをさせずに素直な反応を見ることがもできる………今のようにな

俺の取り巻きが騒いだ原因のほとんどは俺が王になった時の自分への旨みの減少を危惧した物から

シャルル派の場合は詳しいことを考えたかどうかは別として、取りあえず俺の行動を糾弾して俺が無能であるという印象をさらに植え付け政戦を有利にしようとしているといったところか

シャルルの方を見るとあちらも苦笑いを返して来る

「しずまれ」

父上の言葉で場が静まり返る

「ジョゼフよ、ひとまず質問だが貴族の地位を与えた以上、同時にその人物に領地を与えたということだが、そのあたりはどうなっている？」

「はい、先ず彼には先日つぶすことが決まっていたレイモンド家ごと、彼の土地をそのまま与えています」

この言葉で周りの空気がやや弛緩する

そう、別にあいつが貴族になったり役職、しかも今まで存在しなかった地位についたからといって彼等の地位ががるわけでも、自分の

領地が減るわけでもない。

直接的な被害は無いはずなのだ

しかもここで出てきたのがユアンに与えたのはレイモンド家の土地という情報

現在あの土地に資源といったものは存在せず、またこれといった特産品も存在しない

そして、遂に先日レイモンド家取り壊しが決まっていた

あいつの能力は悪くはないのだが先代より続く負債と現在の領地の状態では復旧は無理だったというわけだ

なにせ改革というものは普通そう簡単にできるものではない
大抵の物には金がかかるし、しかも結果が出るまでに数年かかるものもざらだ

すでに多額の負債を抱えてる中で更に多額の金を抱えるのなど不可能
寧ろそんな中、今までレイモンド家を持たせることのできたのが驚きなぐらいだ

いくら有能でもそれを生かせる下地が無ければ意味が無いという典型例とっていいだろう

さて、前述した理由で例えその土地を得てもむしろ余計な支出が出るのが見えていて、実際過去にレイモンド家と同じ末路をたどった貴族は多数いたため、ただでさえそこを進んでその土地を引き取るうとする貴族はいなかった

しかもユアンは負債を抱えているレイモンド家ごとその土地を引き

取った

これではもう、ユアンは貧乏くじを引いたと言つ以前の問題だ
それだけで脅威などあるわけがないと考えるに至るのに十分な根拠
だった

そんな空気に内心ほくそ笑みながらジョゼフは次のカードを切る

「また、王宮技術開発機関についての説明ですが、細かい取り決め
を除くと

- 1． 基本的に国の利益になりうる研究であるならば自由に行つて
よいが、王宮より発注が行われた場合そちらを優先すること
- 2． 研究資金はに關しては専門の予算を組むが、どの様な研究に
使うか必ず報告すること
- 3． 四半期に一度必ず王宮に成果を報告すること。 それに納得
がいかない場合組織の解体も考慮に入る
- 4． これは試験的に作つたものであるため2年間の試運転後、正
式に採用するかどうかを決定する
ということとなっています。」

これを聞いたジョゼフ・シャルル派とも頷くだけで不満を出す者は
いなかった

そう、ユアンに用意したポストなど貴族たちの行動の妨げになるも
のは一切ない、寧ろやりようによっては己の方にも利益が出るのだ
から

唯一の危惧である眼を見張る成果をその研究機関から出たことによりジョゼフの地位が強化される可能性も、同じようなものを作ればいいのだけなのだから。

しかもこちらのものよりも何倍も大きな規模の物を。

なにせ先ほど言ったようにこれは二年だけの試験機関、たとえ此処の有用性が出ても

『此処の機関は良かった、正式採用しようじゃあないか』

『しかしこちらにも同じようなものがあるしこの際統合しようじゃあないか』

『こちらの方が規模が格段に大きい、そちらをこちらに吸収させる方がスムーズになるだろう』

『なに、やることは何も変わらなしさ（主任の地位が俺達の方になる以外はな）』

とすればいいだけだからだ

最も、みすみす利用されるつもりも、利用させるつもりも二人には無かったが

王宮技術開発機関をどうするかはその時になってから決めるつもりだが、王宮技術開発機関は元々ユアンという人物を印象づけるために用意したものでしかないからだ

それに次にユアンに与える地位もすでに決まっている

初めに彼に与えた指令は『とある広大な荒野をどうにか国にとって有用な地にすること』と、その見返りにレイモンド家の借金はジョゼフ個人が持ち、更にその返済期限および免税を二年行うことを決めたと最後にジョゼフは説明したが、もはやそれを非難する者はいなかった

どう考えてもユアンが引いたものは貧乏くじであり、そんな物をわざわざ糾弾する気は彼らには起らなかった

そしてそのまま、ユアンの処遇はジョゼフが提示した物と何も変わることなく会議は終わった

この数年後、ガリアは一つの転機を迎える

己の利しか考えていなかった者とそうでなかった者とで

元々二人の計画に、シャルル派だからとかジョゼフ派だからどうこ

うするといった要素はなかった
ただあったのは・・・・・・

欠片 カトレア1（前書き）

この章は都合上、時期が話ごとにばらばらになっています
出来るだけ分かりやすくするつもりではありますが

欠片 カトレア 1

目を覚ますと目の前に此方を覗きこんでくるピンク色の物が見えた

「……………ん？」

「あ、おはよう。 目が覚めた？」

ああ、もう朝か……………

「ん……………ああ……………おはよ……………」

「うん」

……………あれ？

頭の回転が始まると、ふと現状に違和感を覚える

「……………」

「どうしたの？」

「……………誰？」

いや、本当に

「家族でピクニックに来たらなにか惹かれるものを感じてそこに来たら俺がいた、と。」

「ええ。」

「……………（おい）」

周囲の管理を任していたシルフとアスカに意識を向ける

（どう言つことだ？）

（いや、なんかこの人物凄く鋭いんだよ。）

（ええ。私達で人を寄せ付けないようにしていた結界に逆に気付いて…というか、なんとなく違和感を感じたらしく、それでなんとなく此処に来てしまったみたいなんです。）

(僕から言うのはなんだけど、対策は完璧なはずなんだ。実際の奴等、この人がいなくなつて探し始めてるのにこっちは見向きもしていない。
よつぽど『雰囲気』に敏感なんだと思うよ。)

なにその理不尽

(……………因みに今後は対処できるのか?)

(物理的な排除をしていいなら)

(ああ、それほどなの(ドサ)……………え?)

話している途中に先程の女性が突然こちらに倒れて来、呆然となる

(立ちくらみか?)

取りあえず、根元に横たわらせようとするが

(ねえ、その子多分病気だよ? 流れがかなり淀んでる)

(……………そう言うことは早く言ってくれ)

アクア（水の精霊）の言葉で、急いでこの女性の治療を行うことになった

.....

「.....ん..」

「おお、目が覚めたか!!」

目を覚ますと安堵の表情をするお父様が目に入って来た

どうしてそんな表情をするのかしばし思考にふけり

「（ここは私の部屋）.....すみません、御迷惑をおかけしました」

「いやいいんだよ。お前が無事だったのだから。」

お父様は首を振りそう答える

だけどそのあと、表情をやや引き締めた

「ところで体の調子は大丈夫なのか？」

「ええ。もう大丈夫です。」

「普段と同じぐらいという意味か？」

「?.....そうですが？」

それを聞いてお父様はそうかと呟きだまるけど、だけどこれは.....？

「所でカトレア、お前は我々から離れた後に誰かと会わなかったか？」

「はい、男の子と会いました。年齢はたぶん私の二つ三つほど下です。」

.....それが何か？」

「お前のそばにこんなものが置いてあったんだ」

そう言って私に紙を見せる

『診断書』

病名 慢性骨髄性白血病（Chronic myelogenous leukemia, CML）

軽度な状態なので家庭での治療は可能
以下の薬を処方しておきます

処方薬 *****

一日一度、指定された量を食後に経口投与して下さい

注意事項：最悪死に至ります

- ・他の薬と併用しないように
- ・指示された分だけを服用するように
- ・アルコール飲料と併用しないように

「それと一緒にそれに薬と書いているものも置いてあった」

眼を通し終わったタイミングで声がかかり、目を上げるとそこには神のようなものに包まれた粉状の物と、色と形が全て同じの綺麗に整った小さな小石が詰まった瓶があった

「はつきり言ってこれは信用できない。」

そこに書かれている事柄も、此処にある薬と書かれていた物も見ただことも聞いたこともない。そして雇っているメイジにも見せたが全員首を横に振っていた。

だがお前の暗殺をもくろんでいるなら普通こんな怪しいものは使わないし、実際毒見させたが異常はなかった。

なのでお前の症状が軽減されたならばもしかしてと思ったのだが」

違ったようだなとお父様は気落ちした表情をする

「それでは「待つて下さい」なんだ？」

部屋を出て行こうとするお父様を引きとめる

「その薬を試してみたいのですが」

「なに？」

惹かれるように歩いて行った場所にいた男の子

なんとなく普通の子じゃない気はしたが、だからと言って悪い人でもないと思った

「それは毒薬では無いんでしょう？　だったら試してみる価値はあると思うのですが。」

その後、お父様を言い含め少しの期間だけ試してみることになった
最も………

「ですが他の薬と服用してはいけないと書かれていたではないですか
それにそれだけ量があるということは長い時間がかかるのが前提の
気がします」

「雇っているメイジ達はそんな事実は存在しないと口をそろえて言
ったのだ。」

見たことも聞いたこともない、あり得ないとな。」

此処らが落とし所だったみたいですが

それにしても本当にあの子は誰だったのだろう………何処かで
会った気がしたのだけれど

欠片 カトレア1（後書き）

最後の一文のためだけに書いたと言っている文章（おい

彼女がヒロインになるかどうかはまだ決まっていません。

まあ、とは言っても他にこれと言った人物はいないんですよね。
マチルダあたりを考えたことはあるにはあるのだけれど。

でなけりゃあ、オリキャラでも作らない限りヒロインなし

p a s t 1

「兄さん？」

書かつてるく声にまぶたを開く

「ん、ああすまない」

いかん、意識が飛んでいたらしい

「大丈夫なの兄さん？　ちゃんと睡眠を取った？」

丸テーブルをはさんで俺の顔を覗き込んでいるのは俺の弟である二洞護
にどうまもる

こいつは文学系に進んでおり、考古学や言語学の研究者として名が通っている

理系に進んだ俺と同じ大学に来たおかげでこうしてよくあっている
そしてやはり兄弟というべきかどうか、こいつも熱中すると我を忘れる傾向があり

「少し研究に疲れただけさ。大したことはない。そういうお前の方こそ大丈夫なのか？」

古文書の解読で数日部屋に籠りつきりだつたつて聞いたぞ？」

「僕は睡眠はちゃんととっているよ、兄さんみたいに徹夜で実験なんかしていない」

まあ、俺は一度気になると寢床に入っても目がさえて全く眠れなくなる性質なんだな

一区切りぐらいつけないと寝ることさえ出来やしねんだ

「そうか？ それにしても、お前つて何を書いてあるか分からない文章を片手によく何時間も持つもんだな。」

先ほど言ったが、こいつは考古学や言語学の研究者だ

そんなこいつが行うのは古文書の翻訳、未解読の言語の考察などだ

「そうでもないよ。兄さんなら同意してくれると思ったんだけど。」

「いや…俺の性には到底合いそうに無いんだけど。」

俺も丸一日図書館にこもりつきりになったことはあったが、何を書いているか分からない物を相手にそんな真似をすることは出来ない自信がある

「そんなことないさ。 解読って、一言で言えば『パズル』なんだよ?」

「パズル?」

「うん。それが何かを表した文である以上そこには何らかの法則が存在している。

要素要素を抜き出して、該当しそうなものに取り換え、『文章』と言っものを発見する。」

「俺らがやる、分析・仮定・実験・実証と一緒にってか?」

「その通り、兄さんも面白く感じると思うけどね?」

「そっかねえ……でも」

「ま、どっち道今は興味が無いからいいわ。
所で、お前の彼女はまだ来ないのか?」

「か、彼女って。 結衣とはそんな関係じゃないよ!」

「名前で呼んでるくせに……」

「それは兄さんもだろ」

「まあそうなんだけどねー?」

俺がにやけながら言うときまだ少し赤くなった顔で大きく咳払いをした

「ゴホン、そう言う兄さんこそ、彼女の一人ぐらいは……………居ない
んだろうね、浮ついた話全く聞かないし」

こいつ途中で憐れんだ目を向けてきやがった

「う・る・せ・え・よー!」

「いひゃいよにいひゃん」

というわけで、腹いせにこいつのほっぺをつねっていると

「ごめん遅れた……………つてなにやってるの?」

先程の話題に上がっていた俺の二個下、つまり弟と同学年の俺達の
幼馴染

木下結衣がやって来た

欠片 アルバート（前書き）

この章は都合上、時期が話ごとにばらばらになっています
出来るだけ分かりやすくするつもりではありますが

欠片 アルバート

Side アルバート

ユアンはどんな奴かって？

そうだな、まあ一言で言うなら『規格外』かな？ 『非常識』でもいいけど

そんなことは見たら分かる？

あはは、でもさ、実際あいつはこれ以上ないぐらいその言葉を体現した奴だぜ？ 寧ろそれ以外の言葉が思いつかない、あえて言えば『ユアンだから仕方ない』か……まあ、とにかくあいつはむちゃくちゃな奴だよ

俺達と出会ったときからな……

どんなふうに出会ったのかって？

そうだな、あれは俺とエミリィ……ああ、俺の妹な、この二人で魔の森を逃げていた時だった

ん？………勿論知っているさ、【帰らずの地】の一つ『魔の森』、『異界の門』・『幻獣の山』・『深淵の谷』といった凶悪な亜人や幻獣がすむと言われている人が近寄ろうとしない場所の一つだ

実際俺達もあんな場所に行く気はなかったさ

……ああ、それを説明するには俺達の身の上を話さないといけ
いな

俺達は元々ロマリアの民で、両親はそこでしかない商人をやっ
てい
たんだ

俺達の…特にエミリイの言葉使いが丁寧なのはこれが理由だな、後
継ぎとしてたたきこまれていたからさ

……俺はそうでもない？ 言ってくれるね。

レイモンド様、先程は身分をわきまえずに言葉を発して申し訳あり
ませんでした

私めなどのような下賤の民があなた様のような高貴なお方と口を聞
くようなことができたこと自体がたくいまれなる好運であるのに、
私めは………気持ち悪いからやめろって……かなり傷つくん
だけど

まあとにかくそんな中細々と生きていたのさ

いや、商売自体は案外うまく行っていたと思うよ？ でもさ、俺達
の住んでいた場所を治めていた神官が最悪だった……いや、あれは
もういつそ搾取といった方がよかったな

八割を毎月教会に寄付しろだぜ？

ああ、馬鹿にしているとしか思えないよ。

だからといって他の場所に行くわけにもいかなかったんだ、何処も大して変わらなかったし、九割なんて場所も普通にあつたからね。それに下手に逃げようとすれば即異端審問だぜ？

あはは、信じられないだろ？ でも本当のことさ
ん？税は無料だって聞いてた？ そうだよ、あれは税じゃなくて慈善で行う寄付だってよ？

凄いだろ？これが光の国なんて奴の実態さ
中央の方はどうなのか知らないけどさ……ま、聞く限り見た目はいいみたいだけど本当はどうだろうね。
まあともかく俺らの周り是这样だった

でさ、ある時さ、その神官が俺達の店に来たんだよ
んでその時の内容を要約すると、寄付をしるってことだったんだ、毎月納めているのとは別件でだ

ふざけてるだろ？ だけどそれだけじゃない、あいつは寄付として
一万エキューをよこせって言ってきたんだ

どう考えたって不可能、家の全財産を売ったって五千行くかどうか
だったんだ

当然両親は拒否したよ、不可能だって。
そしたらあの野郎どうしたと思う？

調査だつて言つて売り物だろうが形見だろうが金になりそうなものを全部持つていこうとしたんだ！

ああ、勿論両親も黙つて無かつたさ！ 抗議した！！ そしたらさ……あははは

俺達は異端審問にかけられて……親父は殺されたよ

罪状？ 神官に危害を与えようとしたからだつてよ？

で残つた俺達は情けだとか言つて……奴隷になつて……あいつの下で他のやつらと一緒に働くようになった

神官が奴隷を持つなんてつて？ もう今さらだろ！？

……わりい、熱くなりすぎた

……ま、そんなわけで奴隷生活が始まつたつてわけ辛かつたよ。何度死のうと思つたか……でも母さんが俺達の身代わりになつて、あいつが俺達にひどいことをするのを防いでくれていたんだ、これ以上母さんがつらい思いをさせないために死ぬわけにはいかなかった

母さんのおかげで俺達に手が伸びることはなく、今の俺は五体満足だし、妹も汚されることはなかつた

けど母さんは……ある日水を汲みに川に行つたら……そこに

引つかかった死体が、それが……おかしいと思っていたんだ、あいつが気に入った新しい女を買ったってのを聞いたのに母さんの話は全く入って来なかったから……

仲間に聞いたら……抱くのに飽きたら……その人たちの最後は……何時ものことなんだって

すぐに俺は妹の髪を切って男に見られるような格好をさせた、幸いといっていいのかあいつはもう俺達のことを忘れていたから……奴隷って認識でしかなかった、妹を対象にされないように

……死のうと思わなかったかって？ どうして？

なにもせずに、死ねるわけ無いだろ

妹と約束したよ、死んでやるもんかって

復讐さ……

なんども祈ったよ、ブリミルに……あのやろくに復讐の機会をとってな

で、あいつと出会った日になる

その時俺らは、此处、ガリアに来ていた、ガリア観光の手伝いとして連れられてな

聞き分けのいい子の振りをしていたからな、いつもよりいいものを着せられて一緒に行くことになった。外聞は大切だからな。

ああ、嬉しかったよ。俺達二人とも顔がほころぶのを抑えるのに

必死だった、その時が来たんだって

旅の途中なら、あいつに近づくチャンスは必ずあるはずだ、あいつのそばにいる護衛を掻い潜ってあいつを●するチャンスがあるはずだって

で、その晩魔の森の近くの村で泊まることになったんだけどその時あいつ散財したせいで懐がさびしくなっていたんだよ。

さて問題です、あいつはどんな行動を取ったでしょう？

『ただで泊める』？ おしい、『俺にただで部屋をよこしてついでに寄付という名の金をよこせ』でした

あはは、そうだよな、とことん腐ってるよな

んでお前の予想通り相手は拒否、それで異端だ〜お前らこいつ等をとつちめろ〜だ

チャンスだった、あいつは作業を護衛にやらせて高みの見物をしていた

護衛は村人にかかりつきり、今しかなかった

俺は隠し持っていたナイフを持ってあいつに突進していった

けど外れた、風のメイジだったあいつはかすかな違和感を感じたのか俺の方に向いて、脇腹を傷つけただけだった、それで俺はあいつの魔法で吹っ飛ばされた

俺はエミリーと森に向かって一緒に逃げた、護衛がすぐ近くに來た
以上もう一度向かうことは無理だった

とにかく生き残ることだけを考えて逃げた

まあ、だけどそこは大人とまともな生活をしていなかった子供、エ
ミリーが先に力尽きて、背負って逃げたけど結局そこからすぐに追
いつかれたよ

悔しかった、悔しくてたまらなかった

だけどその時に聞いたエミリーの言葉はもっとショックだった

せめてもの情けだ、祈る時間ぐらいやろうつていうあいつの言葉に
言い返したのだよ

「誰があんたを許す神なんか祈るもんですか」ってな

ショックだった

俺はなんてやつに祈っていたんだって

あいつの信仰しているのとおなじ神にあいつの復讐を願っていた？

怨んでいた、こんなことをした神官を、あんな奴を貪らせていた教

皇を！　ロマリアを！

なのにあんな奴を見守っている神なんて言うブリミルに俺は祈っていたんだ

そして怨んだ、憎んだ、あの神官を、それを守る教皇を、そんな奴等の国であるロマリアを、こんな世界の神だって言うブリミルを

でさあ、そんな時ガラムが来たんだ、まあ、さんざん騒いで俺達を狙って魔法を打ちまくっていたからな、それに刺激されたんだろ

んでそれに気付いたあいつ等はそれを撃退しようとしたけど、返り討ちにあつた

あいつ等は攻撃してきたからかあつちの方が大きかったからか知らないがこつちを見向きをしないであつちを襲っていた

あいつの最後の言葉も傑作だった「お前らの欲しいものをやる、だからやめろ、ほら、あつちにお前らが倒した護衛の死体があるぞそつちに行け…………く、来るな！　私を誰だと思っている！　偉大なるブリミルに仕える…………ぎゃああああ」だったな

ん？　いや、感覚がマヒしてたのか怖いとは思わなかったよ…………いや、違うな。

正直、俺はガラムが神の使いに見えたよ、ブリミルじゃない本当の神のさ

エミリーに聞いたらあいつも同じことを思ってたってさ

でも遂にガルム達は食べ終わって俺達の方を向いて来た
終わったとは思ってたけどあんまり怖いとも思わなかったな

ただどあいっ等はふと何かに反応して俺達をおいて何処かに行った、
そして俺達の前に現れたんだよ、ユアンが

でさ、あいつ初めに俺達になんて言っただけだと思っただけ？

クク……「ん？ 誰？ お前ら？」だよ

普通「どうした？」とか「大丈夫か」とか聞く所に「誰？」だぜ？

ちょっと固まっちゃったよ

で、まあ色々あって行き場のない俺達はいっしょに行くことにな
ったってわけさ

いくつかの条件と引き換えにな

ん？ いや、お前の状況とあんまり変わらないよ、概略するとあいつ
の教えを必死に吸収することさ

そうそう、あいつ何であんな場所を通ってたと思う？

『近道だったから』だよ。

まあ、そんなわけで俺らとあいつは出会って、あいつについてリュ
ティスに向かったってわけさ

道中で何度も死にかけながらな……あいつの修行で

あとはお前の知っている通りさ

俺達はリュティスで何故かあいつの知り合いになつていたジョゼフ
陛下に面会して……言うな、俺もあれを思い出すと頭痛がする……
……いや、ほんと手続きが面倒だし待たされるのが嫌だから
なんて理由だけでどうして真っ昼間に堂々と王宮に侵入するなんて
結論に達するんだよ……しかも躊躇なく実行したし……俺達を
巻き込んで

まあそれでジョゼフ陛下の元に行ったら丁度猶予を頼みに来ていた
お前ら一家に会ったってわけだ

でなし崩し的につてか、一方的にいつの間にかあいつはジョゼフが

あの場ででっち上げた『王宮技術開発班』って役職の主任になって、俺達は何故かその一員になって、なんかその対価にとか何とかでお前ら一家の面倒をみることになって……

で、あいつは此処『カボサルド』一帯を開発して……って言うか一年で巨大な町『シャンバラ』をでっちあげて……

ああ、なんかあいつの友達とか恩人のためならばって言ってエルフとか亜人が来て、そいつらが作業してくれたからスピードが異常だったな……ってか今もいるよな、此処に住みついているし

いや、あいつの交友関係なんか知るか、どうせ非常しなことでもしたんだろ？

ああ、そう言えばそうだったな、そりゃ敬意をもたれる訳だ

……ってやつば非常識な方法じゃんか

今さらか……

ああ、それからも色々あったな

俺達が『王宮技術開発機関』から抜けて、何でかあいつは代わりに『宮廷魔導師長』なんてものになって俺達の他に、何故かジヨゼフ殿下を弟子に取って

いやまあ、以前から教えてはいたけど、正式にさ

まあ、そこら辺ドロドロとしたもんがあったんだろ……

そして、シャルル殿下暗殺事件！！

いや、俺も聞いたときはびっくりしたよ、ただでさえあの時いいわさを聞かなかったジヨゼフ殿下が遂にあんなことをしてしまったのかってさ

…… ああ、だけど違ったみたいだな

そしてそれが俺達の契機だった

あはは、まあお前にとったら気が気じゃなかったよな。
でも俺達には愉快的日々だったよ

大々的に貿易を始めてさ…… エルフとかと、
色々な特産品を作り始めてさ…… 亜人たちとも協力して

学術都市を始めて、ブリミル教のやつらが急いで教会を作るよう言
つて来てもすでに十分な場所がないような状態にして、しかも実験
都市の名の元にいろんな対策をして極力教会に金が行かないように
してさ…… 突っかかってこようものなら…… 馬鹿だよなあ
…… エルフだっているのに……

ま、何より笑ったのが新興宗教なんか作ってたってことだよな、あ
いつは頑なに人生相談所とかめかしていたけど、ブリミルに睨ま
れないよう色々画策しつつ勢力を伸ばしていたんだからどうだかね？
更には今俺達が習ってるこの魔法だぜ？

あいつが独自に作りあげたこの魔法、精霊魔法なんて言えない。
精霊魔法ではあり得ないから……くく、でもあいつ等にはできない、ブリミルを否定しないとたどり着けないから……ホント、あいつに会ってから俺の毎日が満ちてるよ

……
…

ん？ どうしたエミリー？

ユアンが呼んでる？ 分かった

そっぴやお前今までどこについて聞くまでもないか。蔵書室だろ？

………あ、そうなんだ。

いや……俺はお前ほど知識に貪欲になれそうにはないな

あはは、いやあ、ほんと俺の得意な属性、火でよかったよ

.....

ユアンの執務室に到着した三人はそのままユアンと共に街から数十キロ離れた、辺りに何もない場所に飛んだ

「さて、お前らを呼んだのは他でもない」

「久々に本気での組手か？ 今度こそぎゃふんと言わせてやるぞ」「いやちよつと違う」なに？」

「お前らは俺の修行が終わったあとと個人で自分の力を磨いてきたことだろう、そこで、今さらだが卒業試験をしようと思う」

その言葉に三人の纏う空気が変わる

数ヶ月前から三人はユアン直々の修行を行うことはなくなり

その後は各自で自らの魔法を磨いてきた（最も、ユアンにいくらかの技の伝授や開発の手伝いを頼んだりはしていたのだが）

しかし今回——リオンが言った通り今さらなことではあったが——名実共にユアンから一人前と認められる時が来た

それを噛みしめ、魔法を発動したユアンに三人は身構える

「これは、本気を出さないわけにはいきませんね」

「ええ」

「全力で行くぜ」

土系統による『偏在』で数名に分かれたユアンが向かってくる
土系統の魔法により、在るものは剣を持ち、在るものは高速で飛行しつつ、在るものはその場にとどまり魔法攻撃をしようとし

三人はユアンの下で修行し、さらに己で磨いたそれぞれの魔法・又は技術をもってそれに対峙した

欠片 アルバート（後書き）

この物語を作るに考えたのは

- 1 ・何か他の作者がやったことのないようなことをしたい
- 2 ・他のSSの影響もあつてかブリミル教に良い感情が持てない
- 3 ・だったらブリミル自体悪役にしちゃおうか
- 4 ・ブリミルが信仰される一番の理由は何か？
- 5 ・それは魔法だ
- 6 ・それ自体否定しちゃえ、特に虚無！！
- 7 ・どうやって？
- 8 ・他のSSでもあるけどいくつかの虚無（特にエクスプロージョ
ン）は他の系統魔法で代用可能
- 9 ・あれ？ そっぴや焰の大佐は錬金術で爆発とかやってたよな？
- 10 ・他の錬金術師って凍らせたり人治癒したりもしてたよな？
- 11 ・これだ

12 ・いつその事炎で治癒とかもできないかな？ 考えて見よう

でプロット作成しました

結果

なんかえらいバグキャラが出来あがりました

欠片 とある貴族Aさんの場合

クソ！！ 何でこんなことに！

馬に揺られながらこれまっでのことを思い出し、思わず悪態をつく

そんな事をしてもしようもないのだが、つかずにはいられなかった

俺の人生はここ数年で転落してしまった

どうしてこうなった！！

何処でケチがついた！！

俺がシャルル派だったことか？

いや違う、確かにシャルル派の方が落ちぶれたやつが多いが、落ちぶれたジョゼフ派の連中も少なくはない！！

ジョゼフが王になることに我慢できず行動を起こしてしまったからか？

確かに俺の転落人生が決定的に始まったのは間違いなくあの時だ俺達、シャルル派の中でも特にあの無能王が王になるのが気に食わなかった者達……… 具体的に言うとなら反乱を起こそうしたり、実際に起こした連中はほぼ全員潰された

そして俺もその貴族の一つだ！！

だが、氾濫に加担しなくても潰された家が存在する

そもそもそれなら反乱を起す意味さえなかったジョゼフ派が潰れていくのがおかしい

となるとなんだ？　なにが契機になった！？

まあ、手当たり次第だっただけでこれといった理由などないのかもしれないな、腰巾着どもも破滅していったのを見ると実際はそんなところだろう

だがそれにしても何でこんなにことごとくやることが裏目に……

…

そして考えてくるとわき上がってくるのはあの餓鬼

ジョゼフの阿呆に従っているからと、ほおっておいたあの小僧

あの忌々しいユアンと言うやつのことだった

そうだ、間違いない……………あいつが来たせいで俺達のツキが逃げたのだ、

あの悪病神め！！

断片2 とある貴族Aさんの場合1

私はシャルル派の貴族だった
理由など簡単だ、あと数年もすればシャルル殿下かジョゼフ殿下
のどちらかが次の王になることが決まっていた

となれば、その有力な方につき、覚えを良くしてもらおうとする
のは当然のことだ
覚えが良くなればそれだけ良い思いが出来るからな

そうなると付く方など決まっている

もちろんシャルル殿下だ

なんせシャルル殿下は素晴らしい魔法の才能を持っていたのだ、
そのくせジョゼフなどコモン魔法すらできない出来損ない

そのような物の前に第一皇子などと言う肩書はへでもない

結果など一目瞭然だった

ホント、ジョゼフの方についた見る目のない奴等が本当にかわいそうだったよ

あんな無能な奴に未来を見るなんて

ホント滑稽だった、

あの無能王も自分についてくれる奴らがいたせいか、急に張り切りだしちゃって

まあ、その程度でどうかなるわけなどなかったがな

なんせシャルル殿下はジョゼフが王になり、ガリアを駄目にされないよう頑張っというしやっただから、無能がいくら頑張ろうと無駄無駄

まったく、本当にシャルル殿下は素晴らしいお方だった

我々の言うことをちゃんと聞きいれてくれた

我々に彼の素晴らしい風の才能を見せてくれた

その前で、ジョゼフの浅知恵など、何時まで持っていたこと

やら

そしてそんな中、あの餓鬼、ユアンが現れた

なにが琴線に触れたのだから、どんなふうにも売りこんだのか
とにかくあの無能王はあいつを貴族にした

ま、その後の情報で俺達を脅かすことはなんてないと分かったからその時はどうでもいい存在だった

いや、寧ろなんて能天気なやつなんだと憐れんだぐらいだ

なにせ無能王があいつに頼んだと言うのはとある土地をどうにか有効活用しろと言うもの、それは辺り一面の荒野で実りがなければ資源もない、なにも取り柄のない土地、『帰らずの地』並みの扱いを受けている場所だった

つまり、あいつは誰だつてやりたがらない物を引き受けてしまう馬鹿野郎だつて結論を出すには十分だったつてわけだ

しかもレイモンド家を借金ごと受け継いだ、もう勝手に潰れていくのが見えていたよ

ついでにジョゼフの無能具合も再確認できてうはうはだった

.....

.....

.....

奴に初めてまみえたのは、あの無能王が思いつきで作った『ガリア王宮技術開発機関』の初めての成果発表を見に王宮へ行った時だったな

そこで待っていたのがあの黒髪の餓鬼、ユアンと彼が持つて来ていた発明品、最新式の馬車だった

ジョゼフに取入ったという人物が平民だとは聞いていたが、それがこんな小さな子供で更に研究成果が馬車と聞いた時は笑い転げそうだったよ、所詮はこんなもん、無能王の連れはやっぱ無能だつてな

だってそうだろ、装飾を豪華にただけで評価されると思うなんておかしているとしたか考えられなかった

実際他の奴等も嬉々として攻め立てたんだからさ、元平民風情が意気がるなってるんだ

ま、実はその馬車は今までの物とは一味違っていたんだがな

確かスプリングとかサスペンションだとか言っていたか？ まあとにかく、それを使って今までのよりもずっと乗り心地がいい馬車を作ったのだ

馬鹿にしたらなかいかいものを開発したもんだ、もちろん俺達はそれを我々に提供させた。なにせそのための『王宮技術開発機関』なのだ。当たり前のことだ。

あんな奴の技術を我々高貴な身分が有効に使ってやるんだ、元平

民風情にとつてはまたとない褒美だろう？

実際あいつはすぐに設計図をよこした

まあ、先程の通りあたりまえのことではあつたがな

その次の時は紙だつたか？

まあ、それも従来の物よりも効率的なものだつた

その後もあいつは四半期ごとの報告会で何らかの物をもって来た

そこで俺たちも研究機関を作ることにした、あいつのよりもずっと、ずううううと大きな奴をな

ふんだんに金を使っているんなものを作った

その後は、あいつの物などがすむかすむ
ずっと価値のあるものを作つてやったよ

さて、いつのころだつたか、とあるうわさが流れてき、それはとある荒野に突然途轍もない大きな壁が出現したと言ふものだった

まあ、その噂の場所が荒野の奥の方に位置しているといったこともあり、ただの幻覚だと皆よくある一種のほら話として扱っており俺も類にもれずそれを根も葉もないいわさと特に躊躇せず片づけてしまった

そう、片づけてしまったのだ！！

だが仕方がないだろ！！

あの地域はリュティスと他国の首都をつなぐルートとは違う場所にあつて、その上その土地がある街の延長線上にあるのはエルフが居ると言われる広大な砂漠

とどめにはそちら側にある街へのルートからすら外れた正に何処にも繋がらないような場所

名目は王領だが、だからと言って国も手を出そうとなんかせず、俺達貴族もそんな場所はほしくなかった

あんな場所をもらうぐらいならレイモンドの領をもらった方がまだ良かった

あっちの方がまだ有用性がある

そんな土地なのだあそこは

まあ、そのレイモンド領も隣接するからとか、ついだからとか、色々な言い分を付けてその一家ごと借金まで含めてあいつが管理することになっていたが

まあとにかくそんな場所なんだあそこは！！

そこの開発を命じたあの無能王の正気を疑わない奴なんかいないぐらいの場所なんだ！！

そんな場所に、しかも奥の方に1000アルパンを軽く囲んでしまうぐらいの壁が出来たって噂だぞ？

1000アルパンだぞ！ 1000アルパン！！

100アルパンもあれば城が立つ、ほらを吹くにしてももう少し頭を使えってレベルだ！！

信じる方がバカだってもんだ！！

ああくそ、あの時の俺を殴り倒してやりてえ！！

どうして情報を集めようとすらしなかったんだ！！
ユアンの調査をしようとしなかったのかと！！！！

ああそうだな、常識的に考えてあんな短期間にできる訳無いもんな！！

誰が汚らわしい亜人と協力するなんて罰当たりな方法を取るなんて考えるかよ！！

半年が過ぎてだいぶたった辺りから俺達はある動きを感知し始めた、レイモンド領に人が集まり始めた

まあ、つまりレイモンド領が人手不足になって来たと言うわけだ

猶予期間をもらったあの家は商会を始めたことにしたらしく
その一方でそこで取り扱う品物を作るためだろう、最後のあがき
とばかりに農地開発などを一気に始め、その仕事に就くべく殆んど
領民の居なくなっていた地に平民どもが流れて行ったというわけだ

まあ、トリステインのハイデルベルク家を参考にしたらしい

だからどうした？　と思つて俺達はそれを放置した
なにせハイデルベルク家を見ても分かるが、成功したからといつ
ても一躍有名になった訳では無かつたからな

そしてあの餓鬼が来てから一年、今からし五年ほど前か？
あいつは急に学校を始めるとか言いだした

あの時俺達は笑つたよ

あの土地を如何にかすることができずに遂に自棄になつたってな
しかもその内容がバカにしているようなのもだった

何で俺達が平民なんぞと共に学ばなけりゃいけないんだ

ま、そんな訳で俺達は誰も応募しなかつた

ああくそ！！

あの餓鬼め、絶対俺達を笑っていやがった

なにせ今思えば俺達はずっと踊らされていたわけだ！！

今までの行動全てが布石だったんだからな！！

試験機関が終わったあの日、あいつは仲間共に王宮技術開発班の任を解かれた

いや、自分から辞めて行った

理由は俺達は規模の関係からこっちの機関の方に取り込んだ方が早いと提案したらあっさり辞めると言ったのだ

別にやめたってかまわないから俺達はそれを了承した、してしまった！！

そうしたらあいつは宮廷魔導師長なんて職に就いた
ジョゼフに魔法を教えるためだと言ってたな

俺達は拒否した

理由は体外への理由づけの内容、『宮廷魔導師は王宮が有能であると認めたもの』、そしてあいつはそのリーダー、つまり国一と

言っていい魔法使いと言うことになる。

対外的嘘といってもそんなものは認められないと言うものだった

だからあいつは俺達の前でその力を見せつけた

やったことは簡単だ『傍にいた騎士の剣をもらいそれを金で出来た剣に鍊金』したのだ

相当疲弊してはいたが、あいつは剣一本を丸々金に変えたのだ！！

そんなことは俺達の誰にも出来ない、

俺達はその時にジョゼフの狙いに思い当たった、

王宮技術開発班も、荒野の開発依頼もただのフェイク、真の狙いはレイモンド家との二年という歳月を共にさせることで繋がりをもたせ、結果としてジョゼフ派に所属

シャルル派に流れないようにするためだったとな！！

あんなに有能な魔法使い！！

ああ、ぜひ手元に置いておきたいよなあ！！

あの数ヶ月前から化けの皮が剥がれはじめ、無能の様を再びかもし上げて来たジョゼフの野郎、あんな奴をそばにつかせたのはそれ

が理由だと考えた

あの時は焦った、宮廷魔導師を承認しない訳にはいかなかったのだから

それが決定した後は俺達は奔走したよ、あの餓鬼の存在がかすむぐらいジョゼフは無能だという事実をまきちらさなければいけないかったのだから

まあ、ネタには困らなかった

あいつが未だ14歳と言う年齢だったと言うこと、そしてそれ以上にジョゼフが全く魔法を使えなかったということだ

だが可笑しいことが起こり始めた

霊地が次々と見つかったのだ

精霊が住まう地、その場所は帰らずの地など今まで人の寄りつこうとしなかった場所ばかりだった

可笑しい事になっていたので調べて見たらいつの間にか精霊が住みついていて、亜人との争いで存在を確認、そこに住まう精霊の気に障る何らかを行い怒らせた、その報復により確認判明した理由は様々だったが、『火・風・土・水・木・雷』なんとそれが一年間で現れたのだ

水の精霊にしても、ラドリアン湖とは別の精霊だ！！

異常だった、性質の悪い物語を見ている気分だった、一体見つかるだけでも嘗て無いほどの大ごとなのに六体の精霊の存在が続けて確認されるなんて

招集され話し合いが行われた時にはすでに三体の精霊が確認されていた

そしてそこで行われたのは精霊との話し合いと、交渉役の選定と、精霊およびその場所をどの様に扱うのかと言うもの

結果、取りあえずにと打ち立てた計画の概案はいわゆる観光地化の計画だった

それ自体はおかしくはなかった、一応トリスティン所属のラドリアン湖も此方としては貴重な観光地、精霊がいると言うのはそれだけでかなりの価値がある、特に反対する理由もなかった

だが発見された場所のほとんどに亜人の存在があったのが問題だった

そして案が二つに分かれた

亜人を追い出す・討伐するという案と、亜人と和解して共にその場を守ると言うジョゼフの出した案だった

理由としてはそれまでその場にいた亜人の方が精霊に詳しいだろうと言う内容と、無駄に争って精霊を怒らせてはいけないと言うもの

そしてその時点で確認されていた土・風・木の精霊のうち、実際に木の精霊が発見された原因はその精霊の住まう地に貴族の一人が不愉快な行動を行ったと言うのが理由であり、風の精霊はその精霊が討伐されそうになっていた翼人を助けたことで存在を知ったのだ

そしてその二つの貴族は、それぞれの地に住まう亜人による報復を受けたという報告があった

だが、けがらわしい亜人とつるむなんてできるか！！

そんな訳で俺達はジョゼフを非難したが、心やさしきシャルル殿下の御言葉で妥協点を探ると言うことに落ち着いた

そこから離れるよう説得を行い、だめならば精霊の元に行くまでの攻撃を行わないと言うものだった

本当に優しい殿下だ、下劣なものたちなどさっさと滅ぼし、そんな奴等につく精霊など退治してしまえばよいのに

更にシャルル殿下は三体のうちの一体、風の精霊をジョゼフに任されたのだ

全くあの無能には一体だって勿体ないのに

まあ、実際ジョゼフはその無能を發揮した

それから二カ月後忌々しい精霊に亜人どもの進まない話し合いが行われる中ジョゼフの方が終わったと聞いて行ってみれば、なんと何処の亜人も追い出さず、しかも討伐せずにそこにとどまることを許してしまったのだ

しかも亜人がその場にとどまるのを許可したのはかなり初めの方であとはその上でどんなふうにもその場所を扱うかという話し合いだったと言う

速攻で亜人を追い出すのを諦めるなんてどんだけ無能なんだあいつは

シャルル殿下はねぎらっていたが、こっちはあきれ返ってしまった

馬鹿だ馬鹿だと思っていたが此処までとは、もうジョゼフはブリミル様にそむいたようなものだぞ

だがしかし、シャルル殿下はその時点で新たに観測された水の精霊までジョゼフに任されてしまった

俺達はシャルル殿下にやめるよう言ったが、押し通されてしまった、国旗はまだ終わっていないのにジョゼフは終わっているからとジョゼフの馬鹿が映ったと俺達は悲しんだよ

だがそれから数カ月後、俺達に素晴らしい情報が舞い込んできた

いつの間にやら、いや実際はかなり前からすでに出来ていたのだが

あのくそ餓鬼が大層な街をつくっていたと言う情報が入って来た

理由は簡単だ、そこに雷の精霊が現れたという報告が入ったからだ

しかもあいつは独断で精霊と交渉してしまったと言うのではないか

召集されたあいつは俺達の前でそれを認めた

引き延ばしにして機嫌を損ねたくないし、だからと言って何処にも行つて欲しくなかったからと

良い宣伝になるからと

取りあえず終わったことは仕方がないと、その精霊との交渉役はあいつになった

なにせ聞いたこともない雷の精霊、誰も扱い方など分からなかったからだ

だが、その後にとんでもない情報が舞い込んできた

巨大な街が出来上がっていたのだ

その情報によると建設中であり、さらに農地なども含まれてはいたが、それを除いてもその規模は一都市に迫ろうかという始末らしい

だがそんな事よりもさらに重要な情報

平民と共にかなりの人数の亜人がいたと言うのだ

更にはその精霊を元に『エスプリード』と言う組織を作り、それはまるで宗教のような様だったらしい

しかも、更にそれを決定づけるように、ジョゼフとの交渉の終わった風と水の精霊がいる領にもそれがあつたようだ
最悪だが、それ以上に素晴らしい情報だった

何せ一番の心配要素だったやつが最悪と言っていい失態を犯したのだ

すぐに、教会の方へ打診が行って、調査が派遣されることになったよ

まあ、結局亜人が危害を加えていなかったからと言うものと、『エスプリード』は決して政治に口出しをしないと確約し更にはその三か所で民衆に受けが良かったと言うのがもつともな理由だった、その主要なものも精霊への感謝と言う今まで存在していたものだったからといった理由で一応認められたそうだが

……………一番の理由は想像以上に規模が大きかったってのだろうな

あそこは不用意な手出しはすでに出来ない状態になっていたのだ
噂が流れて居た時点で調べておくべきだったよ、そうすれば完膚
なきまでに叩きのめせていたのに

しかし、この時点でジョゼフの評価は底辺になっていた

なにせなんだかんだいっても、ブリミル教に睨まれてしまったか
らな

精霊での悶着で此方の評価も少々下がっていたがそんなのはもは
や誤差でしかないぐらいにな！！

そしてあの日、忘れもしないあの日！！

シャルル殿下が暗殺されたのだ！！！！

犯人など決まっている、ジョゼフだ！！

それ以外にだれがいる

理由など明白だ、次の王の地があんなに絶望的な状態だったのだ

しかも暗殺の数日前に二人が王に呼ばれその後、笑っているシャルル殿下と、啞然とした表情のジョゼフが出てくるのを見たやつがいる

王に呼ばれた理由は、次の王はシャルルに決めたと聞くためであり、シャルル殿下の頬笑みは分かりきっていたことだが自分が次の王になれると分かり嬉しさをかみしめたから、そしてジョゼフは馬鹿なことに自分が次の王になれると思っていたのにシャルル殿下が次の王になると聞かされたから何が起こったか理解できていなかったからだ、間違いない

そして、ようやくそれを理解したジョゼフは……シャルル様を暗殺したのだ！！

そして更には殿下の御息女まで！！

もはや奴が命じたのは疑いようがない！！

だが、何故だ、あの無能王は無駄に運が良かったらしい

あの後私達はすぐに行動を起こした、だが悉く我等は撃退されたのだ！！

ある部隊があゝの無能王を討伐すべく兵を進めていたら、そこへジ

ヨゼフの兵が先回りし待ちかまえおり、行動を起こしてくれるのを待っていたとばかりに嬉々として討伐されたらしい

どうやら我々の中に裏切り者がいたらしい、どいつかは分からなかったがあんな奴につくなどんだ大馬鹿野郎だ

だがそれが誰なのかみつからず我々はそれぞれで動くようになってきた

当たり前だ、疑いたくはないがこの中にジョゼフと繋がっている物がいたのは間違いなかったからな

だが、我々の勢力はどんどん減って行つたのだ！！

それぞれで行動するようになり、もはやあり得なくなっていた漏洩も変わりに、行先をあの無能王に読まれるという失態を行つた者

どんな馬鹿をしたのかトロルの群れとたたかうことになり全滅してしまつた者

隊にいた平民によって打ち取られてしまつた者

ふん、どうやら我々の中にもおお馬鹿どもがいたらしい

だが、憎たらしいことに我々も後が無くなつて来たのだ
あんな無能王にこんな失態など何たる屈辱！！

だが、あまりちんたらとしては居られなかった

何せシャルル殿下の暗殺からしばらくすると、我等の景気が悪くなり始めたのだ

我等の農地は不作になり、収入が減ったのでそれを補うべく税を上げたが思ったように集まらなく、平民どもはどんどん逃げて行った
我々の仲間が行っていた商会も、扱っていた商品の値崩れが急に、
一気に起こったらしく大赤字を叩きだしたらしい

更にはこれだ

現在進んでいる場所の周りを見る

辺り一面ひび割れた土、此処は元々大河だったのだ

なのにどんどん水の量は減って行き、遂には枯れてしまったのだ

これは神が怒り狂っているに違いない

この天変地異が何よりの証拠だ

だがこれはチャンスだった

大河のせいで一度に渡ることができなかった軍勢を一度に動かすことができるからだ

これはかなりのアドバンテージだ、なにせ川を船で渡らなければならなかったときは、向こう岸から狙いたい放題だったからな

我々はこのチャンスを生かすべく、再び団結し、シャルロット様の御母上を守りぬける分だけを残し、決戦を行うべく兵を動かしたのだ

皆の士気は高い、遂にあの無能王をたたき起し
偉大なるガリアの光り輝く未来が《ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

何の音だ！？

音のする方を見ると……………私の目に…いまだ遠く、小さくはあったが…濁流が

なん……………だと……………？
うそ……………だろ……………？

馬鹿な馬鹿な馬鹿な！！

なんでこんなことが起こっている！？
なんでこんなタイミングでおこっている！？

いや、混乱している場合ではない！！
急いで岸に……行くか？
戻るか？

つて畜生！？　ちようど此処は中間あたりじゃねえか！！！！

ああ！！
もう何でこんなタイミングでこんなことが起こったんだよ！！

急いで馬を騎士に向けて走らせる

だかなかなか進めやしねえ

くそ、平民ども目、訳目も振らずまれ先に逃げようとしやがって、
てめえらは壁になって俺らが助かる時間を少しでも稼げよ！！

叫ぶが誰一人としてそれをきかない

クソ、後で全員罰してやる

悪態をつきつつ、周りを蹴散らしつつ馬を走らせる

くそ、岸までと遠い、水は……
もうすぐそこじゃねえか!?

岸は……ちくしょう……
オオオオオ！！！！！！

チクシヨオオオオオオオオオオ

飲み込まれる寸前になぜかふと浮かんだのは……

これすら

も全てジョゼフとユアンの思いつきだったという考えだった

は…………馬鹿な…………なにアホなことを考えているんだ俺は

あり得るわけがない

濁った水がスローモーションで迫ってくるのを見ながらそんな事を考えた

欠片 とある貴族Aさんの場合（後書き）

時期的に不謹慎な内容ですが

……… すみません、どう変えればいいか思いつかなかったんです
何かいい案が浮かべばすぐに変えます

5000アルパンってどれぐらい？

約1650平方キロメートル

今一大きさが分からないなー

東京23区、約621平方キロメートル

東京、約2187平方キロメートル

因みに山手線一周平均時間、約一時間

だからどうした？ って言われればそれまでだけど

とにかく一領主が治める街にしては恐ろしい規模なのです

欠片 とある貴族Bさんの場合

執務室で今日中に終わらせなければならぬ雑務を一通り終わらせ、

一息ついたときに思い出すのはあの人達のこと

そのことを思い出すと思わず身震いをしてしまう

自分の身の振りが間違っていなかったことに安堵を抱くと同時に、
彼等が行ったであろうことを考えるとぞつとする

決してガリアを地獄にするような悪い人達でないのは確かだ、
それは今までのことを見ればなんとなく分かる

だが、いったい彼等は何を見ているのか全く分からない……

いや、これだけは分かる

今までの行動！ そして私に任された仕事！！

彼等の目的は間違いなくガリアだけに収まるものではない、
だからと言って他国への侵略でもないだろう

分からない、一体ハルゲニアで何が起ころうとしているのか

欠片 とある貴族Bさんの場合

私の貴族としての身分は伯爵、まあ貴族全体では中ぐらいの地位を親より受け継いでおり、私の領地経営の腕は、まあ可もなく不可もなくと言った所だっただろう

周りに特にこれと言った借金は行っておらず、

そして現在いる領民が逃げたくならないように適度な統治をし、必要なものがあれば予算を組み、そして適度に税を取るといったことをして来ていた

税の幾つかを見直し、要らない物を除ければ、それだけで以外と民はついて来てくれた

此方としても、貴族同士の付き合いは大切だったが、だからと言って派手なことが好きな性分でもなかったので、大して………とまでは言わないが税を減らしても十分に収入が残るぐらいには余っていたのだ

そして私は、まあ所謂ジョゼフ派の貴族だ

殿下に着いた理由におこぼれにありつきたかったという上昇思考が含まれていなかったとは言わない

実際、自分の地位が高くなって困るものでもなかったのだから

だがこれだけは言わせてほしい

私は決して、第一皇子と言った理由でジョゼフ殿下を支持したのではない

それ以上に、私は彼にガリアの未来を見ていたのだ

なにが決定的な理由となったのかと問われても困るのだが、とにかく、私はジョゼフ殿下にならガリアの未来を任せられると思ったのだ、シャルル殿下以上にね

確かに当時のジョゼフ殿下は無能だと言われてはいたが、その噂の大元は殿下は魔法が一切使えないというものから来ていた
他にも政治に参加しないなどといった要因もあったが、それは出来ないのでなく、しようとしなかっただけにしか思えなかった

実際、数年前からジョゼフ殿下は人が変わったように政治に興味を示され、有望な政策を何度も打ち立てられた

あの時私はガリアの未来を確かに見ていたよ、明るい未来をね

そして今の状態を見ると私の目に狂いはなかったのだろう

私の治める街は活気にあふれている

子供たちは駆け回り

旅人達が露店で土産を物色している

ここには今、かつてないほどの活力があった

しかし、此処に至るまでがいくらなんでも異常すぎだった

ことの発端はやはりあの少年…… ユアンの存在だろうか？

彼に初めてまみえた時のことはよく覚えている

あれは、四年ほど前のことだっただろうか？ その時私達はジョゼフ殿下が作った『ガリア王宮技術開発機関』初めての成果発表を観に王宮へ行っていた

そこで待っていたのがあの黒髪の少年、ユアンと彼が持つて来ていた発明品、最新式の馬車だった

ジョゼフに取入ったという人物が平民だとは聞いていたが、それがこんな小さな子供で更に研究成果が馬車と聞いた時は辺りから彼に向って馬鹿にしたり非難する言葉が飛び交った

実際私も何を馬鹿なことをしているのだこの子は、装飾を豪華にしただけで評価されると思うなんてと考えていた

しかしその馬車は従来の物とは一線をかしていた
乗り心地が最高だったのだ

今までの馬車はただでさえ乗り心地が良いとは言えず、乗っているとガタガタゆれ長時間乗り続けるのは苦痛でしかなく、更に進んでいた道が悪路などだったらその乗り心地は最悪の一言だった

その対策として今までも如何にかその衝撃を和らげようと数多くの技術者が苦心してきてはいたが、上等なふかふかなクッションを使用するしかこれといった対策が講じられておらず、しかもその成果はお世辞にもよい物とは言えなかった……確かに無いよりはずっとましではあったが

しかし彼の持つて来た馬車は今までの物をあざ笑うほど快適な乗り心地を醸し出していた

開発したスプリングだとかサスペンションと言った物を使い、その乗り心地はもう従来の物を使用する気にはならないといったほどだった

各貴族は『王宮技術開発機関』の責務の名の元に、その技術開示を求め、そのアイデアをすぐさま各自の馬車に採用し、また我々は今回の成果に合格を与えたのは言うまでもない

だが、一方で私は彼に対し、少しずつだが引っかかりを覚え始めていた

私が最初に彼に抱いたイメージは『評価されなかった研究家』だ
そしてそれは、ジョゼフ殿下が彼に依頼したという荒地をどう
にか有効な場所にしろといった内容から抱いたものだった

私自身そんなとは出来る筈がないし、それに万が一何か手段を思
いついたとしても大々的に行動を開始するまでの準備には相当な時
間を要すると考えていた

何せ相手はあの荒れ果てた荒野だ、しかもそこらの貴族の領地よ
りもずっと広い

更にはその地域はリュティスと他国の首都をつなぐルートとは違
う場所にあり、その上その土地がある街の延長線上にあるのはエル
フが居ると言われる広大な砂漠

とどめにはそちら側にある街へのルートからすら外れた正に何
処にも繋がらないような場所にあるのだ

名目は王領になつてはいるが、だからと言って国はそこを開発す
る気など起きず、またそんな場所を欲しがる貴族もいなかった

あんな場所をもらうくらいならレイモンドの領をもらった方がま
だまだ、あちらの方がまだ有用性がある

あそこはそういった土地だったのだ

最も、そのレイモンド領も隣接するからとか、ついでだからとか、
色々な言い分を付けてその一家ごと借金まで含めてあいつが管理す
ることになっていたが

そう、もはや馬鹿にしているのかといった内容をあの子は受けていたのだ

いくらなんでもこれはないだろとその時点では私ですら、ジョゼフ殿下の正気を疑っていた
辺りの嘲笑う声も少なくなかった

だけど今なら分かる

あの時の殿下は決して正気は失っておらず、
そしてあのなかで一番嘲笑っていたのは………無能を演じていた
ジョゼフ殿下
彼自身だったと

まあとにかく、その後少し落ち着きを取り戻した私が作りあげた彼のイメージ像が先程の『評価されなかった土の研究家』だった

理由としては、殿下が彼を必要とした理由の考察だ

レイモンド家は私と同じジョゼフ派だったが、取りつぶしがほぼ確定していた

しかし、その管理能力は決して悪くなかった

あの土地を存続させられた、それだけで感嘆物だったのだ

恐らく、期間と十分な資金さえあればあの地を立ちなおすことができただろう

しかしそれが無かった

そして今回のこと

殿下は彼に期間といくばくかの資金を与えた

そこで私は、荒野の開拓を任されたことから恐らく彼は土関係の研究者で、今までいた所は特にそこまで農業に困っておらず評価されなかったという、『有能だったが評価されなかった土の研究者』だと結論付けた

何らかの理由で彼を発見した殿下が彼を引き抜いたと言うわけだ

恐らく、彼に用意した職も、彼に命令した内容もレイモンド家を復興させるための隠れ蓑であり

彼はレイモンド領の実りを増やし、そして約束通りその技術を持って荒野に少しずつ農地を増やしていくことで有用な地にするのだらうと考えていた

そして、初めての発表の時、その内容から私が予想していた彼の発表は荒野開発前の実験をレイモンド家で行っており、その経過報告のようなもの、又はその際用いた技術だと思っていた

しかし、彼が用意したのは馬車

初めはただ贅を凝らした装飾を用いただけかと思っていたが、それは今までにない機構を用い、快適さを上げていた

一見地味だが、正直これはかなり有用性・応用性のある発明品だ
彼の有能さを表すには申し分のない出来だっただろう

しかし、私は何故か彼に違和感を覚え始めたのだ

一つ目は、私が初めて抱いたイメージとズレていたこと。
彼が発表したものは、当初考えていた土開発とは関係なさそうなものだったからだ。

まあこれは、結局私が作った彼の像はあまりない情報を元にしたものだったので仕方がないと、彼のイメージを『評価されなかった有能な研究家』に修正した

そして二つ目、表面上はにこやかだったが… 余り彼は喜んでいないようだった。 いや、喜んではいたのだが、それは自分の研究が評価されたとかそういうのとは全く違う喜びのような気がしてならなかったのだ。

そして余りに唐突に浮かんできた考えたが、彼は手加減しているように思えて仕方がなかったのだ

そして初めての発表から帰る時に感じたこの引つ掛かり、それはそれ以降の発表でも感じたことだった…… いや、どんどん大きくなっては行っていた

しかし、結局確信には至らなかった

四度目の発表の後、私はジョゼフ殿下に謁見した。私は彼というものが一行に分からなかったからだ。

いや、『不当に評価されなかった有能な研究家』というイメージのままではあったのだが、しかしそれ以上が全く分からなかった。いや、それ以前にこの『不当に評価されなかった有能な研究家』というイメージからもかけ離れ出していたのだ。

馬車の次に持って来たものは紙の製法、その次は水車・風車の作成・活用の概案そして水道という設備の草案、その次は多数の歯車などを用いた振り子時計と言うもの。確かに土壌開発と関係があるものもあつたがそれはごく一部、いや、それどころか今まで持って来た発明品の分野自体それぞれ違っているようであり、さらに彼は其々の分野において専門家と言っていていいほどのレベルに至っているようだった。

しかも個人的に調べたが、ユアンなどと言う人物と合致する者の話は（同名はいたが）一行に出てこなかったのだ。

そこで私はジョゼフ殿下に聞く事にしたのだ。

今までに見せた彼の有能さを顧みると、名前すら伝わっていないのは、いくらなんでもおかしかった

はつきり言つて、著名な研究家になつていてもおかしくないほどの成果を上げていたからだ。むしろこれで評価しないような者がいるとすればそいつは真正の間抜けだ。

するとジョゼフ殿下は、彼は東方出身の元貴族の研究者なのだといった。

なるほど、東方の知識を持っているのならこのような技術を生み出せるのもうなずける

今まで東方にいたのだから話を聞かなかったのも当たり前だ

その際ジョゼフが嬉しそうに私を見て来たのが気になりはしたが、取りあえず納得した

そう、結局違和感の大半を占めていた一つ目がその説明で納得の方向に行ってしまった、二つ目の違和感だけでは、それが確信に至るまでにはならなかったのだ

まあ、二つ目の違和感は、そうする理由が思い当たらなかったの
で自信が持てなかったという理由もあったのだがな

だが、今なら自身をもって言える。

彼は間違いなく手加減していた！！

彼は、本当の最先端の技術は全て秘匿して、発表した技術は全て
ばれても脅威にならないと判断した物ばかりだったのだ

さて、一方で時期的には二度目の研究成果の発表（確かその時は
紙だったかな？）の辺りだったか、私の耳にあるうわさが届いて来た

それはとある荒野に突然途轍もなく大きな壁が出現したと言うも

のだった

それは荒野の奥の方に位置しているといったこともあり、ただの幻覚だと言ったよくある一種のほら話で片づけられていた

しかし私はなぜかそれが引つ掛かって仕方なかったのだ

一つは、それが誰も行かないような荒野の奥にあるということ。それがほら話と言われた一番の原因であったが、何故そんな場所のそんなうわさが出たのかと言ったことだった

噂とは、現実に関わりなく近い物から荒唐無稽、事実無根の物まである

後者ならいいが、前者ならば……

そして何より気になった原因は

その荒原がユアンに任された場所だったと言ったことだった

しかし、結局私はそれを後者だと結論を出した

なぜなら噂が本当ならそれは最低でも1000、ひよっとすれば2000アルパンを軽く囲んでしまうぐらいの壁だったのだ。

100アルパンもあれば城が立つ

噂と言うものは大抵尾ひれがついているものではあったが、これは誇張にも程がある

しかもたった半年でそんな真似が出来てたまるか

第一そんな事をしてどうする

そう考え、調査は不要だと判断した

……実際、その噂は事実とは食い違っではいた

ただそれは……2000アルパンどころの規模じゃなかったという内容だった

それを私が知ったのはまだまだ先のことだった

……
……
……

その後も、レイモンド家が珍しい作物を生産し始めたり、ユアン

殿が急に貴族も平民も等しく教える学校を作ると言いだすなど気になることはあっても、私はガリアが良い方向へ向かっていると思えていた

しかし、ユアン殿が来てから一年と少しが過ぎたころ、可笑しな事になり始めた

ジョゼフ殿下が、再び政治に参加しないようになって来、しかも月日がたつにつれそれがどんどんひどくなって行ったのだ

訳が分からなかった。ジョゼフ電荷に何が起こったのか理解できなかった

そして、王宮技術開発機関の試験機関が終了し、それを存続させるかどうかの会議で、私はジョゼフ様が何を考えているのか全く分からなくなってしまった

王宮技術開発機関の対抗馬としてシャルル殿下派が作った研究集団、この二つを前者を後者に吸収させる形で統合しようと言う案が出たが、ユアン達はそれを拒否、王宮技術開発機関の名は後者が引き継ぐことになったが、事実上解体してしまったのだ

シャルル派が巨大な研究組織を作った時から私達はジョゼフ殿下には何度も機関の規模を大きくするように申し上げていた。

あちらの組織は何を勘違いしたのか、宝石をふんだんに使いまくった力チャーシュや実用性があるとも思えないマジックアイテムと言った無駄に金をかけた物、はては協会と共同開発した風魔法での

蠟燭の神聖な揺らし方と言ったもはや有用性のかけらも思いつかない自己満足でしかなさそうなものばかりを献上して悦に入っていたのだ

……後者の際のユアン殿の方の成果発表は従来とは異なった材料・製造法で作られた高級蠟燭で高いだけで有用性がほとんどないとかでパッシングを受け、まあ我々の技術の引き立て役になってくれてありがとうと言う雰囲気になったのが印象的だった

私個人としては従来のみつろいで作られた蠟燭よりも確かに高かったが、此方の和蠟燭の方の光が強く長時間もつので有用性は十二分にあるように思えた……少なくとも炎の揺らし方よりは。

まあともかくそんな訳で能力なら負けそうに無かったが、このままでは向こうよりも良い結果を出し続けたとしても、組織の規模の差でなんだかんだ言われ吸収と言う形になるのが目に見えていたのだ

そして実際そうなった

しかし、ユアン殿達は吸収されるどころか、役職自体をやめ、それをジョゼフ殿下は全く止めようとしなかったのだ

私は混乱した、未だレイモンド家が立ち直ったという話は聞かない……いや、二年で立ち直ったらそれはそれで驚愕ではあったのだが

そんな中、王宮技術開発班を抜けると言うことは、これまでの様な融資を受けることはできなくなることを意味する

未だ借金すら返せていないだろうレイモンド家にとってこれは致命的な事柄のはずだった

多大な借金をもつ家に新たに金を貸す家など普通はいない

なので借金はジョゼフ殿下が持っているのだから何とか引き延ばすことは出来ても、新たに金を借りることは不可能に近いはずなのだから。

ジョゼフ殿下はレイモンド家を復興させるために行動していたのではなかったのか？

私は今まで予測していた内容を全否定するような行動をジョゼフ殿下が取ったことで、混乱してしまった

しかもその後、私は想像もしなかった内容を目の当たりにした

殿下はユアン殿を王宮魔導師長に任命すると言いだしたのだ

理由としては至極単純で、有能な魔法使いであるユアン殿に魔法を教えてほしいから。

有能な魔法使いであるユアンに教えてもらえばひょっとしたら魔法が使えるようになるかもしれないからと言ったものだった

だが、無名の魔法使いに教えてもらうのは体裁が悪いので王宮魔導師というものを作り、その長としてユアンを据えたと

それを聞いて私は絶句した

まさか今までのことはこのためにやって来たのかと

ユアンと言う人物の印象を良くするためだけにやって来たのかと
結局魔法しか見ていなかったのかと

対外用の言い訳で作った王宮魔導師の内容の概略

- ・彼の人物は王宮が認めた力をもつ魔法使いである
- ・彼の人物は王宮のために行動を取ること

この一つ目で、自分達を格下だと思われたくないと憤慨した貴族達を黙らすためにユアン殿はその力を見せつけた

確かに信じられないような力をもっていた、恐らく彼と同じようなことができるものはあなかには誰ひとりとしていなかっただろう

その時、辺りの貴族達はジョゼフ殿下は良い拾い物をしたのなんだのと褒めたりしていたが、私は絶望した

真剣に着く人を間違えたのではないかと考えた

私がジョゼフ殿下についたのは政治への手腕にかけたかったからだ
魔法の力なんぞを評価するならシャルル殿下についていた

魔法が使いたただけに今まで行動していて、それを私が良いように解釈していただけなのかと、暗澹たる気持ちになってしまった

シャルル派になろうかと一度真剣に考えたが、しかし結局、私は希望を捨て切れずにジョゼフ殿下につき続けることにした、例えば自分のためであっても、今までに見せてもらっていたその王としての才能は本物だと信じたかったから

・・・そしてそれから数年で ガリアは激変した

はつきり言って、私にも何が起ったのか分かっていない
いや、何が起ったのか…… 結果は分かるのだが、その理由、

辿った軌跡が異様すぎ全く分からないのだ

端的に判明した順を追って言うと、

1・ 風・土・木・水の精霊が次々と発見される、早急の対策が必要だった、対応しきれずにいた。

風・水の精霊をジョゼフ殿下が、残りをシャルル殿下が対応なさることになる。

ジョゼフ殿下はその地に元来より住んでいた亜人達と共存する道を選ぶ

2・ 雷の精霊が現れたことでユアン殿が作っていた街『シャンバラ』が見つかる。

未完成であったが、すでに相当な規模になっていた。

精霊の対応で忙し過ぎたため、そっちの対応は後回しに。 雷の精霊への対応もユアン殿に一任される

3・ 火の精霊が見つかる。ジョゼフ殿下はすでにどちらの対応も終わっていたので其方も行おうかと打診したがシャルル派が拒否。此方はどちらも終わっていないのに火の精霊も受け持つことになる。言い分はジョゼフ殿下だと亜人達に全てを投げ渡しかねないなどと言ったものだったが、実際はこれ以上結果を出されなかったからであらう

4・ シャルル派のスタンスは亜人を追い出し、精霊を自分達で独占しようとするものだったが、当然ながら亜人とは対立・亜人側にいた精霊激怒（土・木）、亜人のいなかった場所でもどうやら交

涉役がかなり尊大な態度で精霊に接したらしく精霊が憤慨（火）、結果、その付近どころかなり離れていた土地までもが軒並み災厄——地震とか・魔物の襲撃とか・噴火とか・地割れとか・飢饉とか・火事とか・亜人の襲撃とか——に脅かされる……被害は少なかったが私の土地も

5・先述の結果、かなりの数の貴族が亡くなったり責務を負ったりしてかなりの家を取りつぶしになる。で結局説得は全部ジョゼフ殿下が行うことになり、なんとかジョゼフ殿下が以前行ったのと同じ条件で納得してもらい（その報告の際、だったら何でそっちの担当の場所はもつといい条件を引き出せなかったのかとヤジが飛んだが、王によって封殺された）、抜けた家とその領地の対応で私の領地が増え、何故か位が上がり『木』の精霊の交渉役になった。ストレスで死にそうになった。

6・精霊や亜人などへの対応の詳しい説明を受けに、ジョゼフ殿下に呼ばれて行ってみたら全部ユアン殿が説明するだけ言われて解散になった。それぞれの精霊に対応することになった私達超混乱。ユアン殿は亜人や精霊達と無用な争ういが起こらないよう実地で一家ずつ教えるからとその場での詳しい説明は無し。それぞれの土地につくまで不用意なことはせず待っていてと言われる。

家に帰り待っていてから数日後、ユアン殿が来た。何となく自分は何番目かと聞いたなら4番目だと。

何でそんな短期間で移動できたのか聞いたら「これが王宮魔導師の実力だ」と言われた。答えになてないと言ったら引力やら自転やら係数やらベクトルやら聞いたことのない言葉や理解不能な式を言われた。訳が分からなかったので途中で中断してもらった。

7 . 数名の我が家の兵と共に木の精霊の元に行くとそこには、
やや開けた場所に巨大な樹木と……何故か木でできた聖壇の様な
ものがその前にあった。

何故だろうかとユアン殿に聞いたら「亜人達が精霊に敬意をもっ
ているからだろ？」と答えられた。なるほど、確かに彼等にとっ
てここは聖地の様なものなのだろうと納得した。

8 . そこに住まう亜人達の代表たちが集まり、私達はユアン殿
から話し合いで決まったと言う内容を説明してもらう。

かなりの部分を亜人達に譲歩したと聞いていたのでどんな内容な
のかと思っていたが、此方にとっても相当都合が良い取り決めに
なっていた。

簡単に言えば亜人……いや、彼等と共にこの場所を汚さないように
守ればいいだけだったのだ。それさえ行っていれば精霊からの加
護を約束してくれる。しかも当初の此方の予定としてあった観光
地化計画も、森の入口から此処までの道を整備することで対応して
くれると言うのではないか。最高の条件だ！！

その後、家に戻った私は改めてユアンに注意を促された。精霊に
は公平に事柄を見てもらうように頼んではいるが、此方　つまり
人間ばかりが事を——例えば理由もなく亜人を罵倒したり森を汚し
たりすること——を行えばすぐに信用をなくし、制裁を行うだろう
ということ、そして亜人側は勿論そのことを分かっているので、
向こうがそのようなことは決してしないだろうと言うことを。

私は、この責務を全力をもって全うすることを誓った。ユアン殿
はそれに頷き飛んで行かれた……

9. 『エスプリード』の一員と言う人物達が我が家に訪れる。ユアン殿とジョゼフ殿下の連名がなされた手紙をもっていた。王家の印が押されていたので本物であろう。内容を見て絶句する、名目的には『相談所』だが、完全にやっていることはブリミル教に喧嘩を売っている内容だった。

色々細かいこと……まあ概略すると大丈夫大丈夫と言った内容が書かれて、しかも命令書まであったので断れなかった。

10. やっぱブリミル教の神官がやってきたが、此方はそれについて対応できない旨とその証拠として手紙と一緒に来た王家からの書類を見せる。神官は此方を攻撃しようとしたが、周りに兵が控えていたので思いとどまり文句を言いながら帰って行った。(重要な役についているからと、私の家の兵は強化するように言われ、しかもその補助金さえ出してもらっていたのだ……今考えると、これの対策じゃあなかったのかと勘繰ってしまう)

11. 遂にブリミル教がブリミルの冒？だとして『エスプリード』とそれの本部があり、更に亜人も住んでいると言う『シャンバラ』とそれを作ったユアンへの制裁を王宮へと要求、そして噂では一方で秘密裏に勝手に直接『シャンバラ』への攻撃を行ったらしい。

だが、ジョゼフはそれを拒否、逆に私の手紙にも書いてあった内容だが

『精霊とのいざこざを起こさないためのクッションだ』

『精霊と共にいたらいけないのならなぜトリスティンの王家を異端審問しない』

『ブリミル教の使途だろうと普通に訪れることができる、追い出す

ことなど決してない、なぜ敵対すると決めつける』

『亜人？ ブリミルの教えに精霊や亜人と敵対しろと書いてはいない』

と言ったり（実際そのようなことは書かれておらず、エルフに関してさえ聖地を奪ったとして敵のように書いてはいるが、悪だと断定するようなことあかれていない）、

更にエルフがいると言う噂があるとジョゼフに詰め寄るとだったら気が済むまで調べると言われ、実際神官はエルフを見つけるところかいた痕跡すら見つけられなかった

12・シャルル殿下暗殺の報が届く

此処までが約二年間でおこった出来事。

そしてこの後……ガリアは激動した、恐ろしいほどの早さで

次々と貴族達の粛正が行われ、様々な事業が展開された

そしてそれに反発した貴族達は………次々といなくなっ
ていった

簡単な話だ、大きな行動を起こす前に次々と検挙されていき、行動を起こした奴等もジョゼフ王の配下達が迅速に対応していき、更に下手なことをした…具体的に言えばジョゼフの傀儡の粛正だとかで霊地の近くで暴れまわっていた奴等はその付近にいた精霊によって粛清されたのだ

又、一方でジョゼフ殿下はゲルマニアとアルビオンとの国交の強化を図ることにも成功したらしい。

ああ、言葉にすれば簡単だ。

ガリアの人生なりあがり物語と言っていいぐらいだろう。

だが、なぜここまで………物語、御伽噺と言っていいほどうまく行ったんだ？

こんなに少ない被害、それこそ殆んどゼロの状態で此処までの状態に持って行ったなんて

陛下は一体、どんな奇術を使っただ？

欠片　ゲルマニア1

ガタンガタン、ガタンガタン

ガリアの首都リュティスへ向かう列車の中、窓の外を流れていく景色を真剣な面持ちで眺める二人がいた

「あと数十分で到着だね」

「そうか……………」

席の片側に座る青年がなにげなく懷中時計を見、呟き、向かい側に座る男性がそれに頷く

「馬を使って三日、使いつぶしたとしても丸一日はかかっていた距離が4時間足らずで横断可能か……………話には聞いていたがこれほどまでとはな。ゲルマニアの今後のためにも出来るだけ強いつながりを作らないとならない。」

次期ゲルマニアを継ぐものとして、気を抜くなよユベイル」

「分かっているよ、父上。　なんとしても成功させないとね。」

ゲルマニアの皇帝アルブレヒト三世とその長男ユベイル、これが二人の名前だった

彼らがリュティスに向かっている理由はジョゼフと会い、ガリアとの協定を結び、『シャンバラ』の技術を自分の国にも分け与えてもらうことだった

『シャンバラ』、そこは現在知る人ぞ知る世界最高の技術力をほこる………と言われている街である

「と言われている」と言ったのには理由がある。
その街の情報はとても少なく、又そこについては数多くのうわさがあるため実際どんな所か………それ以前に本当に街と言えるものがあるのかすらはつきりしていないのだ。

噂の中には共通して亜人が住まう・巨大な壁に囲まれていると言うものがあるが、それ以外がてんでばらばらであり、

その内容は先ほど言った抜きんでた技術力をほこっている街があると言うものもあれば、ジョゼフ殿下が戯れで作った箱庭だ、あれは亜人を閉じ込めておく監獄だ、いやそもそもあの中には何も無いなどと言った話すらあり、しかもどれも信憑性のかけた噂としてのレベルばかりだった

そんな状態になっている理由はいくつかある

一つ目はその街と言うものが巨大な壁と堀に囲まれており侵入することが不可能と言ってよく、しかも正式に入ろうにも色々めんどくさい手続きを踏まなければ入ることは出来なくなっており………まあブツチャケ、基本的この街に入るのはジョゼフが発行した許可証と手形が必須でそんな事が出来るのは限られた人物達だけであり、必然的にかなりの情報流出を抑えることになっていること

二つ目に、上記した噂の大半はユアンとジョゼフの工作員たちが情報攪乱のため流しまくった物であったと言うこと

三つ目に、そもそも他国の貴族達にある程度の認知をもたらすことになったブリミル教のガサ入れがあった時点では未だ大半の施設は完成しきっておらずともに稼働しているのは「学院」^{アカデミー}のみ、結果としてブリミル教と達が関心を示すようなレベルの技術はまだ出ていなかったこと

そして四つ目に、現在ガリアではジョゼフ派とシャルル派で争うと言う構図が起こっており、みな関心は此方に集中して『シャンバラ』からはそれってしまった

その結果としてガリアはともかくとして他国貴族達の『シャンバラ』への正確と言って良い最新の情報は対立争いが始まるしばらく前にブリミル教と何かいざこざを起こした『場所』があると言うものぐらいであり、後は先ほど言った大量の噂話が飛び交っている状

態だったのだ

さて、そんな中なぜゲルマニア王家が『シャンバラ』に強い関心を示すことになったのかと言うと、それはこの国の特色が関係している

この国は元々都市国家だったが、周辺地域を併吞して版図を広げ、現在はガリアに並ぶ広大な領土をもつに至ったという歴史を持つのだが、

この貴族が利害関係の上で寄り集まって国ができたという経緯上、皇帝に対する忠誠心はあまり高くない

しかも皇家が始祖ブリミルの血を引いていないため、この国の王はハルケギニアの他国の王よりも格下に見られており、忠誠心の低さに拍車をかけていると言った状態なのだ

またその一方で、こういった成り立ちからなのかゲルマニアの社会風習や政治制度も他国とは一線を画している

『実力』………と言うか『金』の持つ力が他の国より顕著なのだ

その証拠として、この国では金さえあれば他の国では貴族の必須条件であるメイジであろうとなかろうと関係なく平民でも領地を買

い取って貴族になることができる

結果としてこの国では競争意識を持っている人物の数が他の国よりはるかに多く、自然と『金』を生み出す手段の一つとして『技術』も他の国に比べてはるかに高く重要視されるようになっていく

さて、ここでジョゼフと言う存在についてなのだが、
ゲルマニア王家は彼に深い関心を持っていた

なにせジョゼフと言う存在は『無能』として軽傷されていた存在
もしそんな人物がガリアの民達が目置く存在になったとしたら
もしくはガリア全体に『唯の王』以上の影響力をもつようになっ
たら

それはジョゼフはゲルマニア王家にとって自分の影響力を強化する
最高の手本となりえることを意味し
つまりゲルマニアにとってジョゼフと言う人物は是非とも親密な
関係をもっておきたい人物となるのだ

そしてそんな彼等にとどめを刺したのは舞い込んで来た『シャン
バラ』の情報

ガリアからごく少数輸入された高度な技術力によって作られた品

物——先程ユイベルが見た懷中時計など——や、ガリアに向かわせた諜報員達から上がってきた報告から異様な速度で地を這う乗り物——現在彼らが乗っている汽車のこと——などが開発されたことは分かつていたのだが、それらは数年前に設立されたと言う『ガリア王宮技術開発機関』によつて開発・生産している物だと考えられてきた

だが、実はそれとは関係のない一貴族の領地、『シャンバラ』で開発・生産・販売されていると言う情報を手に入れ、彼等は急いでガリアに赴く事を決意したのだ

今までゲルマニア王家が二の足を踏んでいたのはそれらは『ガリア王宮技術開発機関』という、『国によつて作られた国が管理する地』で開発・生産されていたと考えていたからだ。

なぜなら、『ガリア王宮技術開発機関』に技術提供を申請すると言うことは、それは即ち『ガリア王家』に頭を下げたと言うこと、つまりガリアにゲルマニアを売ったと言う内容になりかねなかったからだ

では『シャンバラ』でも一緒ではないかと思うかもしれないが、これは全く違う

貴族が他国の王と会談を行つたり、その王と個人的な取引をすることは珍しくはあるのだが、だからと言ってない訳ではなかった

なぜなら国境を跨いだ商業を行う貴族達は、商品を取り引きする

貴族の他にその国の王家に国境の通行税などを納めなければならず、その際貢物をしたりするのは珍しくない

しかも取引する商品が王家の管轄している物の場合やそもそも取引相手が『国営』のものならそもそも取引相手は国、王家と言うことになるのである

………まあつまりどう言うことなのかと言うと、この場合の彼等の関係は『貴族と他国の王』ではなく『一商人と取引相手』として扱われるのだ

つまり、ガリアのたとえば、国営でもない一貴族の治める場所である『シャンバラ』となら彼等は取引が出来る

堂々と………とまでは言えないが、商品を斡旋してもらったり、技術を買ってもらったりするのを比較的に気楽に頼むことができるのだ

とどめには現在のガリアで起こっている争い
うまく利用すれば、自分達の行動のカモフラージュになる

これらの要素の前に彼等がガリアに向かわない道理など存在しなかった

S
i
d
e

ユ
イ
ベ
ル

欠片
ゲルマニア
1

数名の護衛と共に駅に降りた僕達を迎えたのは巨大な街
此処にきたのは数年ぶりだったが、報告にあった通り大分様変わ
りしていた

「リュティスも随分と大きな街になったね」

「ああ、うちも此処のようになりたいものだな」

出口に向かって歩きつつ父上と話す

この町のかつての名はエルム、だが現在は範囲を広げたリュティ
ス城下町に取り込まれる形になり、『リュティス北区』と名を変え
ていた

元々リュティスからあまり離れていない場所にあった町とは言え、
此処まで規模を広げることになった現在のガリアの経済力
そしてそれを実行したジョゼフ王の実力には正直驚きだ

なにせ町を広げるといふのは簡単にできることではないのだ、

広げた分の実入りが見込めなければそもそもすることはないし、
例えそれを実行に移そうにも、その土地が貴族の領地とかぶってい
た場合色々ともめ事が起こってしまう

今回ジョゼフ王は、この土地をもっていた貴族から買い取り更に
別の土地を与えることで解決したようだが、これだってそう簡単に

できることではない

強権を使ったり、移動先の土地が現在いる土地よりもはるかに魅力的なのならば話は別だが、基本的に貴族は自分の土地全てを手放すようなことはしない

なにせ領地を変えらうと言うことは、せつかく作りあげた領地の管理体制を又一から作り直さなければならぬことを意味するからだ

貴族を言いくるめ、リュティスを此処まで発展させたジョゼフ王の実力の高さがうかがえると云っていい

だからこそ父上と、将来その王の座を譲り受けるだろう僕はなんとしてもジョゼフ王と個人的な友好な関係を作っておきたい

なにせ僕達はこの先間違ひなくガリアはハルゲニアの流れの中心に位置すると踏んでいる

ともなれば、その国と、何よりその流れを作りだしたであろう人物と出来るだけ関係を作っておかないと

それに諜報員からの報告によると『シャンバラ』を管理している人物はジョゼフ殿下とかなり親しい関係にあると報告にあつた、うまく行けばそつちとの関係の橋渡ししになってくれるかもしれないしね

ポケットの中の懐中時計をさわりつつそんな事を考えながら

歩いていると駅の出口が見えて来た

.....
.....
.....

駅から出た僕達を迎えたのは道を行きかう数多の人物達

その勢いに思わず吞まれそうになった

「さてと、此処からだともまだ歩いてても時間がかかるし、馬車でも手配しないとね」

さつきも言ったが、此処はかつて『リュティス』だった所からしばし離れた町だった場所、此処からかつての城下町であった現在の『リュティス中央区』に行こうとするとまだかなり時間がかかる

だが幸いなことに近くには彼等を運ぶためなのだろう、数多の馬車が列を作っている

どうやら此処では、馬をもつ農民が農閑期の稼ぎとして行っていた副業の一つだった平民の運び屋が一つの職業として成り立っているようだ

これほど大きな町なのだから仕方が無いとは言え、こうやって新たな職を見出す者が出てくることは素直に喜べることだと思う、それだけ多く金が回るようになると言つことなのだから

活気がある場所は総じて金回りのいい場所だと自分は思っている

「ああ……しかし、せっかく来たのだからじっくりと回ってみたいものだな」
「そうだね」

此処では他に僕達の国にはないどんな産業が確立されているのか、僕も街を見て回って調べたいものだ
そんな事を考えながら父上の言葉に相槌を打った

「んじゃあ、俺が観光案内をしてやるよ」

『！？』

そこに突然挟まれる男性の声がかかって来、思わずビクツとなる
そして僕と父上が護衛と共に急いでそちらを振り向くとそこには
紅色の髪青年がいた

護衛が僕達を守るようにずっと移動するのを確認しながら、懐にしまった杖に手を伸ばそうとする

「ゲルマニアからようこそガリアへ、俺の名前はアルバート＝アラス。」

ジョゼフ陛下が皆様をお待ちになっていますよ」

それを気にも留めず優雅にお辞儀をしながらそんな事を言ってきた青年の言葉に思わず頭を抱えなくなった

「戻ったら洗い出しをしなくてはな」

顔を引きつらせた僕の隣で、父上がそんな事を呟いていた
どうやら父上も気がついてたらしい……………僕が気付いたんだから当たり前前か

「そうか、では案内を頼むとしよう」

父上がばれているからには、威厳をもって接しなければと言葉を
発す

……………ん、どうしたんだい？

ああ、何で父上が身分を隠すのをやめたのだった？

彼、僕達がゲルマニアの王と皇太子だって分かっていたからだよ
他国の平民達が僕達の顔なんか知らない筈だから、自然と彼は僕達の顔を知っているぐらいの高位の身分、又はその人物に仕える人

物になる

で、そんな人物が此処で僕たちを待っていた、ジョゼフ王に頼まれて

つまり、ジョゼフ王は僕達が此処に来るのも、それどころか此処に来た目的も知っていたってことさ

欠片 ゲルマニア2

「ようこそガリアへ、待ちわびたぞ」

王城へ着いた私達は王城のとある一室に案内され、そこにはジョゼフと四人の人物がいた

全員かなり上等な服を着ているし、何より此処にいる時点で只者ではないのだろうけど、誰なのだろうか

「車の乗り心地はどうでしたか？」

話して来たのは水色の髪をした女性

「ああ、とてもよかったよ」

「うむ、是非ともあれの作り方を教えてほしいものだな」

父上もそれに同意する

あれは本当にすごかった、アルバートによると魔法を一切使っていないらしいが、もしそうなら父上の言う通り是が非でもほしい技術だ

「よかった、兄さんが暴走したらどうしようかと怖々してたんです」

え？ そっち？

「酷えな。俺だつて分別はしっかりわきまえているんだけど？」

第一、王族相手にそんなことしたら国際問題になりかねないだろうが。」

「あら、勿論冗談ですよ？ 兄さん」

「け。第一それなら俺よりの車の心配をしたらどうだったんだ？ あれ、たしか試作品だろ？」

「それこそまさかだ。 うち信用も売りの一つにしているんだからね。」

試作品とは言え、慎重な試験の上で大丈夫だと判断して出したよ。

」

クリーム色の髪 of 男性も加わつて問答を始めたが、聞き過ぎすことのできない情報がそこにはあつた

ひょっとして……

「ジョゼフ陛下…………… 彼等は？」

父上もきになったようで、それを知っているであろう、ジョゼフ陛下に質問する

「うむ、彼等はシャンバラの代表たちだ。」

シャンバラの関係者と予想はしていたとはいえ、改めて聞くと驚くしかも、恐らくあのクリーム色の髪 of 青年だろうが、シャンバラの代表だったとは

「こほん、ではこちらからも一応自己紹介を。」

クリーム色の髪の青年が咳ばらいをし、自己紹介をしてくれる

「僕は『ヘクター』ジャック・レイモンド』、
『シャンバラ』統括理事会と『ヘリユック商会』の代表を務めさせてもらっています。」

やはり彼が『シャンバラ』の代表だったのだろう、『ヘリユック商会』と言うものも聞いたことがある。

ガリアで最も幅を利かせていて、最近ゲルマニアにも進出して来ている商会だ。

なるほど、『シャンバラ』が本拠地だったと言っわけか……
しかし『統括理事会』とは何なのだろうか？

「一度言ったが、俺の名前は『アルバート』アラナス。」

僕達を此処に連れて来たやや野性味のある、赤髪の青年が言う

「一応ガリア宮廷魔導師の一人だ。『獄炎』の隊長もしている。
因みに得意な属性は『火』だ」

宮廷魔導師……数年前からジョゼフ陛下が施設したガリアが誇る有能な魔法使い集団だ。

近衛騎士団とは違った、魔法の、魔法による、魔法のための組織。

様々な逸話は存在するが、メンバーは誰一人として判明していない……………彼がその一人だったのか

『獄炎』とは何かと思っただが、シャンバラの戦闘部隊の一つだと黒髪の少年が付け加えた

かれもやはり関係者なのだろうか

「私は『エミリー』アラナス」

水色の女性がほほ笑んで来た、

「家名で分かるところけど、彼の妹よ。

水メイジで『アイスクラピウス』所属。よろしくね」

『アイスクラピウス』？

「『アイスクラピウス』ってのは『シャンバラ』の誇る最高位の医療集団さ。」

考えていたら黒髪の少年が又教えてくれた

つまり彼女もかなりの人物と言っただけ……………いや、此処にいる時点で当たり前のことなんだろうけど

「さて、俺の名前は『ユアン』ノッド『セレス』アル『リッター』」

そして自己紹介を始めたのは先程から紹介の補助をしていた漆黒

の髪と目の少年

「『シャンバラ統括理事長』兼『ガリア宮廷魔導師長』兼『情報局長官』、まあ他にも『^{フラスコ}最高学術機関の理事長』とか色々あるけど主なのは大体この三つかな？」

「……………はい？」

え？……………ちよつと……………」

訳が分からない役職があったが、それ以前に『シャンバラ統括理事長』と『ガリア宮廷魔導師長』、『長』と言うことはつまりトップ、又はそれに限りなく近いと言うことだよな？

え？ つまり？

この少年がトップ？

「ちなみに全部本当のことだぞ？
因みにユアンは俺の魔法の師でもある」

どうやら耳が悪くなった訳じゃあないようだ
それにジョゼフ陛下の魔法の師……………」

「……………若いですね。」

「ごつちやになった頭の中で浮かんできた言葉の一つがなんとなく出てしまった」

まあ、実際かなり若い。

見た所12・3歳と言ったところか？

「一応、これでも17歳なんだけどね……………」

「ユアンは僕達の中で一番年上なんです、僕達と比べて若く見えますからね。」

かなり小柄ですし……………」

いや、それでもかなり若い
俺とほとんど同年代じゃないか

確かにその年なら領地経営を始めたりする者もいるが、それは殆んど《物の試し》レベルだぞ

それに話が本当ならば彼はあの『ガリア宮廷魔導師長』、つまり最高位の魔法使いと言っていい存在のはずだ

それを考えるといくらなんでも若すぎる

こっちの予想だと軽く40は超えていると考えてたんだぞ!?

「人を見た目だけで判断したらいけないって言ういい例ですよ」

ああ、全くその通りだ……………ん?

「俺、声出してた?」

父上の方を向くと、首を横に振った

ユアン君の方に向き直ると、彼は微笑んでいた

「みんなおんなじ反応をするんだ。」

それでも俺はエルフの集落で魔法をならっていたんだけど?」

「な!？」

「エルフだと!？」

父上と共に驚きの声を上げる

確かにエルフの下で習ったなら納得だ、だがそれは

「言つとくけど、俺が使うのは精霊魔法……こつちでは先住魔法だっけか、それとは違うぜ?」

違うのか、それなら……いや、だが彼は『系統魔法』だと入っていないぞ?

どう言つことだ?

『それはもちろん、系統魔法とも違うからです』

!!??

突然頭に声が響いた

ふと周りを見ると、いつの間にか壁際に色褪せた黄緑色のマントを羽織り、フードを目深にかぶった子供がいた

まさか!?

『そう、これは私の魔法、『風』の魔法によるものです
まあ、『雷』も使っていますかね。』

こんな効果の風の魔法?

『雷』？

聞いたことが無いぞ

いや、それよりさっきからこの子供は俺の思考を呼んでいないか！？

しかもかなり正確に！？

『その説明は後で、まずは全員の自己紹介を終わらせましょう。』
『ディオ』エチユス』ノア』と言います、以後お見知りおきを。
ですが、これ以上はまだ知られたくありませんので省略させて下さい』

そう言って彼は席に座った

どうやらこれで本当に終わりだったらしく、ジョゼフの隣にいたもう一人の黒髪の女性が声をあげた

「では最後に、私の名前は『シェフィールド』家名はありません。ジョゼフ陛下の秘書をやらせてもらっています。」

「秘書？」

「直属の部下の様なものだ」

「なるほど……………」

つまり右腕と言うものか……………

ジョゼフの返答を聞き父上と共に納得する

しかし家名無し、つまり彼女は平民なのか？

『その通りです、ユイベル殿下。』
ですが、言っておきますが彼女はかなり有能ですよ？

事実、東方ではそれなりに名の通ったやり手でしたから』

東方の人物、あそこはかなり発達した文明を持つと聞いている。

いや、それよりやっぱりこの子どもは俺の考えを読んでいるだろ！
表情を読むにも限度があるぞ！？

『まあ、その話はまた後で』

だが、こいつはそう言うだけだった
それにしても本当に気味が悪い、この頭に響く声だって無機質で
あいつが男なのか女なのかすら分からねえ
ディオって言う名前からして男なんだろうが

「ワリイな、こいつはまだあなた達を信用していないんだ」

「私達が何か彼を不快な目にあわせてしまったのかね？」

ユアンがそう言って謝るが、こっちとしてはただ事ではない
此処にいる時点で彼はこれからの私達の運命を左右する可能性がある
ある人物である可能性が高い
もし不快な目にあわせていたら、話し合いを始める前に結果が出てしまっているかもしれない

『ないよ』

「まあ、色々あって極度の人間不信に陥ってこんな性格なんだ。
但至少なからず今こいつはお前らにいい意味で興味を持っている
から安心してくれ」

そうか……………よかった

「さて、時間ももったいないし、そろそろ始めようか？」

そして、私達の話し合いは始まった

欠片 ゲルマニア 2

「……………以上が此方の希望です」

父上が結びたかった契約を説明し終わり、ジョゼフ陛下達はそれぞれしばし思考する

「ふむ……………俺の方は良いが、そちらはどうだ？」

「問題ありません。」

だが、すぐにジョゼフ陛下とヘクター殿はそう答えた

「では、「まあ、でも俺の用件も飲んでもらわないとね」」

しかし、父上の言葉にユアンが言葉をかぶせた
まあ、当たり前のことだろう、見返りを要求しないわけがない

「俺からの要求はただ一つ、『仲間^{チーム}』に入ってもらいたい」
「『仲間^{チーム}』?」

「そう、もし入ってくれたら優遇するよ?」
「それは魅力的だな。だが、得体のしれない物に入る訳にはいかない」

「ま、そりゃそうだよな。仲間^{チーム}つてのは、ある目的をスムーズに実行するために俺が作った反ブリミルの組織だ」

「な!?!」

「因みに構成員にはエルフもいる、今説明できるのは此処までだ」

「ちょ、ちよつと待ってくれ、それがどう言う意味を持っているのか分かっていいのか!?!」
「当たり前だ」

父上が声を上げるが、ジョゼフ陛下は頷いただけだった

「つまり、此処の皆さんは、全員その『仲間^{チーム}』のメンバーなのです
か?」

「そうです。最も、私は傍観組ですが」

「傍観組?」

「補助ぐらいならしますが、それ以上の手伝いはしないと言っています」

此方としては、彼等と親密な関係を作ることではデメリットよりも大きなメリットを持ちましたが、手伝いをする事では此方はメリットよりデメリットが大きいので」

「さて、貴方ゲルマニア王家はどうしますか？

勿論、発生するメリットとデメリットは彼とは違います。

それをさばき切れるかも問題ですし。」

「だけど残念ながら時間は与えられない。此処で決めてもらう。

俺達の共犯者になるかどうかをな。」

父上と顔を見合わせる、どうやら答えは一緒のようだ

「「参加しよう、詳しく教えてくれ」」

そして俺達は戻れぬ一線を越えた

この先にあるのが自分達の反映だと信じて

欠片 ゲルマニア2（後書き）

あと四・五部分かな？

一つ二つ増えるかもしれないけど

今回で主要オリキャラは全員登場しました。

黄緑フードの子供『ディオ』についてはね、一応まだ秘密。
第三篇であっさりばらす気がしないでもないけど

past 2

20**年、日本、×県○市

其処のとある道を歩くとある男女がいた

「・・・・・・・・・・でさあ・・・・・・・・・・」

「あははは、それって・・・・・・・・・・」

彼と彼女の名は『二洞護』と『木下結衣』

二人は幼馴染同士であり、そして数ヶ月前から付き合い始めていた

それはこの二人を見て来た人々にとっては、当たり前のことであつた。

いや、むしろ、今さらかといったレベルだった

二人は昔から相思相愛だったのだから

『二洞護』

考古学者の両親の元に次男として生まれた彼の周りには考古学のような分野の本があふれており、それが彼の絵本となっていた。

そんな彼が考古学の分野に深い興味を抱いて行ったのは、ある意味当然の結果だったと言えるだろう

（最も同じ環境で育ったはずのその兄は、いつしか家を頻繁に留守

にしていた両親への反抗心からとにかく考古学とは離れた様々な研究分野、特に最先端に行く技術に興味を示し、それが彼の性にはまったのかその世界にどっぷりハマって行っていたのだが

そんな二人とよく遊んでいたのが近所で同じく忙しい両親を持つ木下結衣

彼等はよく三人で遊び、良くお互いの家に泊まり合ったりしていたようだ

徹が自分の世界にのめり込むようになると、二人は協力してそんな兄を見守ると言ったポジションを取るようになり、

それもあってか二人はお互いのことをよく知る一心同体のような存在になっていった

彼女の存在が彼にとってかけがえのない存在に変わるのはそう遠くない未来であった

最も、それを意識し始めたのはもっと後ではあったのだが

そして『木下結衣』、

そんな彼女もまた、いつごろからなのか、そしてきっかけがなんだったのかは分からないが彼女は護にひかれ始め
中高時代にそれは恋心に変わった

そして彼女は一途な少女であった

彼女は護に付いて行くために、理系から文系に替わったのだ。
彼女が進んだのは法学部、しかもその理由が「護君の秘書になって

手助けをしたい」であり、しかも試験に通ってしまったのだからだからもうあきれるしかない

そして数ヶ月前

まあ、周囲の後押しとか雰囲気とかなんてことはない出来事とか、まあ細々した出来事がきっかけでついに護は結衣に告白し、めでたく付き合うことになったのだ

二人の両親も、そして護の兄もそれに反対などしなかった
むしろそれを聞いた彼等にしたら、『え？ 今さらその話？』といった感想だった

彼等は幸せだった
充実していた
幸福感に満たされていた

だがある日、そんな彼等の時間は終わりを告げた

それはとある日、

何時もと何も変わらないような日常的な日

何時も道理のような特に変わった所はなかった時間

何時も道理の風景の中を二人が歩いていると

「！？」

「え！？」

突然彼等は真つ白な光に包まれ

「やった、成功だ！！」

「此処は？」

結衣？」

二洞護は異世界に召喚された

元の世界ではこの日の夕方、とあるニュースが流れた

『二洞徹の他殺』そして『二洞護と木下結衣の行方不明』

研究室で殺されていた二洞徹

そして同じ日に行方不明となった弟の二洞護と、その彼女木下結衣

二つの事件は同一犯の仕業ではないか、いや組織だったものだった
のではないか

様々な憶測が流れたが、遂にそれは解明できず、
行方不明になった二人は二度と戻って来なかった

そして

「此处は
護……くん………?」
?

それに巻き込まれた

彼女もまた

異世界に召喚された一人の男性、

そしてそれに巻き込まれ、異世界に迷い込んでしまった一人の女性

二人はついに元の世界に戻ることも、再会することも出来なかった

いや、厳密に言えば結衣は護の手掛かりを、彼の軌跡が綴られた物
を見つけることは出来た

だがそれは……………

そして遠い未来、この二人の結末を一人の十歳にも満たない少年が

見つけることになる

二人の伝記を、

無念と、そして願いと共に

p a s t 2 (後書き)

p a s t もこれで終わり
後はカトレア（又は公爵）と*****とジョゼフと『隠された欠片
の破片』
増えるかもしれないけど

欠片 アルピオン

元サウスゴータ伯爵領、此処に整備された道を歩く一人の女性がいた

「おや先生、毎日語足労です」

「アラナス先生、娘の病気が治りました。」

「あ、先生！ おはようございます！！」

彼女とすれ違った人達が口々に彼女に話しかける

彼女の名前はエミリー＝アラナス。

彼女は同僚達数名と共に此処の診療所に派遣された

そんな彼女は日々の日課で、とある施設に毎朝訪れている

コオオオオオオオオオオオオ

数多の風車が立ち並ぶ地の中央にある、巨大な風魔石が鎮座し風やプロペラの音が響き渡る施設

名前はそのまま『風の神殿』

一年と少し前にアルビオン… いや、ウェールズ個人と結んだ関係、その証として作られた施設の一つだ

アルビオンのほとんどの住人は未だ知らないが、此処は発電所と言っている場所である

この施設の中央にある祭壇上に鎮座する巨大な風魔石と装置の様なもの

ハルゲニア地方やロバールカイエ以外の国ではかなり広まっているようである、あの少年が開発したと言う『導力』なるものでこの施設内は恒常的に風が流れていた

そしていつしかこの地を気に入り住み着きこれを寢床にする風の精霊、

彼女がただでさえ風が複雑に舞うように作られた神殿内にさらに恒常的な風を起こし、その風を神殿の彼方此方にある風車が受けることで永久的に発電される

発電された電気は地下に張られた電線を通って、ユアンがもたらしたもう一つの施設へ送られている

最も、先ほど言ったように此処の住人達はまだ『電気』も『導力』も知らないし、それを使つた製品などもたらされていない

そんな彼等にとって此処は風の精霊が住まう神殿でしかないのだが

まあとにかく、此処の祭壇に訪れ、その後近くの『エスプリード』の教会（彼女達はもう潔くそう呼んでいる。最も、それは彼女達勘ではあってそれ以外は施設と言っているが）にいる神父（前述と同じで対外的には施設長）と会ったのが彼女の日課であった

.....

神殿や教会で会った同僚たちと共に彼女達は仕事場に向かう

目的地に近付いた彼女達のめに群衆が見えてくる。
今日も診察を待つ人々で入り口に列が出来ていた

一年ほど前、アルビオンに作られた『プレア診療所&スプリア治癒院』、

此処が契約によってもたらされたもう一つの施設……の劣化版であり、そして彼女が同僚達と共に働く戦場である

欠片
アルビオン

数ヶ月前、シャンバラ

side ウェールズ

まづったかな……

「貴様等、一体何をしているのか分かっているのか！」
「もちろん、不穏分子達の制圧だ」

シャンバラに行く格好の理由が出来、急いで支度をして船で此処まで来、港に船を下したのまでは良かったのだけれど
いざそこから街中に入るためには、規則として始めて来た者たちは厳しい身分のチェックと登録が行われなければならないらしく、

それに護衛達が不平を言った

まあ、僕も彼等と同じ気持ちだった。

指紋やらなんやら、どう言った意味があるのかは分からなかったけれど、良い気分ではない。

でもまあ、これは仕方ないかとみな我慢できた。

だけど、街中は独自の法を引いていて入場するのはそれに全面的に同意したとみなされると言う説明、しかもその法はこの町中では犯罪を犯せば平等に罰せられると言うことを説明された時、彼等は切れた

いや、この説明の時はべつになにも言わなかった。

そんな法はアルビオンにもあったのだから

だけど、その後に係員が言った説明

『例えばとある子供があなたにぶつかりました。

もしそれによってあなたがけがをしたり、服が汚れてしまったならその相手は治療費を出すなり洗濯の代金を出す義務があります
ですが

もしあなたがその相手が平民だからと言って、それ以上の体罰をおこなおうなら、此方は容赦なくあなた方を捕まえます。

た添えそれが、皇子であろうと』

それでうちの護衛達が切れた

『ふざけるな！』

『いいえ、ふざけていません此処では平民でも貴族でも、例え王だろつが亜人だろつが神官だろつがみな平等に扱われます！！』

あ、敬意とかは別ですけどね。』

『そんなのが通用すると思っているのか!!』

『通用します』

『此方の方がどなたか分かっているのか!!』

『アルビオンの皇太子、ウエールズ殿下ですかね。』

ですが、それが？

言っておきますが、ジョゼフ陛下もこれは認めており、彼自身き

ちんとこの法を守っていますよ?』

『それはそちらの都合だろう!!』

『守れないのなら入ることはできません。』

どうかお引き取り下さい』

ヒートアップした僕達の護衛が杖を抜き、呪文を唱える前に相手
がそれを奪い取り、制圧した

僕かい？

今、鉄の筒のついた物を向けられているよ

あれで護衛の数名が撃たれたから銃ってやつなのかな？

僕が知っているのよりもはるかに小さいし、それに火縄が無いけ
どね

いや、ひょっとしたらあれが最新のモデルなのかな？

まあ、とにかくこれじゃあ抵抗する前に撃たれちゃうから身動き
が取れないんだ

護衛達の暴走を止めようとしてたし、相手を攻撃しようとはしな
かったから無力化で済んだだけましかな？

とはいっても、護衛達の暴走で十二分に立場が悪くなっちゃった
んだけれどね

で、

「すまないね、彼らが迷惑をかけてしまった。」

なんとかヘリユク商会の社長との面会のこかを取りつけることができ、とある一室に通された

もちろん初めにしなくてはなあなのは彼への謝罪だ

「別に良いですよ、最近は何も見なくなりましたが少し前までは良くあることだったので」

ちなみに、結局護衛達は物分かりがよかった数名を除いて隔離されてしまった

僕の方からも嚴重に言い聞かせておいたからもう騒ぎは起こさないとは思っただけど

「災難だったな。」

だが、もし此処と付き合っていくのなら早い所あんな行動を起こす奴が出ないようにしないといけない。

最も、お前の答えは決まっているだろうけど」

研修としてこの町にしばらくの間厄介になっていると言うゲルマニアの皇太子

「まあ、そうなんだよね……」

此処に来るまでの道のりだけでも驚きの連続だった。

うちの首都にある大通りよりもずっと大きな道があり、しかも綺麗に舗装されている。

そんな大きな道いっぱいに人々が歩きまわっている

しかもその人たちが来ている服は貴族が来ている物ぐらいしたてがいい！！

ふと上を見たら沢山の人を乗せた箱が、長い一本の石をつかんで走っていた

道の両側にはたくさんの店が、人でにぎわっていた

日用雑貨品の店だけでは無い。頻繁に買う必要のないものを売っている店までもだ！！

此処まで案内して来てくれた案内人の説明にも驚愕した。

やや向こう側に見える数階建ての建物。 しかも一回分の広さだけでも信じられない大きさ。

王室が丸々入りそうなほど広い、それが複数階ある

それ全てが『店』なのだそうだ。

一体どういう考えに行きついたらあんなものを作るようになるんだ？

だがその答えは今まではあり得なかった簡単なものだった。

貴族はそうでもなかったが、平民達にとって買い物とは必要に応じてする事でありわざわざ買う物がないのにお金を使う必要もない。貴族の何割がこれを知っていたかは知らないが、これが今までの常識。

だが此処の人々にとって買い物とは『遊び』であり『楽しみ』であり『贅沢』なのだ

『贅沢』を知る余裕を持つものがこんなにもたくさんいることももちろん驚きなのだが、

とにかくそんな彼らを引きとめ続けられる場所、『此処に行けば大抵のものは何でもそろふ』・『一日居ても飽きない』と言うのはかなりのアドバンテージを持つのだとか。

…………… ちなみに此処まで説明できたのは、あの建物は此処に観光に来た観光客に必ずと言っていいほど案内する場所なので文句を教わっていたからなのだろうか。

まあ、とにかくこの街はそれほど裕福だと言つことなのだ。
気になることも出来たが……………

「これをみせつけられて取引を結ばないのはよっぽど自身のあるやつか、ただのバカだよ」

僕達三人は協議を行い、平等な形での貿易条約やお互いの貿易量を増やす事を決め、それぞれに書類にサインをした。

さて、これで本題は終わったけれどいくつか口裏を合わせてもらわないとな……………

「実は父上達には、此処に交流を結ぶのとは別の理由で此方に来るの許可をもらったのです。

それは「モード大公の逃亡先はおそらくここだから、ですよね？」

……………知っていたのですか？」

「ざんねんだけどウェールズ、こいつ等に隠し事するのは不可能だ。」

……どういうことですか？

「なんで俺がこの場にいたか、勿論今此処に研修に来ているのは事実だ。」

だが何で此処に来る必要があつた？」

それは話をするのは一度にした方が良かったから……

「お前が何の話をするのか分からないのか？」

もしお前の目的が此処のやつらとの密約だつたら俺は邪魔もの以外の何物でもない。

もしそんな事になつたら………なあ？」

！！???

「そ、こっちは最初からお前が来ることも分かっていた、お前の目的として最も有力なものね。」

お前がアルビオンを発つ前にはこいつ等にはその情報が伝えられてたよ。

勿論お前のここに来た表向きの情報もね」

「そんなばかな!？」

いくらなんでもあり得ない!!

僕が行動を決めてから実行に移すまで約一日、此処に来るまでに要したのは最新の船を使って5日

計算が合わないなんてレベルじゃない

「どれだけ距離が離れている場所とでも一瞬でやり取りができる。そう言った技術をこいつ等は持っているのさ。そしてその端末をお前の所に侵入しているスパイは持っていた。言葉にすればこれだけのことさ。」

……目眩がしそうだ

なんなんだよそのアジックアイテムは

今までの遠方の最新情報とは、数週間から数ヶ月前の出来事だった物によったら一年以上前なんてものもある

それなのに彼等は一瞬で？

今までの常識が覆ってしまう

彼等は僕達に対して圧倒的なアドバンテージを持っていると言うことじゃないか

「さて、とりあえず結論から言えばあなたの予測通りモード元大公やサウスゴータ元伯爵達は現在この町でかくまっています。

なんなら、会えるように取り計らうこともできますが……………

…あなたは彼等をそうなさるおつもりで？」

.....
.....
.....

ウェールズ皇太子は自分の執務室で父親であり現国王であるジェームズ1世への元サウスゴータ領の定例の報告書を作成していた

数ヶ月前によく作ることの出来たシャンバラとのパイプ

事前情報からも彼等の技術に追いつくのは並大抵の努力では不可能であることはすでに実感していたが、実際に訪れた時に身に降りかかった驚愕の事柄から彼等の持つ技術を超えるのは不可能に近いことをすでに彼は確信してしまっている

しかし、だからと言ってこの先アルビオンを治めることになるであろう自分がそれを指をくわえて見ている訳にはいかない

しかも彼等の持つ科学技術と魔導技術を用いればかなり容易に自国を発展させることができるのは明らかだった

だからこそ、ウェールズはユアン達の提示した条件に一も二も無く飛びついた

そして、それによってアルビオンにも彼等の技術の粋の一端をもたらしことができるようになったのだが……

彼の父親を含めて保守的な貴族が多すぎた

ブリミル教とめっぽう仲の悪いことで知られるシャンバラの技術や人員を迎え入れるのは当然のごとく反対された

なぜなら、魔法全盛のハルゲニアでは科学をそれなりに理解しているのはゲルマニアだけであつたうえ、彼等の技術の概念の中には保守的な彼等には受け入れられない物もたくさんあつたのだ

例えば現存のハルゲニアの工業は、職人たちが一つ一つ作つていくと言うのが普通だ。

そんな彼等に流れ作業や規格なんて概念は存在せず、言つたつて理解してくれない

職人にとっては自分の腕を見せるのが仕事であり、流れ作業ではそんな事は出来ないし

規格なんかなくてもその場で鍊金とかで細かく調整すればいいだろうという認識なのだ

だが、彼等のもつ最新技術は現状ではかけ離れ過ぎて再現不可能に近い

要求されている精度が全く違う。

そしてそれに追いつくために必要なのは技術とそれを物にする職人であり魔法では（訓練すればできるらしいが）不可能、メイジは固定化に専念してもらうことになるのだが、それに納得いかない者がでてくる

今までメイジが作成していた物はあの町では全て『科学技術』で、しかも規格のおかげではるかに高効率かつ安価に作成することが可能になっているのだが、『お得意様の貴族様に売る商品に、手間と金をかけて何が悪い！ 平民？質の悪い出来そこないを安価で売れば十分だろ』みたいな彼等はそんなものを認めようとしらないのだ

外科医療なども忌避される最たる例だろう、なにせあの都市に行つて感覚がマヒしてしまった自分さえ、『体を切る治療法』なんて聞いた当初は嫌悪感を抱いたのだから

エスプリードも相当ヤバかった。

なにせとある情報によると、ガリアの7割がすでに精霊信仰

エスプリード

縁りになってブリミル信仰が薄れているらしい

おかげでシャンバラがブリミル教と険悪な関係になっている半分近くがそれを占めているのだ

アヴァロンが主導している、ハルゲニア以外で主流の魔導にしても、その理論はブリミル教にしたら異端を突っ走っている。

というか、全く違う『魔法体系』を使っている分シャンバラが推進している科学技術よりもさらにたちが悪い。

あんなものが普通に出回っている他の国がウェールズはうらやましかった

この時ほど……いや、それ以前にも何度もあったが、アルビオンが新たなものに嫌悪感を抱きにくいゲルマニアの様な国風でないことをウェールズは苦々しく思ったのだった

だが、だからと言ってようやくここまでこぎつけられたものを手放すなんてことは出来ない

そのためウェールズは苦肉の策として、農業関連の技術を優先的に斡旋してもらい、さらに自分の領地とした元サウスゴータ領を特別区とし、そこにギリギリのレベルまで落とした工業技術や医者達を招き入れたのだ。

それは彼らの責任は全て自分が持つという約束で父上達からようやく手に入れた妥協だった

一方で、交わした際に派遣してくれることになった彼の弟子の一人もその医療集団の一人として入ってもらったことになった

しかしその時は正直ウェールズにとって拷問だった、本人たちは腕が落ちる、直せる人も直すことが出来ないじゃないか、と嘆いていたからだ

なにせ自分が彼女らに頼んでいるのは助かる人物を見すてるということ

それは人を助けることを信条にする彼女らに、その誇りを自分から踏みじれと言っているのと同じことだったのだから

最終的にかなりこちらが折れることにはなったが

だがそのかいあってか
未だサウスゴータ領だけの話ではあるが、其処の経済はかなり伸びた

彼女等と共にやって来た、表向きウェールズが雇った使用人達（領地の持ち主はウェールズであり、彼等はウェールズの命を実行しているとされているが、実際はシャンバラから派遣された者達）が進めたヘリユック商会と共同での領地改革により、税収がはるかに上がったのだ

だが、残念なことに他の貴族達はこれをまねできなかった
彼等の行っている政策はヘリユック商会……シャンバラありきで行っていると言うものが一つ、懇意ではない彼等に支援の様なものは受けられない

他にも、彼等はウェールズが旧サウスゴータ領を半独立区のように扱えるようにしたことで、その特権を利用しまくり

領地のインフラ整備、平民貴族関係無しに裁くと言う制度、平民貴族関係無しの学校など多数の物を続けざまに、同時進行で行った

のだが、

この平民を元来よりはるかに、しかも教育を施させるほど重視するなんてものは彼等にしたら狂気の沙汰の様なものだった

それにどの政策がどんな効果があつたのか分からなかった。

なにせウエールズ自身も現在行っていく改革のメリットやデメリットなどを説明されてはいたが、理解しきれなかったのだから。

しかも、ジエームズ一世もこの発展は評価しているが、正直平民をこんなに優遇するのはどうなのだと考えていたので、国も率先してそれを行おうとしなかった

とどめに、先ほど言ったように、これらの政策はあの大変プリミル教徒と中の悪いシャンバラの二番煎じ

彼等にとってこれらの政策を自分の領で行うことは二の足を踏む以前の問題だったのだ

だがしかし、先ほど言ったようにこの領地の経済は確実に好転しており、他の領地からも民が流入し始め、平民の間でウエールズを指示する声は着実に広まっている。

ウエールズに賛同する貴族も徐々に出てくるだろう

それに最近精霊信仰の教会の問題も解決した

エスフリード

ユアンがウェールズにこれを作る際に言った通り、ブリミル教が自爆したのだ。

巨大な風魔石が鎮座する風の精霊殿とその近くにある『教会』、其処にブリミルの神官がやって来て精霊をさんざん罵倒するようなことを言ったのだが、いつの間にかそこに住んでいた風精霊が激怒し、その神官どころかその周囲、広範囲に住む国民にまで被害をこらわせたのだった

そのため、此処では……いや、ガリアやゲルマニアでも同じようなことが起こったらしいのだが、ブリミル教の地位は以前より落ちた

原因が原因なのでブリミル教は言いだすことも出来ず、又他の貴族達も精霊を敵に回す馬鹿らしさを知っているので特になにも言うて来なかった

その場所の責任者がウェールズだったので交渉役も彼になり、そして結果としてある程度自由に浮遊大陸の進路を決められるようになり、結果としてウェールズの評価が上がることになった

そしてウェールズはすでに脚本を整えていた。
本当はやりたくなかったが最終手段として。

以前より話に出ていたレコン＝キスタなる組織の存在。
その詳細がユアン達よりウェールズの元にもたされた。

アルビオンのほとんどの貴族にはびこっていることも、そして彼等がそう遠くない時期に行動を…… クーデターを起こすつもりなことも

自分の平民を重視する行動が貴族主義な彼等には相容れず、しかも成功したことで彼等の癪に障ったらしい

ウェールズのジョーカ、それは自分が『仲間』^{チーム}の一員であること。彼らは賛同者である僕が消えるのを嫌う、僕がアルビオンを納められなくなるのを嫌がる

それは彼等にとってマイナス要因でしかないのだから

ウェールズの最終手段、それはレコン・キスタの決起を逆に利用すること

その脚本もすでに出来ていた

ウェールズ達以外はごく少数、彼の父親であるジェームズ一世ですら知らない脚本が

決起するであろうレコン・キスタのメンバー達、その規模からほとんどの貴族が此方を裏切るであろうことは予測できた。

なので此方はそれを利用する。

彼等を『仲間』^{チーム}の力を持って鎮圧し、それによって一気に王領を増やし、速攻で改革を行うといった物だった

父上もこれを機に政務を此方に一任してもらうつもりだ

現在レコン・キスタは確かに宮廷ではかなりの噂にはなっていた

が、これといった被害が未だ出ていない。なので、ジェームズ一世含む王宮の執政官たちは余り問題視していなかった。しかしその実情は先ほど言った通り。

彼等を排除するには十分な理由になる

そこでこれをもって、一気に権力をウェールズに集中させ、アルビオンを集権制に移行する

その為の基盤は元サウスゴータ伯領に築いた

全て予定道理に進んでいた

未だ正体を知らないあの、自分と同じ風のメイジである少年が言っていた言葉

モーゼ婦人方達と会話を行っていた時にも話した登った要注意人物。

かれはこう言っていた。

『正義が勝つのではなく、勝った方が正義』
『善・悪・正義などただの後付け、聞こえのいい言葉でしかない』

『やったことが正しかったのかどうかなんて、最終的に決めるのは後の歴史学者達さ』

『だからこそ、私は自分の道を進ませてもらう。周りの評価なんて知らない、やりたいことをやらして貰う。』

ブリミル教の神官たちが聞いたら即異端審問だろうが、確かにこれは真実だろう

事実彼の所属する国家『アヴァロン』は、ハルゲニア以外では知らない物はいないほどの『力』を持っている。

不可解な部分は多々あるが、その原因が彼によるものだと言うことは間違いない。

僕もそれにならわせてもらう

ウェールズの心は決まっていた。

だが一方で

自分の味方の被害は最小限にとどめるようにしているとはいえ、自分の家族さえだますことになる

そのことを考えたウェールズは誰にも気付かれずそつと心の中で息を吐くのだった

欠片 アルピオン（後書き）

次は『ネフテス（ジツチャン）+東方』かな？

モード一行の話をちらっと出す必要があるけどそこは何処にしよう？
本来はこの話の中で出す予定だったのにうまく入れなかった。

そろそろユアンの話に入ります。

今さらですけど、小説って書くのものがすごく難しいですね…
オリキャラ5人の設定は細かいものまで出来ている（というか、この五人（特に二人）が中心人物ですし）のに、その情報をどうやって出していくのかがものすごく難しい。

なんか普通に考えるのが嫌になってばらしちゃいそう。

戦争と言うものは誰かが何かを欲し、それを実現するために起きた過程の一つだ。

聖戦、正義の戦争、言いようは色々あるが、所詮そんなものは後付け。

太古から変わらず戦争とは、本質的にはごく少数の欲望によって起こったものがほとんどだ

今回の始まりもそうだった

ここ数年で一躍、勢力を伸ばした新参者の商会があった
『ヘリユック商会』それが持っている独自の貿易ルート

それを国が欲し、戦いを仕掛けた。
簡単に言えばそれだけだ。

出る杭は打たれると言うもので、もちろん彼等と友好的な組織は

数多くあつたが、

それ以上に彼等を妬み・彼等の排除をもくろみ・彼等の『力』を取りこみたいと欲する者がいたのだ

そして彼等は戦を行つても勝てる自信があつた
その相手はエルフ達であり、手強い相手だとは考えていた
だが

結果はご覧の通りだ

たった一人、そうたった一人だ

黒髪黒眼の人物、此処では特に珍しくもない格好

そして、見るからにまだ成人もしていないような背丈
つまり子供

彼ただ一人によつてロバ・アル・カリイエの幾つもの軍が滅ぼされようとしていた

歴戦をくぐりぬけてきた精鋭集団も

数千から成る大隊も

最新の魔法科学技術の粋を集めて作られた機動部隊も

彼の前では玩具の武器ほどの効果も無かった

彼が腕を振れば周囲の空間ごと歪み吹き飛ばされ
彼が何かを持ち上げるしぐさをすれば地面が傾き
彼が何かを握り潰するしぐさをすれば辺りが粉碎される

地面が割れ、軍が飲み込まれた
不可思議な物体が飛んで来、人が切断されて行つた
爆発が起き、数多の人が爆風で吹っ飛んだ

彼に銃弾が当たらない、届かない
彼の周辺の空間と重力は歪んでいるらしく弾のことごとくが歪な軌跡を描く

彼に向つても見えない障壁に遮られるだけ

魔法も全く効かない
ことごとくがあつさりと防がれ、足止めにもならない
それどころか放った魔法が放った瞬間爆発し味方にばかり被害が出るようになった

彼の近くに寄れない
彼に近づいた者のことごとく地に伏せる、いや、潰れる
まるで何かに押しつぶされたかのように、ぐちゃぐちゃと潰れな

がら地をへこます

彼が手を挙げた、その先には火球

その色は蒼、高温で燃える蒼色に輝く炎の球
はるか上にある筈なのに、その大きさは途轍もない、兵士等を軽
く飲み込むのではないだろうか

誰からでも無くそこを離れる、次々と逃げ出す
もっと早くから離れていた者たちはやや遠くに見える

火球に向かって銃を、魔法を放つ者がいた
だが届かない

逃げ切れないと悟り、急いで自分に、周りに障壁を張る者たちが
いる

だが、彼等の表情は絶望一色だ

そして、少年が腕を振り下ろすと同時に蒼く、幻想的に、荒々し
く燃え、畏怖すら感じるその火球は瓦解した隊に向かい

そのことごとくを焼き尽くした

戦乱は続く

しかしそれは戦争と言うにはあまりに一方的だった
余りに一方的すぎた

彼はただひたすら進んで行く

その前に立ちはだかった者たちはことごとく壊滅した
その戦闘後は天災が降り注いだ後のようなありさまだった

次第に彼に対する攻撃はなくなっていく

誰かが気付いたのだ

どうしてこんなに情報の伝達が良いのか
帰って来た者が皆無の割に、情報の精度は高い
高すぎる

彼の過ぎ去ったあとの村との交信も容易だった

なぜか

答えは簡単だった

彼はただ向かって来たものを排除して進んでいただけだったのだ

彼は向かって来たものだけを払っていたのだ

たかつて来た蟲に殺虫剤を吹きかけたようなものだ

誰だって自分の周囲をうるさく飛び回っていたら駆除しようとする
だろう

それに気がついた上層部は、怒り、さらなる兵力をぶつけた
だが、ことごとくが殲滅された

いつしか、敵対しなければ何もしてこないと云う噂が国中に駆け
巡っていた

彼は普通に飯屋に入り飯を食う、金も踏み倒さない、きちんと払う
彼は普通に宿に泊まった、寝込みを襲うようなやつらがいれば宿
に被害が出たが、宿がグルではない限り彼は賠償金を払った。お
つりがくるほど。

彼は敵意を持ってこない限り、報復はしなかった。

子供がぶつかつたとか、不注意で服を汚されたとか、そんなものでは起こらなかった。

彼のことを知らない子供達と遊んでさえいた。

事実そうなのだからそれが確かな情報だとささやかれるのは時間の問題だった

焦った上層部は彼の殺害により力を入れた

しかし、それをすればするほど上層部から民の心は離れて行った

しかし、上層部の者たちに止めることは出来ない。
ただ手をひっこめれば、自分達のメンツにかかわる
なにか、その理由づけをする物が必要だった

だが、敵対側にそれとして利用できる物が無かった
そして責任のなすりつけ合いが、内部で起こり始めた
上層部はガタガタになって行った

そして……………

「やあ、兄さん」

「ユ…………ユアン…………お前なのか…………？」

どうして…………「決まっているじゃあないか」

「兄さん達が宣戦布告した商会はね、僕が作って、俺達が育て上げた商会なんだ。」

俺が出てくるのは全くもって自然だよ。」

「な……………」

「で、僕一人だけが来た理由は、人間が始めたことだから人間が力^{はく}タを付けるのが普通かなって思ったのが2割ぐらいと」

ニツコリとほほ笑む

「後はまあ、僕の憂さ晴らしとか、復讐とか、俺の力試しとか、まあそう言った個人的な有象無象^{どうでもいいこと}かな？」

「お…………お前は、本当にあのユアンなのか？」

「そうだよ？ 兄さん。 まああの後母さんは死んじやって、僕も死にかけてね、なんか人格が再構成されちゃったけど。 俺は間違はなくユアンだ、兄さんにとって重要なのはこの点に尽きるよね」
「ヒイツ」

笑いながら手を兄さんに近づけると、兄さんは尻餅をついたまま下がるうとする

けどすぐに行き場がなくなる

そっち側に出口はない、此処は地下に作られた脱出道、けど俺は

それを察知して遠距離から出口を潰してある

悠々と俺は白からこの通路を通って来た

兄さんを助ける人はいない

立ちはだかった者たちはことごとく、俺に触れる前に地にしずんで行った

俺に敵対しようとしなければ俺の横を通り抜けて、攻撃されることも無く逃げれると気付いた奴がいた

『一切敵意を持たないこと』が条件だから狭き門だけど、それでもいた。

だが、そいつらはもう俺に歯向かわない。

文字道理、俺に対する敵意・殺意は完全にへし折られてしまっているのだから。

それにしても、ここ数年で俺と僕の人格は完全に混ざりあって『俺』になったと思ったけど、完全では無かったんだな。

いや、それとも、一方の感情がより高ぶった時こういうことになるのか……まあ、今はそんな事はどうでもいいか

今は

「家を追い出されたことも、僕を殺そうとしたことも、兄さんのせいで母さんがあんなふうに死ぬことになったのも……まあ、良い

よ。

言ってしまったら、どうしようもなかったんだから、受け入れる
しかなかったんだから。

でもね」

兄さんの頭を両手で持つ

兄さんは恐怖で震えている

駄目じゃないか兄さん、兄さんは自分が力を手に入れるために沢
山の人を不幸にして来たんだ

だったら、自分もそれが降りかかって仕方が無いと………どっ
しりと構えて無いと

「もう僕は……俺は、奪われるだけの存在じゃあないんだよ？」

腕に力を込める

兄さんの眼が絶望に染まって来た

俺の故郷だと『死神の近付いてくる気配がする』ってかんじかな？
僕の場合だったら………まあ、どうでもいいか

更に力を込める

「イあ………助け………」「じゃあね兄さん」

そのまま首をひねる

兄さんは普通は発しないような声と音を出して崩れ落ちた

.....ふうん.....

此処に来るまでは直接手を下したって感じじゃなかったから何も感じなかった、

だから前の、そして今回の、全部の元凶となった兄さんは直接僕の手でダイレクトにやってみただけど.....

想像している以上に興奮しているのかな？

思ったほど何も感じないものだね？

そう考え、踵を返して通路に戻る

「金銀財宝、技物の刀剣類に竜の骨で作った細工……これといった物はないな」

交渉後、手ぶらで帰るのもなんだから何か興味の引かれそうな魔道具とか、本とか、物体のか無いものかな？と宝物庫をあさる。

特にほしいものも無かったから、賠償の一つとして認めさせた

剣には個人的にひかれる思いはあったが、もうすでに自分用のは持っているしこれ以上増えても荷物になるだけだ

前世では日本刀とか甲冑とか、コレクター品として収集してる人達はいたけど、やっぱり道具の本質は使うこと、装飾用に作ったのはともかくとして、やはり武器として作られたのなら武器として使うべきなのだと思う。

それがこれ以上使用に耐えられなくなったり、歴史的価値があるなら話は別なのだが

まあ、そんな感じで無駄に武器を収集する気は俺には無い、自分が使う分だけ持っていれば十分だ

ゲートオブバビロン
王の財宝が使えるなら話はべつだが、あいにく俺はそんな異能は持っていない

まあ、実は将来的に良く似た魔法は開発する気なのだが……あ

れの応用で空間を操ったら可能なはずだし



まあ、この時俺は、実際は何か見つけることを余り期待していなかった

エルフって言う、魔法……と言うか精霊と共に歩んで来た種族と過ごしてきたから、興味の引かれるマジックアイテムが出てくるとは考えてなかったし

『歪』はハルゲニアを中心として展開しているからこっちの方では大した影響は出て無いと考えていたから

だが、俺は此处で見つけた

273

だが存在してはいけない筈のものだった

近くによる

手に取る

ページを開く

俺が思っていたものだった

ページを…… めくって行く

最後のページ…… あいつが書いた『手紙』
いや、彼女が書いたであろう『返事』

そして始皇……

「……………は……………」

唇が引きつる

その隙間から、笑い声が漏れ始める

「あは……は」

涙が流れ始めた

頭の中がぐちゃぐちゃになりそうだ

[illegible]

宝物庫の中に、俺の笑い声が響き渡った

俺は笑った、笑い続けた、笑うしかなかった

[illegible]

やがてそれも収まり、管理人の方を見る

管理人が顔を引きつらせ「ヒッ」と声を出した後ずさった

ひどいな、俺がどんな顔をしているって言っん……………ああ、目を
真っ赤にはらして、涙とかでぬれた顔に引きつった笑みを浮かべて、
唇を震わしているって感じが

……………まあいいや

「これ、もらっよ……………」

そう言って、管理人の横を通り、宝物庫を出、『家』に向かう

この日、この時

俺は『復讐』を誓った

それが全てになった

欠片 ユアン2（ディオとの出会い）

これはユアンがハルゲニア地方へ向かう半年ほど前のこと

S i d e ジーニアス
I n ネフテス

なんじゃ…………こいつは

「かくして貴方は真実を知り、人生をかけた指針を決めた。
おめでとう、ようやく、よくぞここまで辿りつかれましたね」

ぱちぱちと味気ない拍手をする人物を見る
もう一度言おう、何なのじゃこいつは

「ふふふ、はじめまして。ユアンさん」

ワシの隣に立っておる少年ユアン。
彼が先程帰って来た。

先日、ユアンが東方に向かった。
彼の母親と懇意だった者達とで結成した彼の商会『ヘリユック』。
その構成員たちが言われもない罪で殺され、更にいくつかの支店が
徴収された。

そして、在りもしない罪を着せ、東方の国々は『ヘリユック商会』と
敵対した。

理由はまあ、明確じゃった。
東方はたった数年で急成長した『ヘリユック商会』を妬み、危険視し
たのじゃ。

ユアンの言葉を借りれば、人の業の何ともまあ恐ろしいことよと言

ったところか。

そしてユアンは東方に向かって、帰って来た。

だが何処か雰囲気が変わっていた。

隠しているようだが、それでも何となく分かる。

その事を言うと、ユアンは何も言わずわしに倒れて来た。
静かに涙を流しているらしく、わしは黙って抱きしめてやった。

そして幾ばくか、ユアンは頭を上げワシに行った。

「ハルゲニアに行かせてくれ」と。

ワシは隙にすればいいとそれを了承した。

そしてそこに味気ない拍手が響き渡った。

やって来た、いや、『来ていた』奴を見る。

何時からいたのか全く分からん、全く気がつかなかった。

「聞いたことない名だな。ハルゲニアのやつか？」

「出身はそこだね。でも残念、俺はもうそこは捨てた」

とても小さい背丈、そして声変わりもしていない。

どう考えても5歳ぐらいじゃ。

なのに、何故か本能がそれを拒絶してしまう。

視覚と感覚と認識が一致せん！！

「捨てた？」

「まあ、色々あってね。そこはほら、こんなご時世だし。色々な悲劇や喜劇があるってものだよ。巻き込まれた方はたまったものじゃないけどね」

フードに隠れて、どんな顔なのかは分からんが

だが、あいつの口元が三日月のように歪んでいるのは分かる

なんじゃ、何がそんなにうれしいんじゃ

「で？」

「うん、それでね。それから僕はまあ色々やってここから西の方、ハルゲニアを超え海を渡ったその先にある大陸。そしてここから南に位置する大陸。この二つでまあここ数年色々やって来てね。それなりの規模と人脈とか持つてるんだけど、どう？取引しない？」

不気味じゃ
気味が悪い

「取引だと？」

「そう、取引。色々と提供したり買ったりしてくれる代わりに此方も色々と優遇したり提供したりしてあげるよ？……………例えば君の協力とか」

「へえ…………」

ギイユン

不可思議な攻撃をユアンが放つ

「な！？」

だが、それは子供に届かなかった
届く前に霧消した

あり得ん、あれはもはやワシ等の誰も防ぐことのできない物だぞ！？

「いきなりですね」

だが、それをあの子が平然と打ち消した。
ユアンの眼が一層険しくなっておる。

「ではこちらも」

周囲に力が満ちているのが分かる
あれは精霊魔法……………ん？ まて、

「精霊魔法……………じゃと？」

あり得ん、此処の契約者はユアンじゃ、それ以外はしておらん。
実際、今彼の周囲にいる精霊達の契約者もユアンじゃ。

「ほら」

「な！？」

驚くのは何度目じゃ！？
理解を超えた『ナニカ』がユアンを襲った。
精霊魔法かと思ったが違うのか？

いや、しかし……………

「……………へえ、面白いものを使うね」

「おほめに預かり至極光栄。でも君だってすぐにできるようになるでしょ？」

僕の奴見て、もう理解しちゃったみたいだし」

「……………」

「……………」

「……………率直に聞く、なにが目的だ」

「とある人物への嫌がらせ。そのために、君を利用させてもらいたい」

「俺の邪魔をするのか？」

「いやいや、まさか。君の行動のその先に、僕の目的を遂げる物があるんだよね」

だからそれまでの共同戦線？」

「……………」

「……………」

「俺、お前のことは隙になれそうに無いな」

「僕としては適度に仲良くはなりたいけどね……………ビジネスパートナーとしては」

ギィヤアア

ユアンが再び攻撃する。

それは先ほど少年が行った攻撃と同じ、精霊魔法に似て非なる何かだった。

予備動作なしに放たれて攻撃は、またもや一切の動作もなくいなされた。

「てめえの名は？」

「ディオ。ディオ〃エチユス〃ノア、どうぞよろしく」

子供、いや、ディオはそう言って恭しく頭を下げた

欠片 ユアン2（ディオとの出会い）（後書き）

欠片編もこれで終わります。

次はガリアに戻ります。

少年ディオ、この話で片鱗が見えますが、今作のキーキャラかつ最強の人物です。

出番は終盤までほとんどないけどね？

9 各自の思い

「A12より伝達、『ディラン伯爵領』にて先日集合していた反乱軍が行動を開始した模様！！

005班・152隊は作戦『ホロウ113』を開始しました」

「G03〓07部隊より伝達、作戦完了。死者0、重傷者0。軽傷者G03・5名、04・3名、06・7名、07・4名です！！」

「此方本部、これよりG04・05はリュテイスへ向かい待機。G03および06は帰還、ポイント009へ飛行艇を回します。007はアヴェリア領へ向かってください」

「『フラスコ』より伝達、『織姫』のチェックが終了。第4フェイズへ移行開始の準備を要請されました」

「了解、D・Eは端末を解放、リンクを開始・及び調整を開始して下さい」

『了解！！』

「005隊より伝達、殲滅終了。結界型精神錯乱装置の実戦使用は成功。但しやはり効果及び時間に個人差が見受けられた模様。『フラスコ』に実験データを転送します」

.....

「解放完了、予定道理敵方は水に吞まれたようです」

「周辺への被害、予定範囲内。あふれた水も川へ引いて行っています」

「027班は装置の解体・隠蔽に入ってください。」

終了後、すぐさま撤収を。その後009班・101隊と合流しポイント034に集合して下さい。

監視衛星の調子はどう？」

「やはり狭囲の監視はやや困難ですが、それに目をつむれば完璧です。」

自動追尾・解析装置共に異常は見当たりません。他、収集装置との連携も十分に強要範囲内です」

「なるほど。ではこれより中央作戦本部体制は第4フェイズへの移行を最終段階に移します。移行、出来るだけ速やかに終了するように」

「はい！-！」

.....
.....
.....

…… シャンバラ地下、第一作戦司令室

「しかしなんというか、こつも圧倒的だとあつさり過ぎて物足りなさを感じるな」

指令室全体を眺める二人、一方はため息をつく

「たしかにそうです。しかし、だからと言ってこちらは加減をする気はありませんがね。」

それに返すもう一方。

疲労からか、20も行かない内からやや白髪が見え始めたクリーム色の髪を梳く。

シャンバラの機能を統治する者の一人、『ヘクター』ジャック・レイモンドだ。

「負けることは無いとは思いますが、だからと言って加減をしたせいで予想以上の、予想外の被害を受けては笑えません。堅実に、確実に、状況を進めていきましょう」

「もちろんだ、目的達成の足がかりの土台でしかないこんな場所で躓いてたまるか」

椅子にもたれかかり、それにしてもと呟く。

目の前で展開されているのは既存のハルゲニアの常識をぶち壊す戦い。

圧倒的な武力を持ちながら、あたかも運が味方かしたから勝った。不測の事態で負けた。

それが無ければ此方の勝利は確定した！！と誤解できるような戦法をとる者達。

あつという間に相手を殲滅する、想像を絶する様々な兵器。

そして、それを偽装する工作班。

『傭兵』に頼らぬことによって可能になる、完全少数精鋭に特化させた特殊戦闘部隊。

一方で手軽に使えるながら歴戦の魔法使いを上回る戦火を一瞬でたたきだせる兵器軍。

そしてその使用どころか存在すら漏らさないようにする工作部隊。

相手の正確な情報を様々な方法で手に入れ、最新のシステムで逐一報告させ情報収集し、一方で誤情報をつかませ敵方を意のままにあやつり、一方で『領民』、つまり民へ様々な噂話をばら撒き、敵方から心を遠ざけ、更には反乱すら起こさせる。情報機関の運営。

未だ伝書フクロウや手紙が最新の最速の伝達手段であるハルゲニアでは到底太刀打ちできない情報統制力。

『武力』同士の戦いが戦争の全てだったハルゲニアでは予想する出来ない『ぶつかり合う前に勝負は決まったも同然なんだよ』を地で行く、相手を負かすのではなく確実に『勢力』をそぎ落とし根絶やしにするような戦法。

『正々堂々？何言つてんだ。敵の裏をかいてこそその戦術というものだろう？』を地で行く戦法。
裏をかくどころか操り人形のごとく踊らせているのは言わずが花なのか。

戦略も戦術も戦力も、もはや両者の間には如何ともし難い明確な差があった。

それを一切感ぜさせることなく事を運んでいた。

「情報の大切さは予想し理解してはいたが、これほどまで化けるとはな。

技術と言う物もちろんあるが、それを差し引いても此処まで影響を与えられるとは。

もう一つ《……》の世界もこのような物であったのだろうか
な？」

「おそらく。情報に満ちたどころか、寧ろ氾濫している社会と聞いていますから。これの比などでは無いでしょう」

「ふむ、いつか見て見たいものだな」

「同感です」

青髪の青年——ガリアの現国王、ジョゼフ一世——は更に深く椅子に座った

「まあ、少なくとも今は恩恵を一身に浴び、最大限に享受させてもらうとしよう」

「それが一番の選択でしょうね」

目の前では又一つ作戦が成功したという報告が舞い、画面の向こうでは無知なる哀れな子羊がその代償を払わされていく映像が流れていた。

そして

——浮遊国家『アヴァロン』

とある海洋上を進行する宙に浮かぶ複数の島とその中央にあるひときわ大きな島。

一つの大きな都市とそれに付随するような形態となっており、同時にそれがアヴァロンの全てだった。

全ての陸地面積を合わせても、辛うじて小国の大きさは超えても国家を超えるほどは無い。

あのトリステインよりもはるかに小さい。

アヴァロンが国家よりも『学術都市』と言われる方が多い最大の理由だ。

しかし、たったこれだけの規模でありながら此処『アヴァロン』はここ数年でこの世界『レディアント』では相当名の知れた国家へとなっていた。

建国からようやく十年経とうとしているかどうかと言った短期間でもはや『世界』が無視できない国家となっていた。

『魔導技術』、たったこれだけによりこの国家は世界で一躍有名になったのだ。

たったこれだけの理由で、此処『アヴァロン』は学術都市では無く、一国家として世界に認められるほどの物になっていたのだ。

たかが技術、されど技術。

『現状』と言う物には決して満足をしない人だからこそ、『楽』を求める人間だからこそ、『技術』は喉から手が出るほど欲しいのだ。

安全を、優位を、満足をより大きくするには『技術』は不可欠だ。

そしてそんな技術のほぼ全てにおいて満遍なく、『アヴァロン』は周囲よりも突出していた。

それは嗜好品から………戦略兵器まで。

無論他国だってそれに対し指をくわえている訳ではない。
開発合戦を行っている。

そして数度に渡りアヴァロンを自らの陣営に組み込もうとした。

しかし、とある事件よりそれは無くなった。

もはや、それまでの単なる武力をぶつけ合う単なる『戦争』を行う時は終わったのだ。

『大量破壊兵器』、それをアヴァロンが完成させ、とある戦線に投入してから。

それは今までの常識を覆すものだった。数百数千から成る魔法部隊がひっきりなしに大規模魔法を唱えてやっとな創りだせるような惨状をいとも簡単に創りだせるものだった。

更にそれを数多に投入、終いには概念だけとはいえその設計法を世界に公開したのだ。

これにより今後の『戦争』の幕開けは、同時に嘗て無いほどの被害を出し、今まで想像だになかったほどの惨状を作り出すと世界に知らしめてしまったのだから。

概念が公開された以上、他の国も似た者を作って戦争に投入していくのは目に見えていたし、何よりも概念を公開した以上つまりアヴァロンにはこの兵器に対する防衛策は為されており、しかもこれを遥かに超える兵器が開発されている可能性を暗に示したのだから。

さて、そんなアヴァロンの中心にして心臓部の一つである統括理事会の会議室では数名の者達——統括理事会の中でも他のメンバーは

知らぬとある理由で選ばれた者たち——が『秘密情報機関』S I S
『』から上がってきた映像を見ており、そしてそこにはこの国を作
りあげた人物ディオ・エチユス・ノアがいた。

『情報を漏らすなどあり得ない』者しかいないためか、何時もは目
深にかぶっているフードを珍しく下ろしている。

「ふふ、ついに監視衛星まで可能にしたか。これだと衛星兵器を実
戦配備するのもそう遠くないかな？」

紅い目と黄緑色の髪、目元には紋が刻まれ、口元にはそれこそ『無
垢な子供の様な』笑みを浮かべている。

13歳と言う年齢を考慮しても未だ幼さを十二分に残しているその
容姿は着ている色褪せた草色のローブととてもよく合っていた。

「ディオ」

にこやかに笑うディオにかかる声。

白ひげをやや蓄えた五・六十代と見える老人。

『アヴァロン』統括理事長、つまりこの国の現国王と言える。

「ん？」

「お前があそこ手を組むことにワシ等は特にする理由も思い当た
らんかったし、それ以前に一切反対する気はなかった。なにせこの
国はお前の『箱庭』なのだからな」

『浮遊都市』であり『學術獨立國家』であるアヴァロンとはつまるところ、たった一人のエゴによって生み出された小さくも強大な箱庭。

それを知る人は限りなく少なく——もし知ってもそんな馬鹿なと一蹴するだろうが——此処はただ自分に都合がいいように、ただ自分の意のままに動く手足が欲しいという一人の子供の子供じみた無垢で残酷なエゴによって作り上げられた歪な国だ。

それはあまりに歪み過ぎ、周回し寧ろ正しいように見えてしまっている。

まあ、そんな事を言えば今彼等の前に表示されている都市『シャンバラ』も大概なのだが。

複数名か個人かと言う部分を除けば同じようなものだし。

まあそれも理由を考えれば一仕方のないあたりまえの事なのだが。

はつきり言つて此処までの規模になった以上、対外に対する『名目』と言う物は必要で、予想道理の当たり前のことではあったがデイオは『大々的に我を通す』訳にも行かなくなっていた。

勿論、この国の政治体制は一応民主主義型王政なので『国王』と言う立場になればいいのだが、一今はする訳にはいかない《……………》。

と言うわけで、統括理事会と言う言つなれば国会の様なものトップ、つまり国王に『ガイアス』オリヴァルト『ホーエンハイム』を置き、さらにデイオ自身はその『全権を委託された相談役』という形を作っていた。

はつきり言つて馬鹿にしているのかとも言えるような無茶な方法で

はあつたが、それが罷り通っている時点でこの国の歪さは途方も無いものだ。理解は出来なくても予想はつくようになっただろう。

「だがそれでも聞いておきたい。どう言うつもり……いや、違うな。一体何をしようとしているのだ？かの国へ対する嫌がらせが目的だと思って、違ったのか？」

「うん、間違つてないよ。昔も今も変わらずそれが今の一番の楽しみだ」

後は人生楽しく充実して過ごすことねと締める。

「では、今回のこれは一体どうことなのだ？この結果を見れば此方もかなりの利を得たし、おまえの『あれ』ならばこの状況を予測出来ていても不思議では無い」

微笑みながら続きを促す。

「しかし、それ以上に無駄がいくらなんでも多すぎる。特に『仲間^{チーム}』への参加。全くと言っていいほど必要が——いや、寧ろやり難くなつたはずだ。それが分からないわけがないだろう。何がしたいのだ？」

ガイアス自身、ディオの事は信じているし此処にいる他の者も同じだろう。

『計画』をみても、特に反論する点はない。

しかし、この一点だけは訳が分からなかった。なぜ『一切の利点が無い不利益』を行うのか。

だまってディオを見つめる面々。

それに対し、ディオは幼さの残る顔で苦笑に歪め

「強いて言えば——ケジメ、かな」

肩をすくませた。

9 各自の思い（後書き）

ひたすら伏線をはるのと、とある貴族の話でユアンがした事。

余談

科学と魔導は簡単に言えば魔法に対するアプローチ以外は同じです。簡潔に言えば科学はあくまで『エネルギー又は手段』として重要視し、魔導は『魔法の現象』を重要視することでしょうか。

例えば衛星兵器だと両者ともに持つことになりましたが、ユアンは『魔法はあくまでブースター』としてしか利用しておらず、ディオの方は『衛星その物を一種の魔導具』として作成しています。

あくまで『地球の科学的』に開発しているのか、『魔科学的』に開発しているのかという違い。

反乱軍 V S ユアン達

伝書梟 V S 電話もどき

目視 V S 監視衛星

剣・槍 V S ガトリングガン（魔弾）

肉壁 V S 鉄砲水（魔法？対処できるやついんの？）

一個軍隊vs一対軍結界型精神錯乱装置《仲間割れ発生装置》
時速せいぜい6・70キロの飛空艇vsレーザー兵器による火災発
生作戦

これなんて無理ゲー？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0777p/>

Things as they should be are

2011年11月10日20時09分発行